

国士館史研究年報

楓

FUGEN

原

2025

第17号



学校法人国士館

Kokushikan



国士館史研究年報

楓

FUGEN

原

2025

第17号



学校法人国士館

Kokushikan

## 『楓原』<sup>ふうげん</sup> 名称の由来

本誌の由来は、創刊号（平成22年3月）の巻頭言「『楓原』を繹<sup>たず</sup>ねる（室長阿部昭稿）」を抜粋し次に示す。

百年史の編纂を進めるにあたり、調査・研究した成果を発表、蓄積するため、年ごとに「国士館史研究年報」を公刊することにした。年報には「楓原」<sup>ふうげん</sup>の愛称を付す。「楓」は創立者柴田徳次郎が国士館教育の象徴として、校章や校旗の意匠に用いてきた。「原」は湧き出たばかりの泉を意味し、ものごとの起源を表す。すなわち「楓原」は国士館教育の淵源を意味する。

# 国士館の

## 「戦後80年」

1917(大正6)年に創立した国士館は、1929(昭和4)年の専門学校の創設によって、文武両道の校風を確立する。国語・漢文・武道の修学と寄宿舎生活により、特色ある教育は花開いた。

戦時色は次第に濃くなり、戦時統制の強化が図られると、国士館においても例外なくその影響を受ける。教育の状況は一変し、勤労働員、繰上卒業、学徒出陣などによって、学生・生徒の学問の場は奪われていった。また国士館にとっては、1945年5月25日の世田谷空襲によって、ほとんどの校舎を焼失することになった。

戦後の占領期においてもその影響は大きく、国士館の復興への道のりは、長く険しいものであった。



富士山麓での教練のあと(1941年頃)

## 戦時統制のはじまり

1937（昭和12）年の日中戦争以降、日本は次第に戦時統制の強化が図られていった。1941年8月、学校教練や勤労働員などを円滑に遂行するため、学校報国団や学校報国隊の組織化が求められ、国士館においては、校長・柴田徳次郎を団長とする各隊が編成された。教練の時間は増加し、また造船所などでの軍需工場に動員される機会も増していった。

1941年10月には、修業年限の短縮が開始され、各学校で「繰上卒業」がはじまった。国士館においても、1942年3月の卒業予定者は3カ月短縮、翌年3月以降は6カ月短縮となり、教育の場においても統制を受けるようになった。



報国団結団式（1942年頃）



学校教練 (1942年)



報国隊腕章 (1944年頃)

## 戦地へと向かう学徒

戦局の悪化を受けて、政府は1943（昭和18）年10月、学生・生徒の徴集猶予措置を停止して、在学期間中であつても卒業を待たずに徴兵できるよう改めた。そして第一回の学徒兵入隊を前に、東京では明治神宮外苑競技場で、出陣学徒壮行会が開催された。「学徒出陣」の開始である。

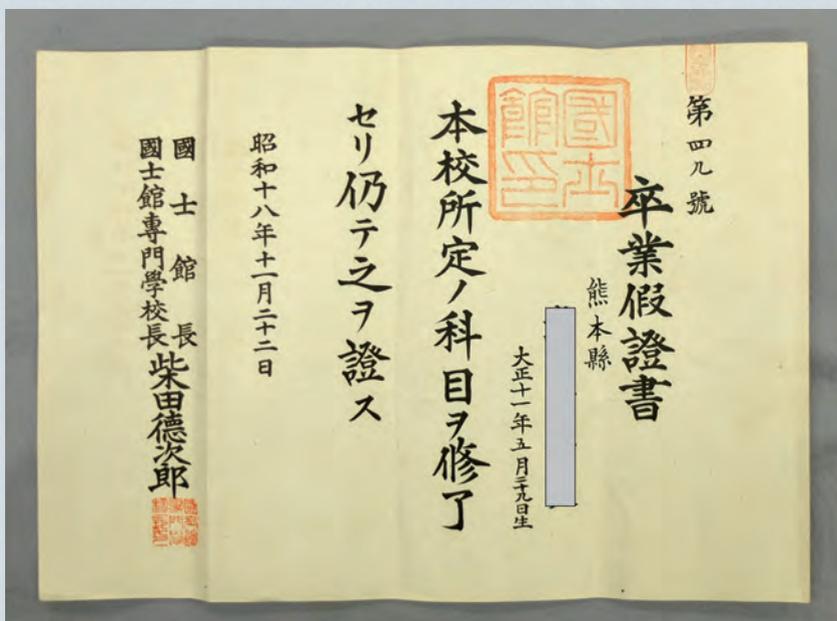
国士館においては、11月20日、恒例の運動会に代えて、出陣学徒壮行大錬成大会と謳った壮行会を実施した。22日には、剣道場での壮行会を挙行して、在学中であつた学生らを戦地へと送り出した。陸軍には12月1日、海軍には12月10日の入隊と定められ、召集を受けた学徒らは、学友から贈られた出征旗を携えて出征して行った。



出征旗（1943年頃）



学徒出陣壮行会 (1943年11月22日)



卒業假証書 (1943年11月22日)

## 世田谷空襲と校舎焼失

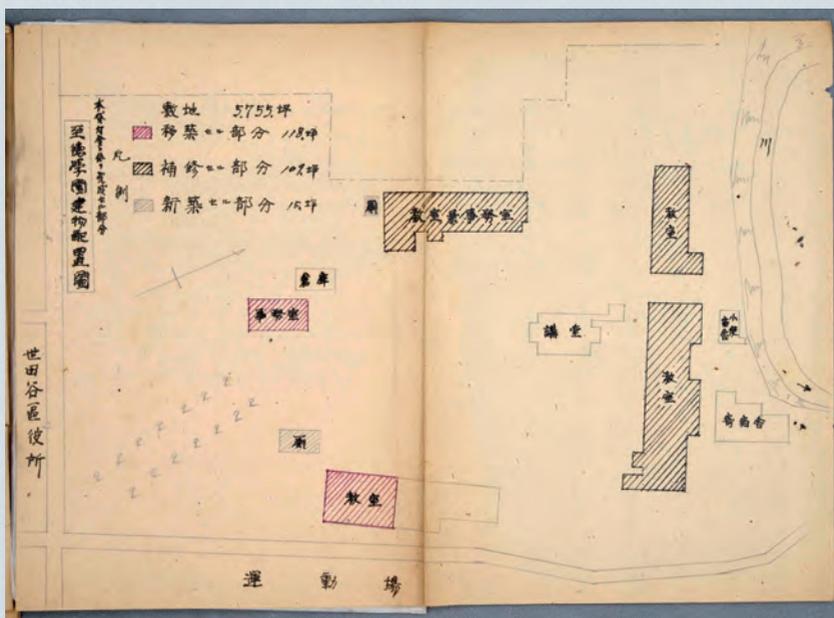
1944（昭和19）年11月頃から、B・29爆撃機による空襲は本格化し、やがて市街地へも無差別的な焼夷弾投下が実施されるようになった。東京では、1945年3月10日と5月25日の空襲が大規模で、それぞれ甚大な被害を受けた。

世田谷周辺も被災した5月25日の空襲は、国士館の校舎を焼失させた。教育組織の進展とともに整備してきた中学校校舎、専門学校校舎、弓道場、寄宿舎など、ほとんどの施設を失った。学生や教職員の必死の消火活動もあり、かろうじて1949年完成の大講堂は難を免れた。

焼失した寄宿舎生活の学生は、戦時下の物資不足のなかでさらに苦しい状況に置かれた。そして校舎の焼失は、国士館にとって苦難のはじまりであった。



罹災証明書（1945年5月）



焼失後の校舎配置図「戦災復旧書綴」(1950年頃)



焼失後の運動会(1946年)

## 戦後の復興と再建

敗戦後の日本は、GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の占領下に置かれた。占領政策は、軍国主義的な要素を払拭するものであり、新憲法の制定をはじめとした諸改革が打ち出された。

その教育改革によって、国士館においては、武道教育の禁止、至徳学園への校名変更、校長・柴田徳次郎の公職追放など、大きな影響を受けた。さらには校舎焼失後の復旧は、物資不足の影響からなかなか進まず、苦しい状況は長く続いた。

1952（昭和27）年8月、「国士館大学維持委員会」の発足で、国士館の再建は進展を見せはじめる。1953年4月には、「国士館」への復称とともに、国士館短期大学を創設し、その後の総合大学への歩みを進めていくことになる。



復員した学生たち（1946年）

## 巻頭言 国士館にとっての新しいフェーズが始まる年に

国士館史資料室室長 長谷川 均

二〇二五（令和七）年は、社会全体においても本学においても、喜びよりも喪失や変化を強く意識させられる一年であったように思われます。そのような中で、国士館にとって新たなフェーズの幕開けとなる重要な転換点を迎えました。

年頭には、長年にわたり学校法人国士館を力強く牽引してきた大澤英雄理事長が逝去されました。学長、副理事長、理事長として示されたその指導力と功績は、今日の国士館の礎として深く刻まれています。その志を継ぎ、瀬野隆常任理事が新理事長に就任され、また教学面においても体育学部の田原淳子教授が第一三代学長として就任し、本学初の女性学長が誕生しました。

こうした新体制のもと、世田谷キャンパスでは環境整備事業が本格的に始動し、将来を見据えた学びの場の再構築が進められています。その中には「博物館構想」も含まれ、建学の精神や一一〇余年に及ぶ歴史、日本人の精神文化を次世代へ伝える拠点づくりが構想されています。

国士館史資料室は、これまで以上に教育・研究・社会連携の要としての役割を果たしながら、新たな時代にふさわしい継承と発信に向けて準備を進めています。国士館が次の一〇〇年へ歩み出すこの節目に、皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

二〇二六年三月吉日

## 鎮魂 大澤英雄前理事長

学校法人国士館

理事長 瀬野 隆

療養中、「もうすぐ元気になって戻る」。

お会いする度に、そのように話されていた大澤英雄前理事長の「待っていてくれ」との言葉を、私は本心から信じて、その日が来るのを疑っておりませんでした。しかし、その日は来ませんでした。

その生涯を通して、創立者柴田徳次郎先生が育てられた国士館大学第一期生としての誇りと、創立者からの負託に応えることに、一貫してその姿勢を堅持されていたのが、大澤先生でありました。どんなことが起ころうと、最後は自分が責任を持って徳次郎先生の期待に応えなければならぬとの覚悟を、常に保持されてきた理事長でした。それだけに、国士館には「国士館」としての筋の通し方がある、そこから外れては私学国士館でなくなる、という信念を、長年にわたって国士館の歴史に刻み込ん

でこられました。

創立から一〇九年目を迎える国士館の歴史を顧みれば、創立の当初から常に順風満帆というわけではありません。それらの困難な状況と経緯を振り返れば、洪沢栄一から安倍晋三まで、多くの著名な政財官の各界から様々な支援や協力を本学は得てきました。それを可能にできたのは、創立者柴田徳次郎先生のミッションであり、またパッションでもあった国士館の建学の精神でした。徳次郎先生の「興国救民」の願望が、国士館の創立とその歴史に通底する思想でした。そして、この精神が「国を思い、人と社会を支えうる人材の育成」を目的とする教育機関の創設と、その後の展開の礎となってきました。

大澤先生が、その徳次郎先生の掲げた建学の理想を受



け継ぎ、その精神をより普遍的なかたちで、世の中に展開しようとしたのが、体育学部における武道学科とスポーツ医科学科の増設、さらにこどもスポーツ教育学科の新設でもありました。心身共に健全でたくましい人間でなければ、人と社会を支えることができない。そのためには武道・スポーツの振興が重要であり、それは子ども達にとってもスポーツを通じた教育が有効である、との判断でありました。一九九二（平成四）年に実行された体育学部の世田谷キャンパスから多摩キャンパスへの移転は、その展開のためにはどうしても達成されなければならぬ必要不可欠な条件でした。

「困難であれば困難なほど、それだけ一層やる価値があるのだ」との大澤先生の独り言のような信念を、私はたびたび聞きました。

今、激甚たる自然災害と少子高齢化時代という困難に直面しているのが、日本社会といえます。幕末に、西欧諸国からの植民地政策に真っ向から立ち向かい、日本の独立と大和魂を主張したのが吉田松陰ではなかったのか。ロシア革命後の大正デモクラシーの真中に西洋の物質文明に対抗して、自由の尊さを説き精神文明の堅持と

国士館精神を訴えたのが柴田徳次郎ではなかったのか。そして、昨今の日本が抱える数々の困難を乗り越えようと、救急救命、武道・スポーツ、そして児童期におけるスポーツに向けた「教育」の重要性を主張したのが大澤英雄という人でありました。

大澤英雄前理事長を本学が失ったことは、単に国士館だけの損失ではなく、現代日本の行く末にとって、大きな希望の喪失ともいえます。残された国士館関係者は、このことを心に留め、前理事長が生前に叶えようとされていた夢を叶えるために、何をしなければならぬかを熟慮しなければなりません。

高い志をもって国士館に入学してくる学生・生徒たちに、「最適な教育研究環境を整備したい」、これが大澤前理事長の最後の夢でありました。

令和八年一月

大澤英雄先生 略年譜

西暦	和暦	月	年齢	年譜
1936	昭和11	1月	0	北海道函館市に生誕(22日)
1949	昭和24	11月	13	中央中学校でサッカーをはじめ
1954	昭和29	3月	18	函館有斗高等学校(現・函館大学付属有斗高等学校)卒業
1956	昭和31	4月	20	函館税関勤務(約10か月で辞職)
1958	昭和33	春	22	国士館短期大学体育科(3年制)入学
1960	昭和35	4月	24	国士館大学サッカー部を創部
1964	昭和39	10月	28	国士館大学の創設で体育学部へ編入
1974	昭和49	4月	38	国士館大学体育学部卒業(4日付)
1977	昭和52	8月	41	国士館大学に入職(後に体育学部助手)
1981	昭和56	4月	45	国士館大学体育学部助教授
1982	昭和57	12月	46	全日本少年サッカー大会(第1回)実施委員長
1983	昭和58	10月	47	国士館大学体育学部教授
1992	平成4	4月	56	大学サッカー部を優勝3冠に導く(春季対抗戦・リーグ戦・インカレ)
1999	平成11	1月	62	学校法人国士館評議員
2000	平成12	5月	64	国士館大学体育学部部长(2001年3月)
2002	平成14	4月	66	全日本大学サッカー連盟理事長
2003	平成15	12月	67	日本サッカー協会(JFA)理事
2004	平成16	12月	68	学校法人国士館理事
				国士館大学学長(2006年11月)
				大学サッカー部部長
				同部部長解任
				日本サッカー協会・全日本大学サッカー連盟の全役職を辞任
				国士館大学名誉教授
				学校法人国士館常任理事(2008年5月)

2025	2023	2022	2022	2021	2020	2020
令和7	令和5	令和3	令和2	令和元	平成21	平成20
2月	6月	5月	6月	5月	4月	6月
89	87	85	84	83	73	72
死去、享年89（16日）						
日本サッカー殿堂入り（特別選考）理事						
大学スポーツ協会（UNIVAS）理事						
日本私立大学協会常務理事						
旭日中経章受章						
学校法人国士館理事						
学校法人国士館副理事長（2009年3月）						

# 国士舘史研究年報

## 目次

### 巻頭言

国士舘にとつての新しいフェーズが始まる年に……………長谷川 均 9

鎮魂 大澤英雄前理事長……………瀬野 隆 10

### 論文

国士舘におけるキャンパス立地の歴史……………山本 匡毅 17

研究ノート  
国士舘の宮城奉仕―戦後の混乱期における勤労奉仕……………梶原 紗千 49

### 国士舘の思い出

少しは気になる回顧録……………小濱 修 59

国士館に魅せられて ― 初心忘るべからず ― ..... 横道 正明

## 企画展記録

創立記念展「国士館生の記憶と記録 戦後80年」 ..... 国士館史資料室

## 令和7年事業報告

..... 国士館史資料室

国士館史資料室の活動

### 1 調査・収集

(1) 主たる資料調査 (2) オール調査 (3) 主な寄贈資料

### 2 整理・保存

(1) 資料目録作成状況 (2) 資料電子化・保存処置

### 3 利用・公開

(1) 収蔵資料の公開 (収蔵資料検索システム運用状況) (2) ホームページ

(3) 教育普及活動

### 4 室の構成

(1) 職員 (2) 施設の概要

### 5 活動日誌

**関連規程**

国士館史資料室規程

論文

## 国士館におけるキャンパス立地の歴史

山本 匡毅



【キーワード】 国士館 キャンパス 校地 立地 拡大

### はじめに

国士館は、今では大学、大学院、中学校、高等学校を擁する総合学園であり、学生・生徒総数は一万二八九一人（二〇二五年五月一日現在）に達している。国士館の中心的なキャンパスは、東京都世田谷区にある世田谷キャンパスである。国士館が世田谷の地にあることは、受験生や在学生、在校生からすれば、至極当然のことのように思われるであろう。しかしながら、キャンパスの立地は歴史的、経済的、政治的な因子で決まるものであって、国士館が世田谷の地にあることは、学園の先人の尽力による大きいものと考えられる。また、国士館

には世田谷キャンパスの他に、21世紀アジア学部が立地する町田キャンパス、体育学部が立地する多摩キャンパス、体育施設がある国士館楓の杜キャンパス、防災教育・研究の拠点である多摩南野キャンパスが存在する<sup>(1)</sup>。これらのキャンパスは、国士館の教育・研究活動の発展の中で生まれてきたものである。国士館のキャンパスは現在ではかかる五つであるが、かつては福岡県太宰府市にも太宰府キャンパスを有していた。

大学・学校のキャンパスの増加は、教育・研究活動の拡大と関連していることから、必然的にそれらの発展と連関している。元々、麻布区筈町<sup>こがらちよ</sup>（現港区南青山）の地に校舎を定めた国士館が、なぜ世田谷、町田、多摩、太

宰府へとキャンパスを拡大していったのだろうか。この点が本研究の問いである。

国士館のキャンパス立地については、いくつかの先行研究が存在する。国士館が麻布区筈町から世田谷へ移転した経緯について、佐々博雄は、国士館において目標としていた松下村塾の創設者である吉田松陰を顕彰していた松陰神社を契機とした世田谷への校舎の移転について明らかにしている<sup>(2)</sup>。熊本好宏は、青年大民団のメンバーである大民同人により国士祭を松陰神社にて開催したことが世田谷に校舎を移転する要因になったことを示している<sup>(3)</sup>。さらに佐々は、国士館が世田谷へ移転後、同地にもどるように馴染み、受け入れられていったのか、地域経済構造、地域社会構造の変容や、国士館による地域住民の教育を踏まえて検討を行っている<sup>(4)</sup>。その他、太宰府キャンパスの当時の様子について、江崎澄子が紹介している<sup>(5)</sup>。本論文では、国士館が麻布区筈町から世田谷、町田、多摩、太宰府へとキャンパスを拡大、変化させていく要因を明らかにすることを目的とする。そのうち、麻布筈町から世田谷への移転については、先行研究によって明らかにされている点が多いことから、『国士館百年史』

各編を中心に使用して、周辺資料を用いつつ、付加的な要因を検討する。また、町田、多摩、太宰府への移転、拡充、変化については、『国士館百年史』各編の記載を整理し、その上で、周辺資料を使用して要因分析を補強するものである。

## 1 麻布区筈町から世田谷への移転

学校法人国士館は、歴史的には一九一三（大正二）年四月に結成された青年大民団が母体である。青年大民団は、東京府下の学生の集団や福岡県出身学生の団体が合同して形成されたものであった<sup>(6)</sup>。この団体の中心にいたのが、国士館の創立者である柴田徳次郎であった。青年大民団は、その一事業として、一九一七年一月に東京市麻布区筈町一八二番地（現港区南青山七丁目）に私塾「国士館」（以下、国士館）を創立し、国士館と称する学校が成立した<sup>(7)</sup>。国士館は青年大民団の建物を間借りする形で講義を行った。その建物は二階建てで、二階に六畳一間、一階は八畳、六畳、四畳半の部屋が配されていたが、そのうちの一階の八畳、六畳の二間を利用して、国士館

の講義が行われていた。<sup>(8)</sup>

国士館は、著名な識者らによる講義や語学教育などを積極的に行ったことにより受講者が増加したという。そのため麻布区筈町の建物では手狭になり、運営母体であった青年大民団は、教育事業拡張の場を東京府郊外に求めることになった。一九一八年八月頃になると、新しい学校の候補地として中央本線吉祥寺駅の北側に位置した約一〇町歩（約三万坪・約九万九〇〇〇㎡）の土地を選定するとともに、国士館が郊外移転する理由を述べた「国士館移設趣旨」を次のように発表した。<sup>(9)</sup>

武蔵野の中央吉祥寺駅頭十町余の地をトして一学府を設け、之を吾人経国の大本山たらしめんとす、今日青年講学の堂を帝都熟鬧の巷に設くるは望まじき事にあらず、唯だ已存の諸学校は其の経営上、止むなく之を市井交通便利の地に建設せるのみ、然れど人を化する自然の力の大なるは、人為の教育にも優る、吾人は徹底せる真教育の学府を設けんとするに当り、自然の大観を恣にして草より出で、草に入るの月を挑むべき雄大なる武蔵野の中央を選めるの意主として茲に在り。<sup>(10)</sup>

このように麻布区筈町から吉祥寺への校地移転を計画し、進めている中で、一九一八年一月に青年大民団のメンバー（以下、大民同人）は、当時の東京府荏原郡世田ヶ谷村若林（現世田谷区若林）にあった松陰神社において国士祭を開催することになった。この国士祭は、大民同人が敬慕する偉人の墓前を訪れて追悼するもので、その第一回が吉田松陰・橋本左内の慰霊祭とされ、その会場として吉田松陰を祀っている松陰神社が選ばれた。<sup>(11)</sup>

国士祭終了後、大民同人が社司に対して「依て『此辺に適当な学校用地が無からうか』と問ふと、社司の話は『神社と豪徳寺との間に幾千丁歩の畑地あり、松陰の遺風を慕うて態々国士祭を行はる、方々が学校用地としては甚だ意義の在る事と思ふ』との話であった」として、この話を契機として国士館の校地移転先として世田谷が有力な選択肢として浮上してきたのである。大民同人は松陰神社社司の話を受けて、松陰神社隣接地を直ちに学校候補地として検討を行うこととなった。結果として、当初の移転先としていた吉祥寺への移設計画を取り止め、改めて松陰神社に隣接する土地確保に向けて交渉を始めた。

しかしながら、松陰神社で示唆された用地だけでは国士館の校地として十分ではなかった。そこで当該地に隣接する青龍山勝国寺の土地の使用も交渉することとした。同地は、柴田徳次郎の芝中学校（旧制）時代の同級生の母方の実家が所有する土地であるということもあり、順次交渉を進めていった。最終的に毛利家、勝国寺のそれぞれの所有地を好条件で借用できるようになったとされている。世田谷の校地は、一九一九年三月時点で約二〇〇〇坪であったものの、その後の交渉により、同年六月ころには計五〇〇〇坪の用地の確保を実現した。さらに毛利家の所有地については、一九二八（昭和三）年二月三日に、当時の田中義一首相（萩藩・現山口県出身）等の斡旋もあり、土地・山林約六〇〇〇坪の用地取得を行うことができた<sup>13</sup>とされる。これらの成果もあり、校舎の世田谷への移転は、一九一九年九月五日頃から開始され、国士館の運営の中心であった柴田徳次郎なども、元の麻布区筭町から居を移したとされる<sup>14</sup>。

ところで一九一〇年代の世田谷は、都市化が進んでおらず、東京府の郊外に位置する農村に過ぎなかった。このような立地条件が良いとは言い難い世田谷へ、国士館

はなぜ移転したのであろうか。当時、世田谷地域を通る鉄軌道は、一九〇七年八月一日に全線開業した玉川電気鉄道（渋谷～玉川（現二子玉川））だけであった。この時点で三軒茶屋の駅はできていた。しかし当時の玉川電気鉄道は、旅客輸送のみならず、多摩川の砂利輸送も主力であり、宅地化の波はまだ当地にまで及んでいなかった。加えて国士館のある松陰神社周辺には、鉄軌道が通っていなかった。その後、一九二〇年に世田谷西部地域への電車路線誘致の機運が高まり、一九二一年一月に住民の承諾書を付した電車路線延長願いを玉川電気鉄道へ提出した。最終的に三軒茶屋から下高井戸に至る現在の東急世田谷線に当たる路線の特許は、一九二二年七月に下りた<sup>15</sup>。この路線は、三軒茶屋～世田谷が一九二五年一月一八日、世田谷～下高井戸が同年五月一日に開業したのである。かかる世田谷線の敷設について、東急は「世田谷の奥地一帯の開発」に目的があったと表現しており、それほど世田谷西部地域の開発は進んでいなかったことが示唆されている。

ここで示したように、国士館が世田谷へ移転した当時は、世田谷はほぼ純農村の景観を持つ地域であった。図

1は一九一七年の世田谷地域の地理的状況である。この時期は、世田谷線は開業しておらず、集落が分布する他は、田畑が広がっていた。国士館世田谷キャンパスのある土地も住宅はなく、田畑や荒地であったことを示して



図1 1916年の世田谷地域

出所：旧1万地形図 世田谷（国土地理院）1917年12月15日発行をもとに筆者が加工して作成。

いる。かかる状況下で国士館は世田谷への校地の移転を実行した。

国士館が世田谷へ校地を移転した頃、通学に使用できる公共交通は鉄道あるいはバスであった。図2に示すように、一九二〇年に読売新聞へ掲載された国士館の広告には、最寄り駅として三軒茶屋駅が記載されている。このことから、当時の国士館では、受験生に最寄り駅として玉川電気鉄道の三軒茶屋駅の利用を促していたことを示している。その後、一九二五年になると、世田谷線が開業し、国士館の最寄り駅として松陰神社前が開設された。併せて渋谷町中豊沢から世田谷町役場前までを結ぶ路線バスが日東乗合自動車により開設され、当地の利便性が飛躍的に高まったのである。

**目的 英才教育**

入学資格 中學卒業程度

入學試験期日 大正九年十月十五日

同場所 東京市外世田谷松陰神社前  
（電車 玉川電車 三軒茶屋下車）

**国士館 第二期 募集生**

▲入學願書受附期日 大正九年十月十日限▲詳細は中公郵券二號  
封入文書宛東京市外世田谷松陰神社前▲送附の地には論を試験の便を認む

東京市外世田谷 財團 **国士館**

電話 世田谷式三番 法人 **国士館**

図2 1920年の国士館による募集広告  
出所：「読売新聞」1920年9月27日付。



図3 1937年の世田谷地域

出所：旧1万地形図 世田谷（国土地理院）1940年1月30日発行  
をもとに筆者が加工して作成。

ここで示したように、国士館の世田谷キャンパス（以下、『国士館百年史』での用語使用に従い、原則として「校地」を用いる）の立地は、確かに吉田松陰のことを思い、松陰が祀られている松陰神社の横に位置している。この



図4 国士館商業学校の広告  
出所：「東京朝日新聞」  
1926年3月5日付。

ことは大民同人の志の帰結である。他方で偶然ながら、その立地は、玉川電気鉄道三軒茶屋駅から徒歩圏に位置していた。二〇二五年九月現在、Google Mapを使用し、所要時間を計測してみると、約三〇分程度掛かる。大正期の当時は、徒歩が一般的な移動方法であったことから、それほど不便とは言えない立地であったと推察される。このような立地条件に対して、玉川電気鉄道世田谷線や路線バスの開業により、国士館の交通利便性は飛躍的に向上した。

図3は、世田谷線開業後の一九三七年の地図である。ここでは世田谷線が敷設され、国士館も地図上に載っている。毛利家墓所も整備され、住宅が増え、宅地化が進

んでいることが明らかである。実際に図4に示すように、一九二六年に掲載された後述する国士館商業学校の募集広告では、最寄り駅が世田谷線の松陰神社前に変更されていた。更に小田原急行鉄道（現小田急電鉄）が一九二七年に開業したことで、当地の交通条件は更に大きく変わった。『世田谷近・現代史』では、小田急電鉄の開業は世田谷にとって、「玉川線の開通に勝るとも劣らない影響を与えたことは事実である」としている<sup>(18)</sup>。ただし、国士館の最寄り駅である梅ヶ丘駅の開設は、路線開業時ではなく、少し遅れて一九三四年であった。

すなわち、国士館の理念に基づいて移転した世田谷という立地は、都市化、特に関東大震災後の宅地化や公共交通機関の整備により、一段と利便性の高い立地条件へ変化したといえよう。

## 2 世田谷校地の拡充

国士館の世田谷移転後、教育内容の拡充が進んだ。一九一九（大正八）年一月には、それまでの夜学を改め、全寮制で修業年限三年の国士館高等部を開設することに

なった<sup>(19)</sup>。一九二二年九月一五日になると、中等夜間部（二年制）を設け、翌年の一九二三年四月一日には中等部（四年制）を開設した。これらは、法令に基づかない教育組織ではあったものの、尋常小学校卒業程度の者を対象とする中等教育を開始した<sup>(20)</sup>。これらの教育組織を基盤として、一九二五年三月三〇日に法令に基づく学校として、国士館中学校（旧制）の設置認可申請を文部大臣に行い、同校が一九二五年四月に創設された<sup>(21)</sup>。これらの学校は、国士館の教育理念を徹底した教育機関であった。

かかる学校とともに、国士館では一九二六年四月に、実業学校令に基づく商業学校を創設することになった。文部大臣への設置認可申請にあたっては、世田谷近隣の荏原郡西部六カ町村による補助金と地域有力者の寄付による基本金で運営することとした。同年三月一二日にはそれら運営資金を管理・運用する商業学校維持会が発足して、四月に開校された。同校の校長には、旧彦根藩世田谷領代官の後裔で、地域の篤志家であった大場信續（以下、大場）が就任した<sup>(22)</sup>。大場は、前述の玉川電気鉄道世田谷線の誘致にも中心的に関わった人物であり、このような地域の有力者が、国士館の教育に関わることになっ

たのである。<sup>(23)</sup>

大場は、次のように述べ、元々、国士館のことをあまり理解していなかったようである。

宮内省への往復の途中、その学生が弊衣破帽、所謂衣肝に至り袖腕に至るていの粗末な風で、別に列を作るでもなく三々五々往來を歩いて居るのに出会ひますと、これが国士館の学生だな成るほど會つて自分の思ふた通り反動思想の一団に相違あるまいと考へた位で、国士館なるものを全く運烟過眼視して居たのであります。<sup>(24)</sup>

一九二五年の春に、当時、国士館職員であつた石井澄之助が大場を訪ね、開設予定の補習夜学塾での農業関連講義の担当を依頼した。同年四月に旧制中学校の設置認可を受けた国士館としては、中学校の授業を行わない夜間に校舎を有効活用し、地域青年に対する教育の場を設けたいという意図を有していた。また、世田谷地域にとつては、新たな教育機関を得ることは、都市化に伴う地域構造の変容の中で、地域の発展に不可欠な状況となつていた。かかる状況のもとで、国士館は同年春頃に農商補習夜学塾（以下、夜学塾）を開設した。この夜学塾にお

いて、大場は週二時間、農業関連の科目を担当した。このことが、大場が国士館との関わりを持った最初である。

大場は夜学塾で教える中で、次のように国士館への認識を大きく変えていった。

私が追々国士館に接近するの機会を得、その後時日を経過するに従つて、国士館内部のことも少しづつ、判るやうになつて見ると、この附近の人々の噂や、私が当初考へて居た国士館なるものが、寧ろ正反対であるのに驚き且つ喜んだやうなわけでありませす。<sup>(25)</sup>

大場などの地元の有力者は、世田谷地域と国士館が協力して、農業・商業の両科を主として夜学塾を發展させる計画を有していた。この時期に当たる、一九二六年一月に国士館の石井澄之助が大場の下を訪れ、商業学校の新設計画を提案した。世田谷地域における農業から商業・工業への大きな地域構造の変動に直面し、商業教育の必要性を十分認識していた大場も、国士館の計画に賛同し、商業学校の創設へ向けて動き始めた。<sup>(27)</sup>

このことは、大場という地域のキーパーソンの理解を得て、国士館が世田谷地域に不可欠な学校として認識さ

れ、地域に根差した学校へと変容していたことを示している。

世田谷に根差してきた国士館は、世田谷における教育組織の拡充を進めていく。一九二九（昭和四）年四月には、国士館専門学校（旧制）が開設された。同校は、本科と研究科で構成され、本科が修業年限四年、収容定員四〇〇名（入学定員一〇〇名）であった。<sup>28</sup>第二次世界大戦を経て、一九五三年四月には、新製の国士館短期大学の国文科及び経済科（二部）が開設され、それぞれの収容定員八〇名（入学定員四〇名）、修業年限は二年とした。一九五六年四月には、短期大学体育科を開設し、収容定員三〇〇名（入学定員一〇〇名）に設定し、三年制とした。<sup>29</sup>この短期大学体育科は、新たに開設される四年制大学の基礎となり、一九五八年四月に体育学部体育学科を有する国士館大学が開学された。同学部学科には、新入生が一年次に入学し、二年次と三年次には短期大学体育科から編入した学生が在籍することとなった。<sup>30</sup>

大場を中心とする地域住民、自治体からの信頼を得ることができた国士館は、世田谷の地において、高等教育機関としての専門学校（旧制）、短期大学、大学を開設し、

総合学園としての陣容を形成するに至ったのである。

### 3 鶴川校地（町田キャンパス）の開設と変化

国士館の町田キャンパスは、元々、学内では鶴川校地と呼ばれていた。鶴川校地は、一九四二年四月頃に、東京府南多摩郡鶴川村（現町田市広袴）の約三万坪の地に鶴川錬成場を設けたことが始まりである。この土地は陸軍の協力のもと農家から柴田徳次郎名義で取得したとされ、実際には教練場というより「鶴川農場」と称した農作業の場として使用されたという。<sup>31</sup>特に戦後、同地は柴田徳次郎が暮らす農地として使用されていた。<sup>32</sup>柴田徳次郎の義理の息子である安高武（元学校法人国士館常任理事）によると、「敗戦後の混乱期で連合軍の占領政策の一つ、農地解放の嵐の吹きまくった後で、館長（筆者注…柴田徳次郎）自身は追放に遭い、人生最も失意のどん底にありながら、鶴川の現土地（筆者注…現鶴川校地）を守ろうと、自ら百姓をされていた時だった。土地を守るには田畑として耕作する以外、他に方法がなかった」とし、柴田徳次郎が戦後に鶴川校地の土地を守ったことが

窺える。<sup>(34)</sup>

一九五〇年代に入り、国士館が四年制大学を新設することとなり、一九五七年一月二六日に私立大学審議会委員の実地視察を受けた。その指摘を受けて、鶴川の柴田徳次郎名義の土地を学校法人国士館へ寄付して、大学の第二運動場とし、その基本財産を増加させることとした。<sup>(34)</sup> これを受けた鶴川校地の整備の最初の動きは、一九六〇年一月一四日に開設された鶴川野球場であった。<sup>(35)</sup>

大学を拡充する中で、新たに工学部を開設することになった。一九六二年の工学部に関する文部省への設置認可申請に当たり、一九六〇年度から大学各学部の教養課程を鶴川校地へ移転することとし、これに伴う同校地の整備を進めることになった。この動きを踏まえ、理事会（一九六二年一月二三日開催）は、柴田徳次郎から町田市広袴町の三三五三坪、安高武から同町の一四六二坪の土地の現物寄付を受ける件について決議した。これらを踏まえ、鶴川校地における最初の校舎として、九号館の建設が開始された。この九号館は、一九六五年四月一日から使用が開始され、当初は、政経学部一部の一・二・三年次生が一般教養科目を中心に学んだ。一九六六年四月

に開設された法学部と文学部の学生に対して、一九六八年度から東京近郊出身の男子学生と、女子学生全員が世田谷校舎で修学し、その他の地方出身の男子学生は鶴川校舎で学ぶという変則的な学修形態が取られることになった。これらの動きの中で、鶴川校地は、次第に教室として利用されるようになった。<sup>(36)</sup>

当時の鶴川は、都市化の波が来る前であり、純粋な農村地域であった。光罵督（元国士館大学教養部教授）によると、一九六五年に初めて鶴川を訪ねた当時のキャンパスは、全く田園の中にあり、小田急線鶴川駅に下車しても今のようにバスはなく、駅前にも僅か二、三の商店があるのみで、農家が点々としていたという。<sup>(37)</sup> 鶴川校地の整備にやや遅れる形で、当地にも都市化の波が進んできた。一九六六年頃から、校地の周辺に日本住宅公団（現都市再生機構）による鶴川団地の建設が進められた。鶴川二丁目団地、鶴川五丁目団地、鶴川六丁目団地の完成に伴って、地域の道路も整備され、その効果として、小田急線鶴川駅から鶴川校地までのバス利用の利便性が向上した。<sup>(38)</sup>

写真1は、一九四七年の鶴川校地付近の航空写真である

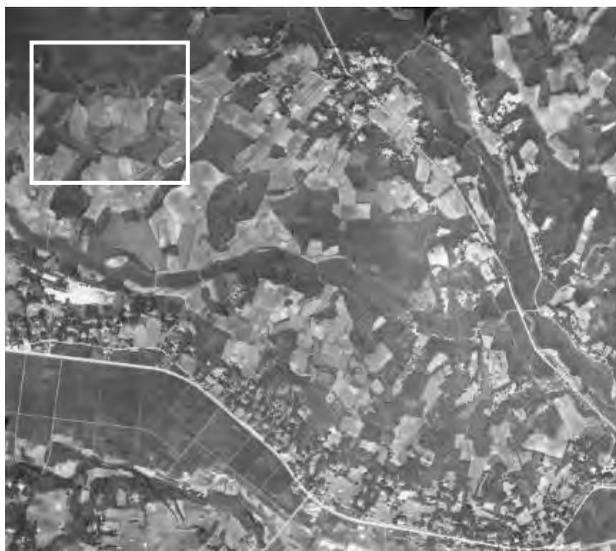


写真1 1947年における鶴川校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1947年撮影）

る。現在の鶴川校地のところは写真左上の枠内に当たるが、森や畑地になっていることが分かる。これが一九六一年の状況である写真2になると、現鶴川校地のところに野球場が建設されている。更に一九六八年になると、写真3のように、周辺に団地が造成されることで宅地化、都市化が進み、その隣接地（枠内）において鶴川校地の

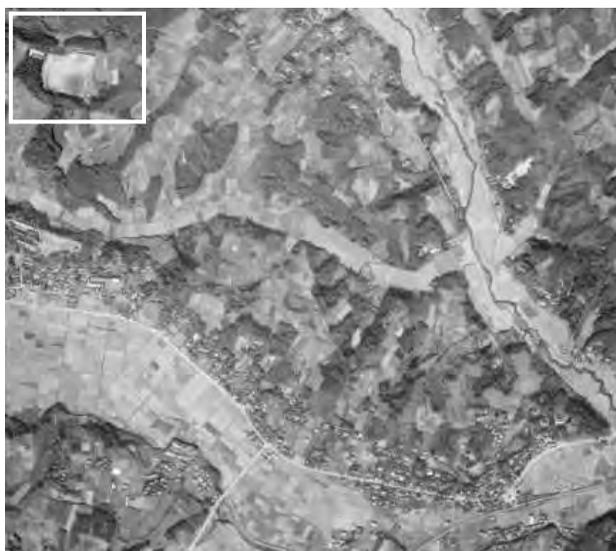


写真2 1961年における鶴川校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1961年撮影）

野球場、校舎が建っている様子が見える。かかる景観の変化は、鶴川校地が体育施設から教育施設へ転換している過程を示している。  
国士館大学は、開設後、急成長を遂げていた。その中で、一九七一年以降、文部省による学生定員超過に関する



写真3 1968年における鶴川校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1968年撮影）

る指導を受けるようになっていた。そこで、一九七六年以降に、鶴川校地に校舎を複数整備して、従来は世田谷校地で学んでいた、政経学部一部、法学部、文学部（初等教育専攻は全学年）の一・二年次生と、短期大学の全

学生を鶴川校地へ移す措置を取った<sup>(39)</sup>。これにより、複数学部の一・二年次生と短期大学の学生が鶴川校地で学ぶようになり、同校地は大学キャンパスとしての様相を呈すことになった。

このように鶴川校地が世田谷校地から一・二年次生を受入れ、大学キャンパスとして拡張できた背景には、国が定めた「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」（以下、工業等制限法）における工業等制限区域に含まれていなかったことが影響していると考えられる。当時、工業等制限区域内には大学の新学部新学科の開設・増設ができなかった。世田谷校地は、工業等制限区域内に立地し、学部学科の新増設は困難であった。工業等制限区域は、川崎市多摩区の一部まで含まれていたが、川崎市麻生区や町田市は区域外であり、大学の立地規制が無かった<sup>(40)</sup>。その点が元々、国士館が保有していた鶴川校地の有効利用に繋がったものと推察される。

#### 4 多摩・小野路校地（多摩キャンパス）の開設と変化

国士館では、既に指摘したように、大学の開設以来、急速に拡大し、総合大学化・大規模化に伴って、校地の確保が課題となっていた。その中で国士館は、一九六四（昭和三九）年頃から町田市小野路町の用地買収を始めていた。<sup>(4)</sup>後に多摩キャンパスになる小野路校地は、当初、グラウンドの整備を計画していた。一九六五年の文部省に対する法学部と文学部の設置認可申請に際しては、一九六八年までに同地を「第三運動場」として整備し、その後、世田谷校舎から体育学部及び工学部を移転するという計画が提示されていた。しかし計画が変更となり、理事会（一九六六年五月二四日開催）により、国士館が取得した町田市小野路町の用地には自動車練習場を建設することを決定した。そこで、小野路校地では、その後の自動車練習施設の整備と併行して用地買収が継続され、一九七一年までに約三万坪の用地を確保した。結果として、一九六九年五月に国士館自動車学校が小野路校地に開設された。<sup>(4)</sup>このように、多摩キャンパスの始まり

は、国士館大学学生向けの自動車学校（一九八五年三月末廃止）であった。

一九六九年には、小野路校地の北側に位置していた多摩地区の用地買収を進めた。具体的には、日本住宅公団（現都市再生機構）が所有していた多摩地区の用地である。これは、一九六七年に国士館と日本住宅公団の間で用地購入の協定を締結したものの、価格が決定されず、売買が決まっていなかった。これを最終的に長期交渉の末に購入したものであった。一九七九年三月五日の理事会において、日本住宅公団所有であった約三万九八〇〇㎡の用地取得を決議し、三月三〇日に日本住宅公団との売買契約を締結した。当該用地買収により、既存の小野路校地と合わせて、約一五万九八〇〇㎡の用地となり、これらの用地を一括して「多摩・小野路校地」とした。これが現在の多摩キャンパスの原型になった。

多摩・小野路校地は、既設の国士館自動車学校とは別に、新規買収となった多摩地区では、一九八〇年にセミナーハウスの建設と野球場の造成を開始し、翌年に完成した。新たに設けられた野球場は、既述の鶴川校地にあった野球場（一九六〇年整備）が、大学硬式野球部と高等

学校野球部の共用であったことから、高等学校野球部専用とした。<sup>(43)</sup>

しばらく期間が空き、一九八七年四月に将来計画委員会が「将来計画に関する答申」を出した。<sup>(44)</sup> その中で多摩・小野路校地について、多摩地区に世田谷校地から体育学部や工学部を移転することを前提として新校舎を整備することとし、小野路地区には廃止した自動車学校の跡に陸上競技場、ラグビー場、テニスコート、多目的運動場などを設けるものとした。<sup>(45)</sup>

一九九〇（平成二）年二月一九日策定の「将来計画第二次大綱」では、施設整備事業の推進が挙げられ、多摩・小野路校地における「多摩キャンパス」の開設準備に着手した。<sup>(46)</sup> 一九九二年三月二日には、体育館棟の多目的フロアにおいて新校舎の竣工式が開催された。<sup>(47)</sup> かかる施設の充実が実現したことから、一九九二年四月に体育学部は世田谷校地から多摩・小野路校地へと移転したのである。

このような体育学部の多摩・小野路校地への移転の理由が体育学部移転届出書に記載されている。

・体育学部移転届出書（一九九〇年九月二八日）

1. 移転する理由

（筆者中略）

（3）体育学部の教育、研究の整備、拡充、発展のために世田谷校地では、校地狭隘のため体育施設の充実拡充が困難であり、また、体育学部の将来構想である定員増、学科増（体育・スポーツ科学・武道学科）及び大学院設置には校舎、施設の増設は不可欠であります。地域による制限上不可能な現状であるので、より一層の教育、研究成果の向上を図るため体育学部を多摩・小野路校地へ移転するものであります。<sup>(48)</sup>

この移転届出書の中に、世田谷校地が校地の狭隘を理由として挙げているとともに、「地域による制限上不可能な現状」という理由も挙げている。これは一九九〇年の時点で大学立地を規制していた工業等制限法によるキャンパスの拡張や新学部新学科の設置・増設が認められていなかった状況を示しているものと考えられる。国士館のメインキャンパスである世田谷校地は、工業等制限法の工業等制限区域内に立地しており、国の立地規制の影響を受けていたことを示している。そのことが先の



写真4 1964年における多摩・小野路校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1964年撮影）

鶴川校地への一年次・二年次の移転や、多摩・小野路校地への体育学部を移転させる要因となったものと推察される。

これらの動きをしてきた多摩・小野路校地は、実際に



写真5 1968年における多摩・小野路校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1968年撮影）

どのような土地利用の変化を遂げたのか、航空写真から確認してみたい。写真4は、一九六四年時点での多摩・小野路校地付近の写真である。この時点では国士館の用地買収は始まっていたものと推察されるが、空間的な変

化は見られない。図の真ん中よりやや右下にある変電所から見て左斜め上の枠内が、後に小野路校地となる。写真5は、小野路校地の開発が始まり、一九六九年五月に開設された国土館自動車学校の教習用道路の形を確認す



写真6 1980年における多摩・小野路校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1980年撮影）

ることができると。写真6では、一九七九年に日本住宅公団から買収した用地の造成が進んでおり、当時稼働していた自動車学校の様子も明確に把握することができる。他方で、一九八〇年に着手したセミナーハウスと野球場



写真7 1992年における多摩・小野路校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1992年撮影）

はまだ見られない。写真7は、セミナーハウス、野球場が完成しており、自動車学校を廃止した跡地に陸上競技場が出来ている。また一九九二年四月に体育学部が移転してきたことから、体育学部が使用する校舎群や体育館を確認することもできる。

## 5 太宰府校地の開設と廃止

国士館といえは、東京都の総合学園ということは、今では当たり前のことである。しかしながら、国士館の歴史の中で、校地を東京都以外へ求めた時期があった。これは学園が急激に拡大した一九六〇年代のことであった。

国士館は、第二次世界大戦後、四年制大学を創設した後、学園の拡大の中で、総合大学化、大規模化を進めていた。『国士館百年史』によれば、一九六一（昭和三七）年頃から東京都の都心部から離れた校地の取得を図ることになったとされる。同年九月頃には、工学部設置認可申請に際して、静岡県駿東郡小山町に用地約八七万坪の取得計画が浮上した。これを受けて、進出予定地である

小山町からの大学誘致活動を受けて、一九六四年頃まで国士館と小山町との間で相互交流と用地の調整が図られたとされるが、最終的には同町での用地取得は実現しなかった。

かかる状況の中で、国士館の理事であり、福岡県選出で、理事長の柴田徳次郎と懇意であった衆議院議員であるけんきのきとびろ 剣木享弘(16)が仲介し、一九六四年四月に福岡県内の用地を求めることになった。福岡県の候補地が検討される中で、一九六四年七月に、当時の大学副学長であった柴田梵天が太宰府町（現太宰府市）、大野城町（現大野城市）、宇美町、筑紫野町（現筑紫野市）の候補地へ向き、実地視察を行った。(17)

現地調査を受けて、柴田梵天は次のように報告した。(18)

（前略）次は太宰府町長の推薦せる天満宮の裏側に当るもので、近く浄水場建設予定地に近き所のものでございますが、これは出発前日ににわかには話が出たもので急いで視察を致しましたが、県道に沿って、あたかも鶴川の大蔵のように田あり（但し買収地には含まず）、その田の先に川が流れており、その川の向こう側に山が列っており、候補地は此の山の谷

間に沿うて奥に延びているもので、現在谷間は田として用いられており、此の儘でも小規模の校舎は建築出来ませんが、町の話では山も大して高くないので、この西側の山を削ってこの田に落しこめば立派な校舎が出来るとのことで奥が広く（約七万坪）、静寂でもあり、天満宮様とも近いため、又町長を始め町を挙げて学校誘致に協力的であり、校地としては最も適當するもののように思われました。（以下略）

この報告にあるように、柴田梵天は視察の結果、太宰府町長の中村義雄が推薦する用地が最も適當と評価し、最終的に太宰府町冷林の用地を買収することとした。用地買収は、太宰府町の協力を得て、一九六四年から一九七一年にかけて実施し、国士館として約七万二〇〇坪の用地を買収した。用地買収に際しては、太宰府町長の中村、太宰府天満宮宮司の西高辻信貞、太宰府の農業協同組合長の有吉林之助（後の市長）などの有力者の協力があった。<sup>(32)</sup>

この時、太宰府町は国士館の土地取得に便宜を図ったようである。例えば、有吉は、「学校についてはですね、町長自ら部下に督促して、買収交渉させておりました。

山の手はだから安く買っていますよ、みんな」と述べた上で、国士館が一坪当たり二八〇円で買収したとする。これは同時期に土地買収をした麻生学園（筆者注・現九州情報大学）の一〇〇〇円より安かったとしている。<sup>(33)</sup> また太宰府町議会議員であった大江田安定は、「そのときに売った金額は一坪確か二二〇円くらいだったと思います」と述べ、地元としても国士館の立地を歓迎し、廉価な売却額を設定したことを窺わせている。<sup>(34)</sup>

太宰府校地の用地買収は、一九七一年には完了した。ところが国士館は、買収完了後に学校設置の準備を開始したわけではなかった。これは国士館が保有する都内の既存校地とは異なり、太宰府校地が大学として明確な学部学科の増設のために取得した土地ではなかったことに起因している。そのため、太宰府校地の整備は遅れることになった。<sup>(35)</sup> その後、高等学校、専門学校、短期大学の開設を議論したこともあったが、いずれも実現せずに時間を経過した。その中で地元の太宰府町では、国士館が学校を開設しないことに不満を持つ地元議員も登場している。先の太江田安定は、「何ならわれわれは、地権者はうって一丸となって道義的責任を追求したいと思っています

す」と述べ、強硬な姿勢を示した。<sup>36)</sup>

この間、国士館は太宰府校地の整備を進めており、一九七三年八月に柔道と剣道の普及を目的とした体育館（約四九五坪）を建設し、さらに一九七九年五月には管理棟（延床面積約七〇〇坪の鉄筋コンクリート造五階建て）とグラウンド（外周四〇〇m）を整備した。管理棟は、一階に事務室や食堂、二階から三階には総長室や研究室、四階から五階には図書室や階段教室などを設けられており、大学、短期大学、専門学校などの開設に備えたものとなっていた。<sup>37)</sup>

平成期に入ると、太宰府校地へ専門学校を設置する方針が明確化されてきた。この時も福岡県庁の関係部署との専門学校設置に関する打合せ（一九九二年一月九日）を行った際に、国士館が太宰府校地に専門学校を設置申請を行わない場合には、太宰府校地取得時点の原状回復した上で、現所有地を地元へ返還するように、県庁から通知を受けたとされる。そのような中で、太宰府市との調整を進め、一九九二年一月九日に太宰府校地への専門学校新設に対して太宰府市の了解を取り付けた。<sup>38)</sup>

一九九二（平成四）年一二月九日の理事会において、専

門学校開設準備要綱」に基づいて、介護福祉士を養成する介護福祉学科を有する専門学校の設置準備を進めることについて可決された。<sup>39)</sup>一九九五年四月には国士館大学福祉専門学校（以下、福祉専門学校）が太宰府校地へ新設された。同校は、介護福祉士の養成を目的とする昼間開講制の介護福祉学科を置き、修業年限は二年、入学定員四〇名（収容定員八〇名）とした。<sup>40)</sup>

しかしながら、競合校の増加や立地条件から学生募集が難しくなり、二〇〇五年七月二七日開催の評議員会と理事会において、志願者急減の改善は困難であることを理由に、二〇〇六年度の生徒募集停止を決議した。<sup>41)</sup>二〇〇七年三月一五日に、二〇〇五年度入学の第一期生を送る福祉専門学校最後の卒業式が挙行され、その後、同校の閉校式が行われた。福祉専門学校は、一二年間の歴史に幕を下ろした。最終的に創設から廃止までに計三三三名の卒業生を輩出した。

福祉専門学校廃止後、国士館は太宰府校地において、国士館大学の研修施設として工学部や文学部などの利用を行った。しかしながら、国士館は太宰府市に二〇一三年四月一日付で太宰府校地の土地・建物を譲渡・売却し



写真 8 国士館太宰府校地旧体育館  
出所：筆者撮影  
(撮影日：2025年8月18日)



写真 9 国士館太宰府校地旧管理棟  
出所：筆者撮影  
(撮影日：2025年8月18日)



写真 10 国士館太宰府校地旧専門学校校舎  
出所：筆者撮影  
(撮影日：2025年8月18日)



写真 11 国士館太宰府校地跡記念碑  
出所：筆者撮影  
(撮影日：2025年8月18日)



写真12 1969年における太宰府校地付近  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1969年撮影）



写真13 1987年における太宰府校地付近の航空写真  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1987年撮影）

た。<sup>(2)</sup> 太宰府市議会の記録によると、太宰府市は太宰府校地を四億五三〇万円で取得契約できたとしている。<sup>(3)</sup>

このような経緯で太宰府校地は廃止された。旧太宰府校地は、現在、体育館（写真8）とグラウンドが太宰府市松川運動公園に、管理棟（写真9）が太宰府市上下水

道事業センターに、旧専門学校校舎（写真10）が太宰府市公文書館となっており、その一角には写真11の「国士館太宰府校地跡記念碑」が建っている。

ここで示したように多難な変化を遂げた太宰府校地であったが、その土地利用の変化を見ると、写真12は、

太宰府校地の用地買収中であった一九六九年の様子である。この時、太宰府校地の開発は始まっていないが、手前にある浄水場までの道路整備が進んできていることが分かる。写真13では太宰府校地の造成が終わり、使用を開始している一九八七年の様子である。ここからは、体育館とグラウンドが完成していることが窺える。写真14は、福祉専門学校開設後の一九九八年の太宰府校地である。ここから福祉専門学校校舎が増設され、最終的な校地の状態が完成したことを示している。

## 6 キャンパスの再編と新たなキャンパスの整備

一九九〇年代に入ると、国士館は世田谷校地の拡充を進めていく。一九九七年九月に東京都議会で都立高等学校改革推進計画が策定された。その中で世田谷キャンパス（二〇〇〇年代以降は原則としてキャンパスと表記）の北側に位置した東京都立明正高等学校が二〇〇二（平成一四）年三月に閉校することが決定された。これを受けて国士館は、同校の取得に向けて動きはじめ、校地払



写真 14 1998 年における太宰府校地付近の航空写真  
出所：国土地理院撮影の空中写真（1998 年撮影）

下げについて東京都との交渉を行った。その後、二〇〇五年一月に開催された理事会において、大学の学部再配置を含めたキャンパスの再整備を行う計画を行うことを踏まえ、隣接する旧都立明正高等学校の一部を取得することを決議した。二〇〇五年二月一五日に行われた東京

都財務局での一般競争入札へ国士館が参加し、旧都立明正高等学校（校舎・体育館などを含む）の用地の一部である約一万四〇〇〇㎡を四六億九五〇〇万円で落札した。その後、同年三月二三日には東京都との間で土地の売買契約を締結した。この新校地は、当面「世田谷・梅ヶ丘キャンパス」と仮称することを決め、総合的な観点からその整備方針の策定を進めることとした。<sup>(64)</sup>

二〇〇八年二月に新校地に地下一階地上一〇階のA棟（高層棟）、地下一階地上三階のB棟（低層棟）からなる三四号館（SRC造、延床面積約二万二四三〇㎡）が完成し、二月一日には竣工式を挙行了した。三四号館の完成によって、一年次、二年次（初等教育専攻は四年間）を鶴川キャンパスで学んでいた学生は、世田谷キャンパスで修学することとなった。その結果、政経学部、理工学部、法学部、文学部の学生は世田谷キャンパスで四年間を通して修学することが可能となった。二〇〇八年度から国士館大学の全学部が、同一キャンパスでの一貫教育体制とすることができるようになった。<sup>(65)</sup>

この三四号館の整備は、国士館大学にとって、主要学部の世田谷キャンパスへの回帰をもたらすことができ

た。この背景には、二〇〇二年七月に工業等制限法が廃止され、首都圏における大学の立地規制が撤廃されたことがあった。<sup>(66)</sup> 各大学が都心回帰を図る中で、国士館としては、三四号館を新設することで校地面積、教室数を増加させ、世田谷キャンパスへの学部教育の集約を実現できたものと推察される。大学立地政策としては、二〇一八年に施行された「地域における大学の振興及び若者の雇用機会の創出による若者の修学及び就業の促進に関する法律」によって、東京二三区内における大学、学部学科の新増設、学生収容定員の増加を禁じられた。このことから国士館の世田谷キャンパスへの集約は、非常にタイミングの良い選択であったといえる。

その後も国士館はキャンパスの拡充を進めた。町田市にある国士館楓の杜キャンパスは、主に国士館中学・高等学校の教育施設として使われているとされる。<sup>(67)</sup> このキャンパスは、二〇一六年に学校法人国本学園（東京都世田谷区）の町田キャンパス跡地を野津田校地として取得したものである。<sup>(68)</sup> これを二〇一七年に現キャンパス名で開設したものであった。国本学園町田キャンパスは、一九八七年四月一三日に開設され、一九九九年四月には

新校舎も開設された。その後、国本学園としては秦野に校地を購入することから町田キャンパスを国士館に売却したとして<sup>(66)</sup>いる。

二〇二〇（令和二）年七月には国士館楓の杜キャンパスに大学、高校のサッカー部で共用の練習・試合拠点としての設備が新設された。これは公式規格サイズのサッカー場であり、人工芝が採用されている。そのため、JFA（日本サッカー協会）の公認施設として認定されている。<sup>(70)</sup>

国士館は、さらに多摩キャンパスの近くに多摩南野校舎を新設した。この多摩南野校舎は、二〇二二年に多摩南野キャンパスへ改称した。同キャンパスには、防災教育・研究の拠点および大学院の研究施設が置かれている。<sup>(71)</sup>ここは、元々、旧東京都立南野高等学校であったが、同校の廃校後に学校法人恵泉女学園が二〇〇七年に購入した。国士館としては、「体育学部の学科増設等で狭隘となった多摩キャンパスを拡充することに加え、同大学を挙げて取り組む防災教育の実習・防災研究の拠点として最適地であること、永山の多摩キャンパスから約1kmの徒歩圏内にあることなどを理由」として、学校法人恵

泉女学園から二〇二〇年一月二八日に購入した。<sup>(72)</sup>この校地購入は、国士館が「二〇一九年度事業報告書」において「当年度事業計画の予定に入っていなかった」と述べているように、<sup>(73)</sup>急な買収の動きであったことが推察される。

このように国士館は、二〇〇〇年代以降も積極的な校地の取得を進めてきた。その結果、国士館は、大学における世田谷校地の強化と、東京郊外における校地の拡充を進め、大学や高校の施設充実の実現を図ってきたことが示された。

## 考察と結論

国士館における修学地は、麻布区筈町から始まり、吉祥寺への移転を企図しながら、松陰神社において開催した国士祭を契機として、世田谷へ移転した。移転当時の世田谷は「奥地」と称されるほどの地域であり、都市集積があるわけではなかった。この点で、明治期から大正期の高等教育機関において、非常勤教員を容易に得られるために神田神保町エリアへ立地した私立法律学校に代

表される諸学校と国士館は趣が異なっていた。<sup>24</sup>その最大の理由は、世田谷移転が、国士館の教育理念に関連する松陰神社の立地と密接に結びついていることである。すなわち国士館世田谷校地は、経営の合理性、利便性よりも教育理念に基づいた立地であり、世田谷校地は交通の利便性を考慮した立地ではない。しかしながら、偶然にも三軒茶屋駅から徒歩圏の立地であり、通学が不可能な立地ではなかった。その後、国士館の発展にも貢献する大場信續の助力もあり、世田谷校地の比較的近いところに玉川電気鉄道世田谷線が開設され、世田谷校地の利便性は一層高まったのであった。

国士館は世田谷に校地を得たことが、後の発展の基盤となった。その要因は、国士館中学校（旧制）の開設に伴う補習夜学塾の設置に際しての大場信續の関与であった。大場は、世田谷地域の有力者であり、その信頼を獲得した国士館は、特に商業学校の経営において、地域からの支援を受けられるようになった。このことは、国士館が世田谷地域の学校としての信用を強化することに寄与した。この信用を基盤として、旧制専門学校、短期大学、四年制大学の開設に結びついて行くのである。

国士館が総合学園として拡張する中で、戦後になると、校地の不足が顕在化してきた。そこで活用されたのが、鶴川校地である。鶴川校地は柴田徳次郎の所有地であったが、大学の拡張の中で教養課程を移転させ、大学の新たな修学地に位置づけた。鶴川校地は、世田谷校地とは異なり、工業等制限法における工業等制限区域外であったため、比較的自由に校地の拡張や学部学科の増設ができた。このこともあり、一時は多くの学部の一・二次次が鶴川校地で学修した。

さらに校地の不足を見据え、小野路校地の買収が進められた。後に多摩校地の用地を日本住宅公団から買い取ったことで、多摩・小野路校地となった。多摩・小野路校地もまた、工業等制限区域外に立地しており、学部の新設が可能であった。そのこともあって、世田谷校地では大学として狭隘化していたこともあり、体育学部が同地へ移転し、現在に至っている。

かかる校地拡張の一環として、福岡県の太宰府校地も開設された。太宰府校地は、国士館が将来を見据え、校地を増やしていったことの証左であるものと考えられる。この時代は、他の私立大学も地方へ進出した時期で

あった。例えば、東京都に本部を置く東海大学は、「教育の地方分散、地域教育の向上にも力を入れていく」として、一九六〇年代に地方への高等教育機関の新設を進めた。一九六一（昭和三六）年四月に地元の強い要請にこたえて熊本に高等学校を開設し、その卒業生の受け皿として、一九六四年四月に東海大学短期大学（熊本）を開校した<sup>(25)</sup>。このように、国士館の校地拡張の動きは、大  
 学業界の拡大において、国士館の発展に必要と考えられて進められた事業に位置づけられ、その一つが太宰府校地の設置に結びついたのである。

平成期に入っても、国士館の校地拡張は続いた。工業等制限法の廃止を踏まえ、世田谷キャンパスの隣接地を買収し、校地の拡張を契機として、鶴川キャンパスで学んでいた教養課程を世田谷キャンパスへ統合し、都心回帰を実現した。さらに東京二三区への大学立地の再規制後には、町田市に体育施設として国士館楓の杜キャンパス、多摩市の多摩キャンパスの近隣に防災教育・研究拠点として、多摩南野キャンパスを開設した。

このようなキャンパスの拡大は、国士館の拡張と一体のものであった。これらの校地拡大が国士館の拡張と一

体であったという意味において、柴田徳次郎の長男であった、柴田梵天の役割は大きかった。柴田梵天は、一九四三年には国士館の理事となり、戦後の復興期に理事、校長として学園の再生に寄与した。その後、一九六〇年に国士館大学副学長、一九七三年には学校法人国士館理事長となった。この過程で、各校地の拡張・整備を進め、国士館の発展を進めたのである<sup>(26)</sup>。

国士館の運営が柴田家を離れた後も、町田市や多摩市におけるキャンパスの拡大が進んだことを見ると、国士館の発展と校地の拡大は一体であると考えられる。九州に展開した太宰府校地は閉じたものの、他の東京都下のキャンパスは大学、大学院、高等学校、中学校の修学地として活用されている。今後、国士館が如何なる発展戦略を取るのか、また国がどのような大学立地規制を行うのかによって、キャンパスの新增設や再編が規定されるものと思われる。

本論文では、国士館のキャンパスがなぜこのような立地をしたのか、その要因を検討してきた。この中では、都市計画、建築、土木の観点は捨象した。本来、キャンパスの研究であれば、都市史、都市計画学、建築史、建

築学などの視点も重要である。かかる点からの分析は、今後の研究課題としたい。

〔付記〕本研究はJSPS科研費 JP21K18404、JP24K21391の助成を受けたものです。

〈注〉

- (1) 『国士館要覧二〇二五』（学校法人国士館 二〇二五年）一六～一七頁。
- (2) 佐々博雄「国士館創立と吉田松陰」〔国士館史研究年報 楓原』第六号、二〇一五年）一一～二二頁。
- (3) 熊本好宏「国士館と松陰」〔国士館人文学』第七号、二〇一七年）一六七～一七六頁。
- (4) 佐々博雄「世田谷地域の変遷と国士館―地域と歩む「活き方」・国士館商業学校を中心に―」〔国士館史研究年報 楓原』第一四号、二〇二三年）一〇七～一二四頁。
- (5) 江崎澄子「思い出の記」〔国士館史研究年報 楓原』第八号、二〇一七年）一二七～一三六頁。
- (6) 『国士館百年史 通史編』（学校法人国士館、二〇二二年）二六～二七頁。以下、『通史編』とする。
- (7) 前掲注『通史編』四六頁。
- (8) 前掲注『通史編』四九頁。
- (9) 前掲注『通史編』五三頁。
- (10) 『国士館百年史 史料編 上』（学校法人国士館、二〇一五年）一一二～一二三頁。以下、『史料編 上』とする。
- (11) 前掲注『通史編』五四頁。
- (12) 前掲注『史料編 上』一一八頁。
- (13) 前掲注『通史編』五五頁。
- (14) 前掲注『通史編』五九頁。
- (15) 『世田谷近・現代史』（東京都世田谷区、一九七六年）五九七～五九九頁。
- (16) 『東京急行電鉄五十年史』（東京急行電鉄社史編纂委員会、一九七三年）一九〇頁。
- (17) 『新修世田谷区史下巻』（東京都世田谷区、一九六二年）四二二～四二三頁。『世田谷近・現代史』（東京都世田谷区、一九七六年）六〇八頁。
- (18) 『世田谷近・現代史』（東京都世田谷区、一九七六年）七〇二頁。
- (19) 前掲注『通史編』六五頁。

- (20) 前掲注『通史編』一三八頁。
- (21) 前掲注『通史編』一一九頁。
- (22) 前掲注『通史編』一二〇頁。なお大場については、浪江健雄「大場信續」(『国士館史研究年報 楓原』第八号、二〇一七年)一七九〜一八八頁に詳しい。
- (23) 『世田谷近・現代史』(東京都世田谷区、一九七六年)五九七〜六〇〇頁。なお大場信續は、二〇一三年一月二日放送のNHK「プラタモリ」においても、世田谷線建設の功労者として紹介されている。
- (24) 前掲注『史料編 上』四六六頁。
- (25) 前掲注『通史編』一六九頁。
- (26) 前掲注『史料編 上』四六七〜四六八頁。
- (27) 前掲注『通史編』一七一頁。
- (28) 前掲注『通史編』二〇一頁。
- (29) 前掲注『通史編』四二八頁。
- (30) 前掲注『通史編』四三九頁。
- (31) 前掲注『通史編』三〇九頁。
- (32) 前掲注『通史編』五一五頁。
- (33) 国士館の歴史編纂会編『写真で見る国士館の歴史―苦難と栄光の記録―』(国書刊行会、一九八四年)
- (34) 前掲注『通史編』四三六〜四三七頁。九七頁。
- (35) 前掲注『通史編』五一五頁。
- (36) 前掲注『通史編』五一六頁。
- (37) 前掲注『通史編』五一八頁。
- (38) 前掲注『通史編』五一九頁。
- (39) 前掲注『通史編』六五四頁。
- (40) 国土審議会第二回首都圏整備分科会「工業等制限制度をとりまく現状と課題について」<https://www.mlit.go.jp/singikai/kokudosin/shuto/2/images/shiryoud4.pdf> (二〇二五年九月二八日確認)
- (41) 前掲注『通史編』五二〇頁。なお、国士館がなぜ小野路町を校地として選定したのかは、現時点では不明である。
- (42) 前掲注『通史編』五二二頁。
- (43) 前掲注『通史編』六六一頁。
- (44) 前掲注『通史編』七八五頁。
- (45) 前掲注『通史編』七八九頁。
- (46) 前掲注『通史編』七九七〜七九八頁。
- (47) 前掲注『通史編』八〇五頁。

- (48) 『国士館百年史 史料編 下』（学校法人国士館、二〇一五年）八三五～八三六頁。以下、『史料編 下』とする。
- (49) 劔木享弘（一九〇一～一九九二）は、元衆議院議員であり、文部大臣を歴任した。また東洋大学理事長も担った。同氏の著書『戦後文教風雲録―続牛の歩み』（一九七七年、小学館）の中で、「人脈―私の私淑した先輩たち―」のうちの一人として、柴田徳次郎を挙げている（一七七～一七九頁）。
- (50) 前掲注『通史編』五二三頁。なお、太宰府町への立地は、柴田徳次郎の出身地に近かったことから、後年になって、用地取得の理由として、自らの郷里に教育で貢献することを希望したという意義も付与されていったという。（前掲注『通史編』五二四頁。）
- (51) 前掲注『史料編 下』八四六～八四七頁。
- (52) 前掲注『通史編』五二三～五二四頁。なお太宰府町長の中村義雄が学校誘致に熱心であったことは、『太宰府市史 通史編3』（太宰府市、二〇〇四年）七二六～七二七頁に記述がある。また太宰府天満宮宮司であった西高辻信貞も学校誘致に熱心で、太宰府市に立地している福岡女子短期大学の開学に際して、学校法人に対して、中村義雄市長とともに、西高辻も候補地の斡旋をしている。（『未来のかけ橋 福岡女子短期大学開学五〇周年記念誌』福岡女子短期大学、二〇一六年、六～七頁）
- (53) 有馬解説「昭和戦後期の太宰府と政治―元太宰府市長有吉林之助氏談話速記録―」（『年報太宰府学』創刊号、二〇〇七年）五四頁。
- (54) 太宰府町議会「昭和五十六年太宰府町議会第二回定例会会議録（一九八一年七月七日）」。
- (55) 前掲注『通史編』五二四頁。
- (56) 前掲注54。
- (57) 前掲注『通史編』五二四～五二五頁。
- (58) 前掲注『通史編』八四〇頁。
- (59) 前掲注『通史編』八四一頁。
- (60) 前掲注『通史編』八四三頁。
- (61) 前掲注『通史編』八五一頁。
- (62) 前掲注『通史編』八五二頁。
- (63) 太宰府市議会事務局「太宰府市市議会会議録平成

- 二五年予算特別委員会」五頁。
- (64) 前掲注『通史編』一一三八～一一三九頁。
- (65) 前掲注『通史編』一一四〇～一一四一頁。
- (66) 山本匡毅「大学の立地」(藤塚吉浩・立見淳哉・山本匡毅編『図説日本の産業地理』古今書院、二〇二五年) 五四～五五頁。
- (67) 国士館大学ホームページ「キャンパス紹介」<https://www.kokushikan.ac.jp/information/campus/kaedenomori/> (二〇二五年九月二八日確認)
- (68) 学校法人国士館「二〇一六年度事業報告書」二頁。  
[https://www.kokushikan.ac.jp/houjin/disclosure/business\\_reports/docs/conventionreport\\_H28.pdf](https://www.kokushikan.ac.jp/houjin/disclosure/business_reports/docs/conventionreport_H28.pdf) (二〇二五年九月二八日確認) 学校法人国士館「二〇一九年度事業報告書」三頁。[https://www.koku-shikan.ac.jp/houjin/disclosure/business\\_reports/docs/conventionreport\\_H31.pdf](https://www.koku-shikan.ac.jp/houjin/disclosure/business_reports/docs/conventionreport_H31.pdf) (二〇二五年九月二八日確認)
- (69) 学校法人国本学園ホームページ「沿革」<https://kunimoto.ac.jp/history/> (二〇二五年九月二八日確認)
- (70) 美津濃株式会社ホームページ「施工実績」<https://sports-facilities.nizumo.jp/cases/product/turf/kokushikan> (二〇二五年九月二八日確認)
- (71) 国士館大学ホームページ「キャンパス紹介」<https://www.kokushikan.ac.jp/information/campus/tamaminanno/> (二〇二五年九月二八日確認)
- (72) タウンニュース多摩版「国士館大 南野校舎(仮称)整備へ」(二〇二〇年七月九日) <https://www.townnews.co.jp/0306/2020/07/09/533644.html> (二〇二五年九月二八日確認)
- (73) 学校法人国士館「二〇一九年度事業報告書」一頁。  
[https://www.kokushikan.ac.jp/houjin/disclosure/business\\_reports/docs/conventionreport\\_H31.pdf](https://www.kokushikan.ac.jp/houjin/disclosure/business_reports/docs/conventionreport_H31.pdf) (二〇二五年九月二八日確認)
- (74) 神田神保町へ私立大学が集積した要因については、鹿島茂『神田神保町書肆街考』(筑摩書房、二〇二二年)のうち、特に二三〇～二三二頁に詳しい。
- (75) 『東海大学五十年史 通史編』(学校法人東海大学、一九九三年) 五四四頁。なお熊本東海大学短期大学は、後の九州東海大学(二〇〇八年に東海大

学へ統合)である。

(76) 「国士館史資料室リーフレット 国士館先覚者墓

所」VOT△,970△二〇二二年。



研究  
ノート

## 国士館の宮城奉仕

―戦後の混乱期における勤労奉仕

梶原  
紗千



【キーワード】 皇居勤労奉仕 至徳専門学校 筵旗 謁見  
はじめに

国士館生たちが昭和天皇に謁見する一枚の写真（写真1）が国士館史資料室に残される。一九四六（昭和二一）年に撮影されたといわれるこの写真は、皇居内の庭で五人ほどの国士館生が三列に並び、その代表とおぼしき学生が天皇陛下と対峙し、宮城奉仕（皇居清掃の勤労奉仕の意味）に対する礼を賜っている様子である。姿勢を正して、緊張した学生たちの心境が写真からでも伝わってくる。

一九四六年といえば、終戦の翌年で、戦争によって人々は疲弊し、家族や家をなくし、日々食べていくのも大変な時期であった。そのような状況でなぜ宮城奉仕を行う



写真1 宮城にて昭和天皇との謁見  
1946（昭和21）年（宮坂幹一郎氏寄贈）

ことができたのだろうか。また、なぜ国士館生がその奉仕に赴くことになったのだろうか。

### 1. 「宮城奉仕」の成り立ち

まず、「宮城奉仕」が実施されることとなった経緯について触れておきたい。第一回宮城奉仕は、宮城県栗原郡（現宮城県栗原市）の「みくに奉仕団」と称す、青年男女の六三名が一九四五年二月八日から一〇日の三日間行つたことに始まる。発起人は、同郡出身の鈴木徳一である。鈴木は終戦直後に、松江にいる弟の見舞いに行く途中、空襲で荒れ果てた皇居に立ち寄つた際の印象を、後年執筆した「みくに奉仕団由来記―皇居草刈奉仕の思い出」の中で次のように明かす。<sup>①</sup>

二重橋のわきから周囲を見廻すと、土堤には雑草がぼうぼうと生え、お濠の水は古池のように、よどんで、青松越しに拝した神々しい宮殿の緑青色の瓦も爆弾で炎上して、穴のあいたように、青い空だけが光っている。私は寂しさと、悲しさと、くやしさとに居ても立ってもいられませんでした。

当時、地方から東京を訪れたら、皇居に挨拶をしたの

ちに目的地向かう習慣があつたことがこの文章より分かる。鈴木が度々訪れていたことが「神々しい宮殿の緑青の瓦」がなくなったという記述から読み取れる。同年五月二五日の空襲で皇居の建物は焼失しており、以前は見えていた屋根がもう見えないことを指摘している。鈴木が訪れたのは初秋で、春から夏にかけて生い茂つた雑草や、手入れが施されていないお堀の方が、破損した建造物よりも目に留まっている。宮内省（現・宮内庁）は戦前二〇〇名の人夫を雇って皇居内を整備していたが、<sup>②</sup>終戦後は再雇用されていない状況であつた。鈴木の出身地・栗原郡は農林省主催のコンテストで優勝するほど、草刈りに長けていたことから、草刈りの奉仕を鈴木は発案した。<sup>③</sup>

青年団運動や青年教育に尽力した社会教育者の田沢義輔（一八八五―一九四四）が、大正期に明治神宮を造営するにあたり、全国から青年を集め、勤労奉仕で実施したことを鈴木は思い出した。敗戦で意気消沈している若者に勤労奉仕、今というボランティアを呼びかけて、行うことで希望をもって欲しかったという。<sup>④</sup>ただしGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領下であつたため

に、あらぬ疑いをかけられて失職する可能性がある教員職には声をかけなかった。<sup>⑤</sup>たとえ草刈りのボランティアでも場所が皇居であれば、誤解されかねないということに危惧してである。GHQの統制はさまざまなことに向けられていたため、何が該当するか探り探り行っていたことがこの記述から分かる。

人員は確保できることになったが、宮内省に申し出るにあたり、信用に値する、よき導き手が必要と考え、適任者を探す。そのような時に国務大臣・緒方竹虎の秘書をしていた長谷川峻（のちに労働大臣・運輸大臣）が栗原郡出身であることを人伝えに知る。ちょうど東久邇宮内閣が総辞職したため、帰省していた長谷川を訪ねて宮城奉仕の意義を説明し、方法を話し合い、そして一緒に草刈りを宮内省に願ひ出ることにする。同年一月二二日鈴木と長谷川は宮内省に赴き、交渉に当たり、一二月八日から三日間行うことが決まる。<sup>⑥</sup>発案してたった二か月で実施まで漕ぎつける。要望を直接受けた宮内大臣官房総務課長の笈素彦は当時のことを次のように振り返る。<sup>⑦</sup>

荒廢している皇居内外の清掃奉仕を許してもらえま

いかということでした。これを聞いて私は大いに驚き、かつ感動しました。この頃のように、みな自分分のことのみに狂奔している折からにもかかわらず、そういう奇特な人のあることを、どんなに嬉しく思ったことでしょう。

加えて、侍従長の木下道雄は以下のように綴る。<sup>⑧</sup>

今どき東京の人は、けう自分がたべるお米があるかないかが、最大の関心事であるというのに、仙台のもっと北の地方から、何十人という青年が二重橋前の広場のお掃除のために上京してきたとは、なんとたのもしく、また、すばらしいことだろう。

これらの記述で分かるとおり、当時東京は食糧難で他人を思いやる余裕がなかった。一方、地方、少なくとも宮城県栗原郡では食糧が十分あり、心にゆとりがあったのだろう。また農業関係者にとって一二月は秋の収穫のあとで一年の作業がすでに終わっている時期であったことも、六〇人もの働き手を送り出すことができた理由であらう。

宮内省側としては、受け入れるにあたり別の目的があった。笈は、「陛下が、地方へお出ましになれない現在、

地方の人々が逆におそばへ近付き、接触を保ち、その誠意を披瀝<sup>ひれき</sup>する途を開くことは非常に良いことであると確信した」と記す。宮城奉仕は国民が皇居に来ること、元来行っていた行幸に代わり、陛下が直接国民に接す機会となることを意図したものであった。年明けに「人間宣言」が予定されていた当時、今後の皇室の在り方を模索していたであろうことから、一つの挑戦として宮内省が捉えていた側面もあろう。

一 二月初旬に奉仕は三日間実施され、その間、天皇と皇后が複数回見学に訪れ、ご会釈（謁見）で奉仕団をねぎらった。その件について二月二日に毎日新聞で「戦災聖域の後片づけ 宮城の民草奉仕」、三日後の同月四日に朝日新聞で「天皇陛下と奉仕団 温かい慰労のお言葉 お餅と鶏卵を御嘉納<sup>①</sup>」と取り上げたことよって日本中にこの奉仕が伝わり、各種団体・学校から申し込みが殺到した。<sup>②</sup>

## 2. 国士館生の宮城奉仕

国士館（当時、至徳学園）では、一九四七年三月に卒業する専門学校生が、宮城奉仕に参加している。この学

年は、戦況が悪化している一九四四年に入学し、造船所や金属加工工場で勤労奉仕をして、武道や学間に集中できない学生生活を過ごした。なかには在学中に出征して戦後復学した者もいた。再び学生生活が始まった頃、GHQの占領下で校名を改称することとなり、学生たちは抗議集会を開き抵抗した<sup>③</sup>。また、時を同じくして武道教育禁止と校長の交代が決まり、大きく体制が変わること、国士館生としてのアイデンティティである、国士養成、伝統的な文武両道、そして武道教育を享受できなくなり、目標を奪われてしまった。そのような状況下で、彼らは宮城奉仕に参じたのである。奉仕活動は、卒業前年一九四六年に実施されたことは明らかであるが、卒業生の回顧記には齟齬が見られる。

回顧記が掲載されている『ああ星霜五〇年 燦たり国士の花』は、一九四四（昭和一九）年に国士館専門学校に入学した同級生によって結成された昭徳会（昭和一九年）の「一九」を「トク」と読ませ、柴田徳次郎の「徳」を当てて名付けられた）によって発行された回顧録である。一九四四年から一九四七年春までの国士館での思い出が三〇名によって綴られる。

ある者は三月に赴いたと書き、ある者は一月月に赴いたという。宮内庁の公式では、一九四五年に一団体で、翌年一八八団体奉仕しており、日によって複数団体が実施している。

一九四七年に発行された小野昇による『人間天皇』に一九四五～一九四六年の参加団体リストが掲載されており、「至徳専門学校」は一七二番目に記される。<sup>(14)</sup>このリストは、「団体名」「出身県」「参加人数」「実施日数」「職業」が書かれる。出身県は宮城が圧倒的に多く、地方は東北、関東、北陸に集中する。西日本は少ない。人数は最も少なくて三名、多くて九〇〇名、四〇～五〇名の団体が多い。実施日数は少なくて一日、多くて七日、平均三～四日である。職業は圧倒的に農業が多く、一三四団体もの農業関係者が含まれている。次に商工業や建設業、珍しい例としては鳶、神職、僧侶などがある。学校（教員、生徒、学童、学生）は二七団体で、その内「学生」は埼玉師範学校、新潟農林専門学校、日本経済専門学校、そして至徳専門学校の四団体と少ない。最初に実施したみに奉仕団が宮城の農業従事者であったことから、東北地方の農業関係者が多く希望したことが分かる。

奉仕日は記載されていないため、確たることは言えないが、侍従たちが出版した日誌または日記の中に記載されている県名・団体名と、当リストを比較すると、ほぼ実施した順に記されている。

「至徳専門学校」の三つ前の「八田村青年団」と、二つ前の「萩青年奉仕隊」は一月二十九日に奉仕に来ていることが『入江相政日記』に記されているため、卒業生の守山和夫が記した「戦後(昭和二十一年十一月三〇日)、宮中焼跡の清掃奉仕の際、寒い日だった」という証言が当てはまる。<sup>(15)</sup>『人間天皇』のリストでは、至徳専門学校の実施日数は「二日間」と記されているため、一月二十九日と三〇日、または一月三〇日と二月一日と推定でき、一月三〇日が土曜日であることから、後者である可能性が高い。

申し込みをした経緯については、卒業生の清水稔が「居焼跡の後片付けの奉仕をしている大学や団体があることを聞き、早速、宮内庁へ奉仕の申込みをしたところ、多く賛同を得ることが出来た」と回想している。<sup>(16)</sup>新聞によって広がった情報が人伝えに耳に入り、同級生に声をかけると、参加に同意してくれて、申し込むことにした



写真2 宮城奉仕に参加した学生たち  
1946（昭和21）年（宮坂幹一郎氏寄贈）



写真3 宮城で瓦礫を運ぶ学生たち  
1946（昭和21）年（宮坂幹一郎氏寄贈）

ということである。理由は漠然としているが、国士館は創立期より天長節（四月二十九日）や紀元節（二月二一日）の宮中行事に学園として参列しており<sup>18</sup>、また一九四〇年代に行われた皇紀二六〇〇年記念宮城外苑整備事業に参

加していた<sup>19</sup>。そのため、国士館生は皇居との縁を少なからず感じていたのかもしれない。この宮城奉仕には、実際に何人が関心を抱き、参加したのだろうか。『人間天皇』では<sup>20</sup>、五〇名と書かれてい

るが、関根一行の回顧記では、「三〇名ほどが参加」したと記される。実際に現地で撮影された写真2を見ると四七名、写真3は四〇名写っている。申し込み人数と違わず、約五〇名が参加していた。一九四七年三月に在学三年で卒業した者は、大学同窓会名簿によると一七一名であるため、同級生の三割弱が賛同し、一緒に皇居に奉仕へ向かったということである。

### 3. 奉仕に対する思い出

のちに卒業生の宮坂幹一郎は、『国士館九十年』に以下のように記している。<sup>(23)</sup>

満足な道具もないので、モッコで瓦礫を運ぶ作業は大変なものだったが、「国士館大学」と書いた筵旗を立て、皆で写真を撮影したことなど、よい思い出である。この奉仕中、天皇陛下に拝謁し、私が皆を代表してお言葉をいただいた。今でも生涯の誇りである。当時の困難な状況に直面しても、それに負けない精神力を発揮することは、日頃から国士館で教えられたことである。食べるものも何もなかったが、皆が活力に溢れていたように記憶する。

皇居の勤勞奉仕は、当時の国士館生にとって「活力に溢れ」ることであり、建学の精神にある「国を思い、世のため、人のために尽くせる人材」の育成を試みた国士館の精神に合致する行動であったのだろう。

奉仕に参加した守山和男の回顧記では、天皇への感想が綴られて、宮城奉仕に赴いたことよりも陛下に直面できたことの喜びが勝っている。そして陛下と対面した写真自身を祖父が自慢していたことが強い印象として残っていることが読み取れる。<sup>(24)</sup>

昭和天皇陛下が侍従をお一人従えられ、スプリングコート、中折帽子の簡素なお姿で、我々（国士館）奉仕隊の前まで生まれ、優しいお声でお言葉を賜った。人間天皇様になられたとは申せ、感動の余り身ぶるいしたことを覚えている。ご一緒に写っている写真。祖父の自慢だった。祖父は土木建築請負業を営み、県のお役人はじめ、あちこちの知人、友人に、家の孫が、家の孫が、天皇様と一緒に写真に、しかもお声をかけられたとか、誰れ彼れかまわず自慢話をし、写真を見せて回った。あの嬉しそうな顔を思い出し、難関野郎もいささか、いい祖父孝行したも

のだとしみじみ思う。その自慢の孫（小生）も祖父のなくなつた年齢を超えてしまった。

同じく奉仕に参加した岡野光夫の回顧記には、筵旗を掲げて一列で皇居に向かったことが書かれる。<sup>24)</sup>

復学して直ぐのある日、全員一緒に電車で、渋谷から東京へ、しつかり一列に並び、筵旗を掲げて改札から入り、改札を出る（ここでのことは各自で思い出すこと）。作業は焼け野原の片付け。所は宮城内。

昭和天皇が挨拶に来て下さった。一緒に写真も撮らせていただいた。私達が人間天皇になられた昭和天皇に出会つた最初の出来ごとだった。復路も電車で寮に帰る。いい思い出の一日となった。

筵旗とは、藁やい草などの繊維素材を綿や絹の代わりに使つた旗のことで、誤認であるものの江戸時代の百姓一揆で用いられたイメージとして広く知られている。<sup>25)</sup> 権力を持たない民衆が自らの存在意義と意思を社会に示し、結束するための象徴と解釈される。先の宮坂の回顧記や写真<sup>2)</sup>でも分かる通り、筵旗には「至徳専門学校」ではなく、「国士館大学」と書かれている。GHQの占領下で国士館は一九四六（昭和二一）年一月から一九五

三年三月まで名称を「至徳学園」に変更しているため、当時はもちろん至徳専門学校であった。しかし、一九四四年に入学している学生にとっては、改称しようが母校は「国士館」なのであろう。ささやかな抵抗をこの筵旗で垣間見ることができる。

## おわりに

一九四六年一月、昭和天皇が象徴天皇として「人間宣言」した。GHQの占領下で皇室の行動が監視されている中、宮城奉仕は、天皇陛下や皇族の方々と直接会うことができる貴重な機会となり、その後、従来通りの行幸を行うようになるまで、地方の人々と触れ合い、陛下が国民の現状を把握する機会となつていった。一方、食糧配給の遅れによる抗議活動が皇居前で行われる傍らでも、多くの国民が宮城奉仕を希望し、遠方からでも清掃に訪れ、そして今でも継続している。

一九四六年、国士館生（当時、至徳専門学校生）は、報道や人伝えによって宮城奉仕の存在を知り、約五〇名が賛同して、宮内省へ申し込んだ。そして奉仕作業を一

一月三〇日を含む二日間行つた。学校教育の場での武道禁止によって目的を失つてしまつた国士館生にとつてそれは建学精神に基づいた行動であり、社会に対する抗議であり、そして同時に将来への希望であつたに違いない。

〔注〕

- (1) 鈴木徳一「みくに奉仕団由来記―皇居草刈奉仕の思い出」(『皇居を愛する人々―清掃奉仕の記録―』日本教文社、一九七八年) 一一頁。
- (2) 入江相政『天皇さまの還暦』(朝日新聞社、一九六二年) 一五八頁。
- (3) 前掲書(鈴木) 一四頁。
- (4) 前掲書(鈴木) 一三―一四頁。
- (5) 前掲書(鈴木) 一六頁。
- (6) 前掲書(鈴木) 一五頁。長谷川峻『政治と人間』創元社、一九六〇年、二四二頁。
- (7) 笈素彦「皇居勤勞奉仕の発端」(『皇居を愛する人々―清掃奉仕の記録―』日本教文社、一九七八年) 二八〇頁。
- (8) 木下道雄『宮中見聞録』(新小説社、一九六七年)
- (9) 前掲書(笈) 二八二頁。
- (10) 「戦災聖域の後片づけ 宮城の民草奉仕」(『毎日新聞(東京)』朝刊、一九四五年二月二日) 二面。
- (11) 「天皇陛下と奉仕団 温かい慰勞のお言葉 お餅と鶏卵を御嘉納」(『朝日新聞(東京)』朝刊、一九四五年二月一四日) 二面。
- (12) 前掲書(木下) 一五八頁、前掲書(笈) 二八六頁。
- (13) 唐崎雅夫「今は昔、されど国士館」(『あゝ星霜五〇年 燦たり国士の花』昭徳会、一九九五年) 二頁。以下、『燦たり』とする。
- (14) 小野昇『人間天皇』増補改訂版(二洋社、一九四七年) 二二―三四頁。
- (15) 入江相政『入江相政日記』第二卷(朝日新聞社、一九九〇年) 九六頁。
- (16) 守山和男「矢張り古い人間でござんしょうか」(『喜寿を記念して 燦たり国士の花(続編・第二集)』昭徳会、二〇〇三年) 四七頁。以下、『喜寿』とする。
- (17) 清水稔「残る紅葉も散る紅葉!」(前掲書『燦たり』

一九頁。

二〇一五年）二六～二九頁。

- (18) 『国士館百年史 通史編』（学校法人国士館、二〇二一年）一六三頁。『国士館百年史 通史編』（学校法人国士館、二〇二二年）一六三頁。榊村公一郎「国士館の学生生活を顧みて」（上野孫吉編『国士館大学柔道八〇年史』国書刊行会、一九九九年）一六八頁。福本行雄『ある海軍技師の半生…太平洋戦争の回想』（甲陽書房、一九七一年）一二五頁。
- (19) 前掲書（榊村）一六八頁。『集団勤労作業の概況』（文部省教育調査部、一九四一年）三〇三頁。
- (20) 前掲書（小野）三三三頁。
- (21) 関根一行「国士館と我が半世紀」（前掲書『燦たり』七四頁。
- (22) 宮坂幹一郎「瓦礫からの復興」（『国士館九十年』学校法人国士館、二〇〇七年）五九頁。
- (23) 前掲書（守山）四七頁。
- (24) 岡野光夫「自分史のための履歴覚書き」（前掲書『喜寿』六〇～六一頁。
- (25) 若尾政希『百姓一揆』（岩波書店、二〇一八年）四九～五二頁、呉座勇一『一揆の原理』（筑摩書房、

国士館の思い出

少しは気になる回顧録

昭和五十一年三月 政経学部一部卒業（一二期生）

元職員（平成三二年三月定年退職）

小濱 修



一・後輩善導編

国士館との熱いつながりは、今から約五五年前の一九

七一（昭和四六）年の夏、「国士館に來ないか、おれの制服やるぞ」という従兄からの誘いによつてはじまつた。

これを当時「後輩善導」といつた。地方出身の学生が帰省中（特に夏休み）、大学受験対象年齢者の自宅へ直接出向き、国士館の状況を説明して「受験してはどうか」と訪ね歩くものである。先輩として後輩を「よき道へ導く」という慣例で、今でいう学生募集活動であつた。

我が家は熊本県で魚屋を生業とし、裕福ではないため、大学学納金、つまり学費はかなりの負担と感じていた。母は「貴方が行きたいのであれば心配しなくていいから」

と後押ししてくれた。当時、多くの友人が家業を継ぐか、就職しており、都会の大学へ進学する者など数人ほどしかいなかった。

その後、町の書店で東京の大学を調べ、改めて国士館大学の情報を確認した。自身の気持ちは中学・高校とも陸上競技部の傍ら所属していた美術部の影響もあり、美術大学への進学を夢見ていたが、高額な学納金を目にして親に相談することなどできる由もなかつた。

国士館大学の受験会場は、鹿児島市照国神社脇の鹿児島実業高等学校内の一角であつた。一九七二年二月一日、今でいう「デリバリー入試（現地入試制度）」に私を含めて二〇名ほどの受験生が臨んだ。試験場には、黒い蛇腹の学生服（金ボタンのない学ラン）を着た数人の

国士館生と、教員と思われる試験官が監督していた。面接では、何故かドイツ語の話を伺ったように記憶している。残念ながら試験問題の細部は思い出せないが、受験後、一通り学んだことが發揮できて、ほっとしたことを覚えていた。

東京へ出発する前日の夜、同級生五〇名ほどが激励会を開いてくれた。「大学卒業したら帰って来て親孝行せんばダメゾ！」と声高に励まされて涙したものであった。

東京での住まいは、羽田空港が隣接する大田区に居た姉を頼れば良しとしていたが、上京一年後、頼りの姉は結婚して福島へ。その後は四畳半一間、風呂無し、トイレ共同（家賃七千円）のアパート住まいを余儀なくされた。小田急線読売ランド駅まで坂道徒歩一五分だった。

当時、国士館大学の学納金は、全国一安価（と思われる）で、一九七二年度の「入学試験要項」によれば、政経学部一部の場合、入学金五万円、年間授業料八万六千円など年間二〇万円程度であった。

曖昧な記憶ではあるが、納入方法は現金で八分割払いが可能であった。一・二か月に一度、会計課へ出向いては、職員の皆様の視線を感じながら、納入印を押印して

いただいた辛い思い出がある。会計課の担当職員の方からは、「次回は遅れないように」とよく言われたものであった。ただし、いつも笑顔で対応いただいたことが救いでもあった。

今にして思えば、除籍されることなく何とか四年間で卒業できたのも、分割納入をサポートして下さった担当職員の方のおかげでもあったと思う。

そのような田舎者の私が、従兄の一言から、国士館の制服に帽子を携えて、国士館大学政経学部一部経済学科に晴れて入学した。実家からの仕送りはなく、授業の合間にアルバイトをしながら四年間の学生生活を過ごし、それなりの成績を修めることができた。一九七六年三月に卒業した後は、国士館の職員となり、最終的には学納金を含めた収入・支出全体を掌理する財務部長まで勤め上げることになった。

他界した母が、「国士館に入って本当によかったね」と生前よく口にしていたが、生活の基盤まで築かせていただくこととなろうとは、入学当時、夢にも思っていなかった。

## 二、入学・学生時代編

一九七二（昭和四七）年四月一日、当時、全国一の広さを有するといわれた世田谷校舎一〇号館五階の剣道場で入学式が開催された。式では、創立者である柴田徳次郎館長の訓示を拝聴した。最も印象的であったのは、蛇腹の制服を着た学生の隊列が視界に広がっていたことである。式には旅費の負担面から家族は同席せず、慣れぬ情景の中にポツンと一人でいたこともあり、新入生としての感慨は全く覚えなかった。数日後、この同じ会場で「館長訓話」という講義が開催され、参加しないと「実践倫理」という卒業所要単位が取れなくなることを知らされた。

政経学部一部は（法学部、文学部も同様に）、当時、一般教養科目を主として鶴川校舎（現・町田キャンパス、旧・鶴川キャンパス）に二年間通うこととされていた。構内を見回すと、まず目に入った望岳寮（富士山が望めるの意）を大きく立派な校舎だと勘違いしてしまった。学舎（校舎）はその建物から右に進んだ五階建ての九号館であった。

二年間を学んだこの九号館は、二〇一一（平成二三）年の東日本大震災により壁に亀裂が生じてしまい、止む無く解体された。今ではフットサル場などを備えた「中央広場」となっている。

施設はこのほか、馬小屋を改修した野球部寮と、その並びに平屋の剣道場があった（現在の鶴川メイプルホールの周辺）。その道場では、保健体育科目の実技であった剣道を学んだ。道着は、節約するために高校時代使っていた剣道着を使用した。冬の裸足での授業は辛く、授業終了後の道場の雑巾掛けは、冷たい水を使うため疲れが増幅した。当時の保健体育科目の実技は、柔道、剣道、合気道のみであった。

当時の野球場は九号館寄りの位置にあり、その先の東側にサッカー場（もちろん土）があった。サッカー場は、村野武範主演の青春ドラマ「飛び出せ！青春」の撮影にも利用されていた。授業の合間には、小高い丘の斜面に座って撮影風景を眺めていたものである。この地には、三〇号館が二〇〇二年に建設され、「21世紀アジア学部」が開設された。

入学当時、一限目の開始時刻は八時二〇分で、五限目



世田谷校舎東門  
(1974年頃、第11回『政経学部卒業アルバム』)

の終了は一七時二〇分であった。そのため毎朝五時過ぎに起床し、大田区羽田から京浜急行、南武線、小田急線と乗り次いで、鶴川駅から徒歩で坂道を越えて鶴川校舎へ通学した。生活費を捻出するため、鶴川駅から大学前まではバスを使わず、片道約三〇分歩き続けた。食費を

浮かせるため、食事付きのアルバイトをした。バイト代の支給日は本当に待ち遠しかったことを今でもよく覚えている。

一九七二年、初めての夏休み、正門警備の当番が回ってきた。鶴川校舎正門の警備室前での立ち番である。この立ち番は「実践倫理」のひとつで、都内在住の学生は泊まりかけて警備の任に当たることとなっていた。この時は九州出身で助かった。

思い返せば、五時限目終了後には、毎日学生が教室を掃除することが必須であった。三人がけの木製長机と椅子を教室後方に全て下げ、箒で掃き、モップをかけ、黒板を消して、翌日用のチョークを補充して、そしてゴミ捨てまでの一連作業であった。すなわち「母校を衛り、身を守る」の実践教育を無意識の内に取り組んでいたというわけである。

卒業単位の必須科目の一つに「実践倫理」というものがあった。そのひとつに「館長訓話」があり、月に一度、木曜日と記憶しているが、世田谷校舎の一〇号館五階剣道場で実施された。場内では、正座・瞑想にはじまり、訓話を聴き、藁半紙一枚に纏めた所感文の提出が求めら

れた。また、国民の祝日である二月一日の建国記念日や四月二九日天皇誕生日は、かつての呼称である「紀元節」・「天長節」の式典が、世田谷校舎のグラウンドで挙

行された。当時はまだ中高校舎も無く広い敷地であったグラウンドで、オーブンカーの柴田館長の後に続き、入学当初に配布されたA4サイズ程度の布製の日の丸を杖道に用いる長さ約一二〇cmの棒（杖）の先に結び付け、右手で担ぎ、隊列を組んでグラウンド内を行進した。オーブンカーに代わる前には、柴田館長は馬に騎乗し先頭を走らされていたと聞いている。なるほど鶴川校舎に馬小屋があったことも頷ける。この行進後、隊列を組み、繰り返し声高らかに歌った館歌と国歌（君が代）の斉唱は、創立記念日の式典において変わることなく続けられた。

### 三、学生監・学生主事編

一九七六年（昭和五十一年）三月の卒業と同時に、学校法人国士館の職員として採用された。その年は、モントリオールオリンピックが開催されていた。当時本学の体育学部の教員であった伊達治一郎選手が、レスリングフ

リースタイル七四kg級に出場して金メダルを獲得している。鶴川校舎第四体育館と一・二号館の間にある国旗掲揚塔並びに銘板は、これを記念して建立された。

さて、大学を卒業し、長男として両親の面倒を見るべく「就職しなければ」と考えるも、東京在住で地方の熊本のごくこの企業の企業に就職活動など出来る由もなく、加えて当時は就職氷河期で日本国内の経済は冷え込んでおり、片方ではピーナッツがどうのこうのと「ロッキード事件」で騒がしい時代であった。卒業はしたものの路頭に迷うことになるのではないかと思いつ中、当時の私の学生監から、「コハマ、国士館の職員試験を受けてみないか」と声をかけられた。

藁にもすがる思いで学校法人国士館職員採用試験（正式な採用試験はこれが初めてであると聞いている）を受験、何とか採用が確定した時は、生活するための給与（初任給一〇万八千円？）が頂けると知り、命がつながる喜びであった。

採用時の辞令には、「政経学部の学生主事（学生監から呼称が変更）を命ず」とあり、驚きを隠せない私はその内向的な性格の殻を破り、「国士を育てる国士館が、

まだ成熟していない者にその任を充てるのはおかしいのではないかと配置変更を申し出た。しかしながら、今さら変更はできないと、聞き入れてもらえず、仕事として取り組むこととなった。まさかこの学生主事という職務がその後の私の人生に多様な喜びを与えてくれるなど予想もしていなかった。

その当時の国士館大学では、教員は教育・研究に勤しみ、学生の面倒は学生主事が対応しなければならなかった。単位説明から履修指導及び登録、定期試験の時間割作成、成績登録に通知（家庭通信）、履修者名簿作成、出席学生の出席カードの回収等々、職務は多岐に渡った。当時の出席カードは使用済薬半紙を名刺サイズに裁断したもので、学生がこれを学部事務室の担任学生主事から受領しておき、授業日には、その用紙の裏面に日付、時間、受講科目、氏名を記入していた。出席カードの回収が済み、担当教員が教室へ入室されたときは、着席している学生に向けて「起立、気をつけ、礼、着席」と号令をかけていた。

さすがに初めての時は、声が震えてまともに発することはできなかったものの、回を重ねるごとに、皆の気持



学生主事時代  
(1977年頃、第15回『政経学部卒業アルバム』)

ちを引き締めようと気を込めて声を発したものであった。また出席カードの回収は顔の確認と併せて、対応するクラス約三百人の学生の認識がスムーズに運ぶことにもなり、家庭通信の記入に大いに役に立った。

職務において最も神経を投じたのが、最終学年の四年

生への対応だった。特に就職活動を終えた学生の単位確認をした後に行く、学位記(卒業証書)及び各種教員免許状の筆耕が悩みの種であった。自ら筆を購入し、当時提出されていた戸籍謄本を基に旧書体・旧漢字に苦闘しながらかろうじて卒業式に間に合わせる事が出来た。高校時代、美術部でレタリングに費やしていた時間は無駄にはならなかった。

卒業式終了後、想い出の教室で卒業生一人一人の名を読み上げて手渡した。あふれる涙はぬぐわなかった。アナログ時代の学生主事は、大変な作業に従事していたものだと思いに浸っている。

田舎育ちの私は、他人とのふれあいや会話に大きな戸惑いがあり、不得意であった。人生経験も無きに等しい私が、いきなり学生への指導からさまざまなサポートまで携わることとなり、また一つの発言が如何ほどの責任を伴うかの理解も乏しい中で、業務を遂行しなければならなかった。当時の学生主事には、自衛隊OBが多く、私の前任者は七〇歳で定年退職した旧陸軍の方であった。任された二年生の学生からの「先生若いね」との呼びかけには、さすがに戸惑いを隠せなかった。ただ「先

に生まれた」と理解すれば良いかと割り切った。その後、「小濱ティチャー」と呼ばれるようになり、幾度となく、履修や生活の相談にくる学生がいた。先生というよりは、話しやすい先輩と思ってくれたようで、同世代の会話に楽しさが増していった。

前述したとおり、一九七〇年代、鶴川校舎では法学部・文学部及び政経学部一部の一・二年生が学んでいた。東日本大震災のため解体された九号館は当時、一階に三学部事務室、医務室、鶴川校舎事務室及び学生食堂、また二階には図書室が配置されていた。

毎年一月のイベントの一つとして鶴川祭(当時の学園祭の呼称)が九号館をメイン会場として開催されていた。企画内容は、各クラブの活動成果発表の場として、また活動資金集めの焼きそば、焼き鳥、綿あめ等の屋台が主な内容であった。反面、クラブに所属していない学生は、授業のない休暇日となり、参加・見学する者は僅かばかりであった。このような状況下、在学中の良き思い出に学生が興味を抱く催しをクラスで開催しようと、主な学生数人と半ば強制的に話し合いを設けた。先ずは行動に必要な資金集めとして、クラス全員から五百円を



鶴川祭で  
(1984年11月)

徴収した。

催し物は独断と偏見で地域の子どもたち向けに「お化け屋敷」、老若男女向けの「賞品付きカラオケ大会」、そして学生向けに当時の「ディスコ」サウンドを流すダン

スホールを開催することに決めた。使用許可を得た一つの大教室を手順よく模様替えして会場づくりをした。すべてが学生主導のタイムテーブルであったが、三つの企画はいずれも大入り満員。お客も学生もスタッフもそして私も、大いに満足した延べ二日間の鶴川祭であった。

祭りも終わりスタッフはご苦労さんと考えていたところへ、学生から「このまま解散したくない」と声が上がりに、悩んだ挙句「プロデュース研究会」として再出発することになった。一九八六（昭和六一）年の楓門祭では、世田谷校舎一〇号館五階、当時の剣道場を会場に中山美穂コンサートを、更に同会場をディスコ会場に使用した。イベント撤収後には、翌日の創立式典会場として使用するためパイプ椅子の設置を全て行うなど、毎年企画を拡大し観客も部員も増加していく同好会の監督として楽しいサポートの日々を過ごすことが出来た時代であった。おかげさまで卒業した初期の部員たちとは、今でも交流がある。

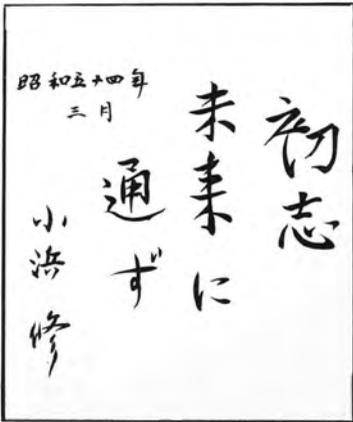
卒業生を二度送り出し、一九八六年には世田谷企画調査室への人事異動を受け、当時の二年生を卒業まで面倒見るという約束を違えてしまった。

その後は、「法人事務部」（現在の「財務部」）経理課へ異動して、二〇〇二（平成一四）年度には、短期大学の改組転換に伴い、新たに設置された21世紀アジア学部の子算担当として異動した。その四年後、同学部の完成から再度経理課へ戻ることとなった。そして、二〇一九年三月に、定年退職するまで約三〇年間経理を担当し、二〇一五年四月からは財務部長の要職も務めることになった。長年担当した経理・財務の視点から、国士館の発展を少し触れておこう。学校法人国士館全体の収入総額の記録を遡ると、一九七三年度の七一億円から二〇二



二（令和四）年度には一九六億円、約二・八倍にも伸びている。そのうち、学納金収入は五五億円から一五八億円に増加して、教育研究経費では一〇億円から七二億円と、学生数の増加とともに進展した。ここでは詳しく記せないが、財務部長時代は、土地の購入や新しい校舎の建設にも携わることができて、充実した国士館人生を全うすることができた。

学生時代を含めて五〇年弱過ごした母校で、将来の国士館生の役に立てたことが何よりも光栄である。



卒業生へ「初志未来に通ず」  
(1979年3月、  
第15回『政経学部卒業アルバム』)

## 資料提供のお願い

国士館史資料室では、国士館の歴史に関する資料や情報のご提供をお願いしております。学生時代の日記・手帳・写真・講義ノート・実習用具などをお持ちでしたらお寄せください。資料は事前連絡の上、着払いにて下記にお送りください。

(送付先)

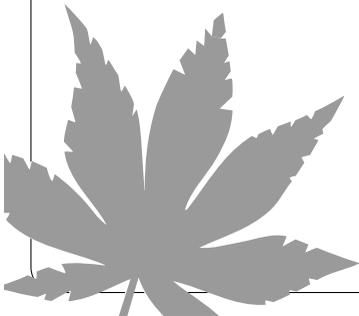
学校法人 国士館 国士館史資料室

〒154 - 0023

東京都世田谷区若林 4-31-10 柴田会館 2 階

TEL 03-3418-2691 / FAX 03-3418-2694

E-mail [archives@kokushikan.ac.jp](mailto:archives@kokushikan.ac.jp)



国士館の思い出

国士館に魅せられて  
—初心忘るべからず—

昭和五七年三月

体育学部体育学科卒業（二三期生）

元職員（令和七年三月定年退職）

横道 正明



はじめに

何かにつかつた時、数々の本に助けられてきた。本は私の悩みを受け入れ、時に温かく、時に厳しく語り掛ける。同じ本でも読む気分が違えば、目に入る文章も変わり、受け取り方も異なる。特に世阿弥の「初心忘るべからず」は私の心を何度も鼓舞してくれた。年を重ねるごとに変わる心と身体にもその折々に「初心」があることを知ってハッとした。これは学生から社会人選手となり、コーチとなり、そして監督となり、一線を退いた後でも響いてくる言葉となった。

世阿弥『花鏡』奥段より

初心忘るべからず

是非の初心忘るべからず

時々の初心忘るべからず

老後の初心忘るべからず

一度は退いた東京都空手道連盟の監督であったが、二〇一九年（平成三一）に再度監督をと声をかけていただき再任することになった。そして、再任だからこそ「初心忘るべからず」を肝に銘じた。そうでなければ奢り<sup>おご</sup>が出ると思った。

おかげさまで、二〇二五（令和七）年の滋賀県開催の国民スポーツ大会（旧称・国民体育大会）で東京都が空手道の男女総合優勝（天皇杯）及び女子総合優勝（皇后杯）を獲得し、喜びを得ることができた。国民体育大会に空手道が正式に採用された一九八一（昭和五六）年の



第 79 回国民スポーツ大会 空手道競技会 男女総合優勝  
(2025 年)

滋賀大会以来、初めて開催地以外で天皇杯、皇后杯を手にするという快挙であった。

開催地が総合優勝するということには理由がある。開催地に決定した都道府県では何年も前からこの大会に向けて特別な強化プロジェクトを組んで、その大会に臨む。

そう簡単にその牙城を崩すのは容易ではない。四三年間その記録が破られなかった事実がこれを証明している。この記録を崩したのが滋賀大会というの何か因縁めいている。

## 1 高校時代（一九七五年～一九七七年）

私は、岡山県山陽高等学校（現おかやま山陽高等学校）にて山本茂先生が顧問をしていた空手道部に在籍していた。当時は名ばかりの空手道部で、部員も一〇名に満たず、決まった練習場所すらなかった。だが、挨拶と礼儀に対しては非常に厳しく山本先生に指導していただき、その積み重ねによって精神的に強い人間を育てようとしてくれていた。もちろん空手の技術は必要ではあるが、試合で精神的に負けてしまつては身も蓋もない。印象に残っている練習は、校庭で大きな声で校歌を歌うというのがあった。最初は他の生徒の笑い声や視線を感じ恥ずかしくて嫌だった。何度も先生から「もっと大きな声で！」と言われ、破れかぶれで怒鳴るように歌うとなんとなく度胸がついて恥ずかしさは消えていった。人前で

も緊張しないようにとの先生の指導だった。すでに高校時代に「気魄」を教え込まれていたのだ。しかし、今考えてみると、それだけではなかった。校歌をしっかりと歌うことで母校に対する愛を植え付けてくれたのだと思う。後々辛いことがあると、不思議と校歌が口について出ることがあり、山本先生や母校を思って勇気をふるい起こした。

部員の中に一人、町の道場での経験者がいて、私は彼を目標として練習を重ねた。私と空手の相性が余程良かったらしくインターハイで八位以内に入るといふ奇跡的な好成績を残した。この部活顧問であった山本先生が国士館出身（一九七四年度工学部卒）であったということが私の人生を大きく切り開いていくことになるのである。

私が高等学校三年生の夏、国士館大学の空手道部が合宿で岡山に来るといふ情報を得た山本先生が、その練習に私を誘い出してくれた。その練習はきつかったが、機敏に動く大学生の姿が輝いて見えた。この人たちと一緒に学びたいと心底思った。

その合宿の帰り、山本先生の運転する自動車の中で、先生が「おまえ国士館からスポーツ推薦の話があったん

だ、どうする？」と尋ねてくれた。あまりにも唐突なことだったが、この練習で感動していた私は「ハイ！」と即答していた。高等学校卒業後は地元で就職するだろうなど漠然と考えており、大学進学という道は皆無だったが、山本先生のおかげで私の人生が大きく開かれた瞬間だったのである。

山本先生がどのように交渉して下さったのかはわからなかったが、大学に特待生として受け入れてもらえることになった。私が国士館大学空手道部で初めての特待生受け入れだと後で知った。しかも山陽高等学校においても初めての特待生だった。この貴重なチャンスを手にした私だったが、その自覚が相応に薄かったのだろう、入学する前に山本先生は私に三つの必達目標を与えた。

- 一、四年生になったらキャプテンになること
- 二、授業は絶対に休まず、きちんと四年で卒業すること

三、特待生であることを絶対に忘れないこと  
この「必達目標」でも分かる通り、山本先生は一本筋の通った人であった。

## 2 大学一年（一九七八年）

一九七八（昭和五三）年春、世田谷校舎や道場まで目と鼻の先にある松陰寮に住み始め、日々大部分を世田谷校地内で過ごした。政経学部一部などの同級生は一・二年次の教養課程の授業を鶴川校舎へ受けに行かねばならなかったが、体育学部は世田谷校舎のみですべて受講できた。

寮の部屋は四人部屋で通常、部活毎に割り振られていた。しかし空手道部は私一人だったため、ウエイトリフティング部の二人の中に一人間借りするような状態で過ごした。同室には一人同級生がおり、その彼は先輩から雑用を頼まれたり、朝夕も先輩たちと一緒に過ごしていた羨ましかった。一方、私はいつも一人で寂しい寮生活を送っていた。とはいえ、部活はそれなりに厳しく、一年生が身に付けなければならないことが色々あった。

### （1）空手道部の稽古

一日のスケジュールは、午前六時半に起床して七時より自主練習をし、九時から午後五時まで授業、午後六時



空手道部員と監督（1981年、前列右から2人目が筆者）

から剣道場の隅で自主練習をし、六時半から夜八時半、長い時は一〇時までしっかり稽古をした。試合の二週間前になると、午前七時からの部活の朝練が加わった。

当時、剣道部は三〇〇名も部員がおり、規律のある団体行動をしていた。一方、空手道部は二〇名ほどで一〇

号館五階の剣道場の隅っこで剣道部が終わるまで準備運動をしながら待っていた。午後六時半以降は広い道場を空手道部だけで使用できたが、少ない部員でどう使うか苦心したことが思い出される。

道場が使えない日は駒沢公園通りを駒沢公園まで部員全員でランニングした。一年生が前を走り「国士館、ゴー！オッス！」と大きな声で連呼する。後ろの先輩たちまで聞こえないと、厳しい指導を受けた。一〇日間の寒稽古の最終日に明治神宮まで隊列を組んで走ったことも懐かしい。夏合宿は、和歌山や三重にいる先輩OBの伝手で、道場と宿を一週間借りて稽古に取り組んだ。

## (2) 部員構成と指導

空手道部の部室は、現在一号館のある場所に建ていた木造二階建てで、二階に部室と応接間のような、先輩たちが過ごす部屋があった。先輩は四年生三名、三年生七名、二年生一名、そして同級生は七名で計一八名だった。同級生は、空手経験者四名（体育・富博隆／私、政経・連石武則／河向武広）、そして初心者三名（体育・近藤正幸、政経・時岡克知／北原正士）で内三名が体育

学部、残りは政経学部一部だった。四年間厳しい稽古を共に乗り越えてよき戦友となった。

監督の泉賢司先生と山本英雄先輩は、毎日遅くまで指導して下さり、木曜日には師範の大石武士先生が駒澤大学から来てくださっていた。大石先生は社団法人日本空手協会の全国チャンピオンで、私はその強さにとっても憧れた。お越しになる日は午後六時に正門で一年生がお迎えすることとなっていた。ちょうど政経学部二部の学生が通学してくる時間帯で、私は当番の日に自転車で来られる先生を見逃してしまったことがあり、この時は先輩にひどく怒られた。

## (3) 一年生の仕事と寮生活

そのほか、一年生は数々の仕事があった。レモン石鹸でタオルを洗い、干してたたむ。部独自のたたみ方があったためしっかり覚えなければならなかった。挨拶は基本的に全て「押忍（オッス）」ではあるが、表情と呼吸を使い分けて三種類の「押忍」を使い分けねばならなかった。

当時松陰寮には風呂がなく、一〇号館北側の浴場を

使っていた。午後九時以降に行くとするでにポイラーが止まっていた、ぬるい湯にしか浸かれなかった。しかも相撲部やラグビー部が入った後であれば、湯船は土で茶色く濁っていた。とはいうものの、こちらも全力で空手の練習をした汗だくな身体だから、気にする場合ではなかった。風呂係の時は入浴時に先輩ヘタオルを渡す仕事もあった。

今は懐かしい寮の思い出だが、夕方になると近所のお寿司屋の寿司駒が「ゲソ弁」を売りに来たことを伝える放送が松陰寮内に響いた。光り輝くシヤリの上に甘塩っぱく煮詰めたイカの足が敷き詰められたお弁当は、非常に人気でみんな夜食用に買っていた。

寮で人気があったものといえば、当時売り上げナンバーワンと言われていた松陰神社通りの三理酒店の「ジャンボビール」だ。東京で初めてクラフトビールを作り、約三リットルもの大きな瓶に入れて販売していた。極貧の学生にとっては部屋飲みのお供だった。

#### (4) 大会デビュー戦と学業

私が一年の時の空手道部はまだ発展途上で、目立った

実績の無い空手道部だったが、一九七八（昭和五三）年一月に行われた第二二回全日本大学空手道選手権大会の団体戦では、福岡大学と引き分けとなって、代表戦では指名されて、何とか勝つことができた。全国三位は国士館大学空手道部としては快挙であり、監督や先輩たちが大興奮で喜んだ姿が今でも目に焼き付いている。それは私にとってのデビュー戦であった。その後の試合でも負けることはなく、二年生になった時にはレギュラーとしてあらゆる試合に出場した。

山陽高等学校の恩師山本先生との約束通り、もちろん授業は遅刻・欠席することなくすべて出席して単位も取った。さまざまな競技（格技・球技）、体育原理、体育史、衛生学、心理学、栄養学、コーチング論など充実した科目を学ぶことができた。高校は建築科で、卒業後は就職するとか思っていなかったのですが、大学の履修の仕組みなど全く知らず、よく分からないまま履修していたら教職課程も取っていた。取る必要もない選択科目もかなり履修しており、気が付けば一年で五四単位も取得していた。

特に思い出深かった科目は「解剖学実習」「水泳実習」

「器械体操」である。

「解剖学実習」では、人体構造を学ぶため日本大学病院へ見学実習に行った。初めて目にする解剖器具やホルマリン漬けの人体の一部は独特の臭いが漂っており、その場にいるのも居た堪れない気持ちとなった。これまで経験をしたこともない恐怖に襲われ、その日の夜は同級生と一緒に寝たくらいである。

夏の終わりに行われた「水泳」の試験では、二百メートルを四種（クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ）で泳がなければならず、瀬戸内の海に囲まれた小島で生まれ育った自分ではあったが、暑い日差しの中、泳ぎ分けながら最後まで泳ぎ切る試験は辛かった。

「器械体操」の授業で鉄棒や吊り輪を学び、その後演技試験もあった。本格的に器械体操をしたことがなかったので苦労した。器具の特性を活かしながら体全体を使って行う競技は本当に苦戦した。

### (5) 野外活動（臨海実習）

「野外活動」という授業名で毎年五日間の合宿があった。一年生は臨海実習（千葉県岩井海岸、一九七八年七

月）、二年生はスケート実習、三年生はスキー実習。そして、四年生となり、教育実習があり母校でお世話になった。

一年生の臨海実習では、千葉県の岩井海岸へ大学から貸切バスでクラスごとに向かった。寮の先輩がお菓子と見送りをしてくれる部活もあり、激励を受けて参加する同級生がとても羨ましかった。昼頃に到着して外にでると、二キロ続く弓状の砂浜は美しく、遠浅で穏やかな太平洋の海は瀬戸内海とは比べものにならないほど雄大だった。

早速、午後から実習が始まり、四日目に実施される遠泳に向け、海で泳ぐことに体を慣らしていった。「遠泳」とは引率の先生のボートの後に付いてひたすら泳ぐ実習で、波に逆らいながら三〜四時間泳ぎ続ける過酷なものだった。先生が時折氷砂糖を補給してくれるが、泳ぎながら氷砂糖を受け取るのは非常に難しく、歯がゆい思いをした。途中でリタイアする同級生もいる中、私は仲間と一緒に見事泳ぎ切ることができた。辛いことを一緒に乗り越えた友と固い結束が生まれたように感じた。

### 3 大学二年（一九七九年）

二年目の寮生活は先輩が入らなかつたため、一人部屋となつた。ほとんどの学生が相部屋なため、寮内の同級生が頻繁に私の部屋へと遊びに訪れることとなつた。自分の部屋では語れない学業の悩みや、部活の上下関係の愚痴など、悩める青年たちの憩いの場として役立つたに違いない。ある種悩み事相談室となつていたのである。ただ「空手バカ」な自分としては空手の話ができる人がいなかったことは残念でならない。空手について話し合える友人が欲しかつた。

「野外実習」でスケート実習へ行つた。温暖な気候で育つた私は冬のスポーツには全く縁がなく、スケートもスキーも大学で初めて体験した。もちろんスケート靴も履くのは初めてで、生まれたての小鹿のように足を震えさせて立つのが精いっぱいであつた。滑るといふところまでたどりに着いたかどうか記憶にない。五日間の合宿を終えたころには、全身筋肉痛に襲われた。

### 4 大学三年（一九八〇年）

三年時の「野外実習」はスキー実習だつた。いきなり頂上までリフトに乗って上がり、死ぬ気で滑り降りてくる経験をした。もちろんリフトも初めてで、乗る時も降りる時も転んでしまった。スケートはその後も縁のないままであるが、スキーは家族で長野に行つた折に娘たちの前で恥ずかしい思いをせずにすんだ。

陸上部が使つていた世田谷校地内の寮（旧館宅、プレハブ一階建て、女子更衣室の裏手）を空手部専用で使えることとなり、一年生から三年生が入寮することとなつた。夢にまでみた部員との相部屋である。さまざまなお話を語り合い、一緒に食事をとつて和気あいあいと過ごした。

朝練もできるようになり、梅ヶ丘公園で坂道ダッシュのトレーニングが定番化していった。環境が変わつたことで、練習の充実度は格段に上がった。そして秋の大会が落ち着いた頃、泉監督が私をキャプテンに指名してくださり、高校時代の恩師の山本先生との約束を一つ達成することができて安堵した。



第 17 回東日本学生空手道大会（団体）にて準優勝  
（1981 年、左端が筆者）

## 5 大学四年（一九八一年）

四年生の時の教育実習は、空手の大会と重なってしまったので、母校である山陽高等学校に期間をずらしてもらい実習を受けた。母校の恩師たちの温かい配慮に感

謝しつつ、緊張しながらも真剣に取り組み、お褒めの言葉をいただき、教える楽しさを知ることができた。ちなみにスーツを持っていなかった私は、国士館の制服である「蛇腹」を着て母校で教鞭を執った。当時、学生服を着た大学生はすでに珍しい時代であったので、教員はもちろんのこと多くの生徒は驚いたに違いない。

一〜三年生の時の学生主事（クラス担任）は菅原顕二先生、四年生の時は今坂節也先生だった。お二人とも自衛隊出身で生活指導をしてくださるだけではなく、さまざまな相談にのってもらった。特に今坂先生はとても面見の良い先生で卒業後もお付き合いが続き、結婚式にも出席していただいた。ご自身で小説を書くほど本好きで、さまざまな書籍を紹介してもらった。そのおかげで私も本好きとなり、本を読む習慣が身に付いた。

四年生になっても部活中心の生活をしており、全く就職活動はしていなかった。一月の全日本大学選手権の後、泉監督から「空手の稽古をしながら大学職員として残りなさい」と言っていた。実業団のように国士館が私の選手生活をサポートしてくれるということである。突然のことではあったが、空手以上にやりたいこと

はなかったので、ありがたい申し出としてお受けした。

その数日後、先生は「日本空手協会の研修生として二年間空手を学んで空手指導員も目指してみないか」という提案もしてくださり、「押忍！」と答えた。だが、先輩たちから「日本空手協会の研修生はとにかく厳しい！」という話を聞いたことを思い出し、正直自分にできるのか不安となり、初日には心底怖気づいてしまった。そんな私の様子に気づいた泉監督が「今日一日だけ行きなさい。不安なら俺も一緒に行くし、やってみて嫌だと思えばやらめればいいよ」と言ってくれさせた。こんな経緯でやっと日本空手協会の道場に向かった純情な私がいいた。色々あったが「大学職員」兼「選手」兼「指導員研修生」という道を進むこととなった。

一九八〇年代は空手界が盛り上がり、指導員の育成と、子供への啓蒙の時代だったようにも思う。空手道がオリンピック種目へ加わることを目指し、実現するようにも感じていた。しかし、それは二〇二二（令和三）年の東京2020オリンピック大会まで待たねばならなかった。



第4回 IAKF 世界空手道選手権大会(団体戦)にて優勝(1983年)

## 6 職員・選手・研修生という三重生活

一九八二（昭和五七）年四月に大学職員として採用されると、毎日学生の朝練に参加し、午前九時に大学の学



ユーゴスラヴィア国際親善空手道選手権大会（個人戦）にて優勝  
（1984年）

生部に出勤。慌ただしく仕事をし、次に恵比寿にあった日本空手協会の道場に向かった。正午から指導員稽古を受けるのだが、研修生は稽古の前に雑用があったので、午前十一時には道場に到着していた。その後大学に戻って午後五時まで仕事を終えた後に選手としての稽古をし

ながら学生の指導をするという高密度の三重生活が始まった。

翌一九八三年、柴田会館の地下に空手道部の専用道場が完成して、自分たちの居場所ができたようでも本当に嬉しかった。他の部に気を遣わず、使いたい時に稽古ができることはこの上もない。大学の空手道部への理解がどんどん深まっていることを肌で感じた。

そのような素晴らしい環境が整えられつつある中、大会での成績も残せるようになった。

・一九八二年…島根国体優勝、カナダ国際招待空手道選手権優勝

・一九八三年…群馬国体優勝、第四回IAKF世界空手道選手権大会（エジプト）団体優勝

・一九八四年…ハンガリーで第一回カラテワールドカップに出場して三位／ユーゴスラヴィア国際親善空手道選手権大会優勝

・一九八七年…二年連続準優勝だった日本空手協会主催全国空手道選手権大会で優勝

## 7 女子部監督、学生寮舎監、都空連強化コーチ

これまで男子部員しかいなかった国士館大学空手道部であったが、次第に女子部員も入ってくるようになり、コーチを任された。一九九〇（平成二）年には一名、一九九三年に三名となり団体戦に出場できるようになった。一九九二年に体育学部は多摩キャンパスへ移転して施設が拡充した。

そのように変化する時代に私は選手を引退し、大学職員としては寮務部世田谷寮務課舎監となった。寮生の対応に追われながら、放課後は女子空手道部の監督、週末は東京都空手道連盟強化選手のコーチをするようになっていた。指導者としての本格的な修行が始まった。

自分に課した心得は以下。

- ・「空」空のごとく澄み切った心で、
  - ・「手」手取り足とり教え、
  - ・「道」正しい道を教えるべし。
- その気持ちをもって教えるべし。

平成はすでに根性論の時代ではない。まして女子学生  
の指導は自分の経験してきた世界とは違うことは何とな

く気付いていた。平等と公平性を保ちつつ、選手の特性を活かした指導をしなければならない。自分が学生だった時にどんなサポートを必要としていたのか回想しながら、初心に返ったつもりで取り組むことにした。

さまざまな試みをしたので、ここでご紹介したい。

- ・ 稽古前のごみ拾い、音楽をかけながらの稽古、そして課外見学（茶道、バレエ、日舞、演劇鑑賞）などを部活の時間に試みた。

- ・ 柴田会館の周りのごみ拾いは、歩行者の妨げにならないように背後まで気を配り、次へそして次へとごみを拾うことで、周囲と自分を意識する訓練となった。嬉しい誤算として、近所のコンビニから感謝され、差し入れをいただいた。

- ・ 集中力とリズム感覚を養うために音楽を流しながら、稽古をしたこともあった。副産物として自発性が生まれ、受身ではない、積極的な行動をとるようになった。

- ・ 空手道の競技「形」には表現力も必要である。ほかの種目から学ぶべきことがあるのではないかと  
思い、バレエや日舞の演技指導を受けさせたり、

演劇鑑賞もしたことがある。また所作を学ぶために友人を介して茶道を学ぶ機会を得て一緒に通った。懇意にしていたレストランの店長にお願いして料理教室を開いてもらったこともある。男子学生とは違った感性や表現力がある女子の指導は、妻や娘たちからのアドバイスが何よりも助けとなった。

また、前述した通り、日本空手協会の研修生としてスタートしたあの日、泉監督が私の様子に気づき寄り添ってくださった、そのような気遣いがとても励みとなり、一歩踏み出すことができた。自分が監督となった時にこの経験はとても役に立ったと思う。一方的に励ますのではなく、気遣い、寄り添うこと。学生との信頼関係を築くことの大切さを泉先生から学んでいた。

## 8 国際交流と高齢者・子供への指導

二〇〇八（平成二〇）年に女子部監督を辞めてからはまた新たなステージが待っていた。東京オリンピックで正式種目を目指していた空手道をもっと理解してもらう

ために国内外での周知活動が始まった。これまでも私は国士館のブラジル支部で空手の指導と演武を披露したと（一九八五年）があつたが、複数の国を回るのは初めてだった。国際交流基金やJICAから派遣された国は次の通り。

- ・二〇〇四年…ヨルダン、ケニア
- ・二〇〇六年…セネガル、モロッコ、ガボン
- ・二〇一一年…ナイジェリア、ベナン、セネガル
- ・二〇一二年…エチオピア、インド
- ・二〇一四年…ブルキナファソン、コートジボワール、タンザニア
- ・二〇一五年…マケドニア

そして国内では高齢者や子供への周知活動が進められ、今まで空手道に接したことがない人々へ指導する機会がやってきた。空手畑で三〇年以上邁進してきた自分としては初心者の気持ちや身体的な限界、集中力など配慮しなければならぬことがたくさんあることを知ることになる。これも「初心忘るべからず」である。

一九八五（昭和六〇）年、学生部厚生課から寮務部舎監となり松陰寮に勤務。二〇二二（令和四）年寮務課課

長となって鶴川キャンパス（現町田キャンパス）の望岳寮へ移り、他の部活の寮生と付き合うようになった。

どんな部活に属し、どんな生活スケジュールで、何か困っていることはないかをさりげなく聞き出し、接するようにはしていた。特に試合の日にはできるだけ駆けつけ応援するようにしていた。今まで自分が数々の先生方からしてもらったことを、今度は自分が返す番だと思った。私は寮生活を始めた大学一年生の時、ホームシックになったことを思い出し、精神的に不安定になった学生には一度帰省することを勧めるようにした。

## おわりに

国士館大学体育学部では、二〇〇〇年に武道学科ができ、二〇一二年にやっと念願の「空手道専攻コース」が加わった。二〇名ほどの学生が毎年入ってくるようになり、本学における空手道部の未来は明るい。国士館大学空手道部の更なる活躍を期待している。

昨年（二〇二五年）春、私は四三年間勤めた国士館大学を退職した。学生時代を含めると四七年間も国士館と

共に歩んできた。長い、長い日々であるが、振り返ると一瞬だったようにも感じる。いつも温かく見守ってくれた先生方、友人、同僚、教え子にいくら感謝してもきりが無い。

私はいろいろなことを同時に上手くこなすことができないタイプではないが、何事も一生懸命取り組み、完走することができた。その支えとなったのは国士館の教育理念である四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」であったと思う。特に本学で培った「気魄」は常に私の原動力となった。そして、空手道を通じて世界に目を向ける体験も得ることができた。

次代を担う大学生の皆様には、学生生活でこの四徳目と真摯に向かい合い、社会に貢献できる人間性を身につけることが大切だということを今一度感じとって欲しいと願う。

すでに創立一〇〇周年を超え、新たなステージを歩み出した愛すべき母校が益々発展することを心から祈念するものである。

企画展記録

創立記念展「国士館生の記憶と記録 戦後80年」

国士館史資料室

はじめに

本稿は、二〇二五（令和七）年一〇月二八日から一月四日まで開催した創立記念展（企画展）の展示内容を抄録するものである。

二〇二五年は第二次世界大戦が終結して「戦後80年」にあたることから、これをテーマとして戦中から戦後の国士館の状況を検証する企画展示を、世田谷キャンパスの国士館大講堂で開催した（詳細は本号「事業報告」参照）。なお企画展は、創立記念日の一月四日を会期に含むことから「創立記念展」の冠称を例年付している。本企画展では、特に、戦中から戦後の国士館生がどのような想いで過ごしていたのかを、日記や回顧記などの資料から振り返った。回顧記などには、当該期の学校生

活の様子が事こまかに綴られる。そこには工場での勤勞奉仕、同級生を戦地へ見送る状況、自らが出征する心境、物資不足下の貧しい食生活、そして戦後の武道教育の禁止や校名変更への違和感などである。回顧記を含む、これらの資料を参考に、当時の学生・生徒らの「目線」を重視し、国士館における戦中・戦後の状況をみる展示とした。

展示は、戦前から戦後を時系列に構成し、第一章から第四章として各コーナーを設けた。第一章「戦時下の学園生活」は戦時下前期（一九四一～一九四二）、第二章「勤勞員と学徒出陣」は戦時下後期（一九四三～一九四四）、第三章「校舎焼失と学生の想い」は都下への空襲期（一九四五）、第四章「戦後の復興に向けて」は戦後復興期（一九四五～一九五三）の四章立てである。それぞれの章に

は、同時期の学生・生徒らによる日記や回顧記から抜粋してパネルとし、体験した記述から当時の状況を見せる展示とした。

このほか関連する三つのテーマを設けて、ポスター展示による特別展のコーナーを設けた。特別展示1「東京大空襲と五月の世田谷」では、国士館の位置する東京と世田谷の空襲状況を紹介した。特別展示2「戦地へ赴いた国士館生」では、特攻隊員となった卒業生に焦点をあてた。特別展示3「宮城奉仕と復興への活力」では、空襲で荒れ果てた皇居の復興に協力した、国士館の在学生を取り上げた。

本稿では、各章における解説コーナーの文章を記し、各章で展示した資料等は抄録して「第一章」などと示した。また、回顧記などから抜粋した展示パネルについては、「学生の証言①」などと示した（通番で表記）。さらに、特別展示の三コーナーについては、ポスター展示で使用した各解説文を抄録した。

また補論として、特別展示2「戦地へ赴いた国士館生」における調査の経緯を末尾に附記した。

## 1. 第一章～第四章の展示

### ○第一章 戦時下の学園生活 一九四一～一九四二

日本は、一九三七（昭和一二）年の日中戦争を経て、一九四一年二月の太平洋戦争へと向かっていった。政府は、一九三八年の国家総動員法や翌年の国民徴用令などで、次第に戦時統制を推し進め、一九四一年以降、さらなる国家総動員体制の強化は、学校教育の場にも大きな影響を与えていく。

一九一七（大正六）年に創立した国士館は、一九二九年の国士館専門学校創設によって、文武両道の校風を確立した。国語・漢文・武道の修学と、寄宿舎生活によって、特色ある教育が開いた。

一九四一年八月、文部省からの「学校報国団」結成の指示により、各学校は校友会等の再編を求められた。学校教練や勤労働員などを、円滑に遂行するための措置であった。国士館では、校長・柴田徳次郎を団長に、各部隊を組織化し、加えて、専門学校では、寄宿舎ごとに独自の学校報国隊も編成した。配属将校による教練の時間数は増加し「軍事教練」色を濃くした。

軍事教練にはさまざまな科目があり、銃の使い方や戦い方などが指導された。陸上での戦いを想定して、通常の剣道とは全く異なる方法で武器を使う訓練も行われた。



軍事教練 1942（昭和17）年頃  
第15回国士館商業学校卒業アルバムより

柔道場は、現八号館周辺に位置した。全寮制であった専門学校の学生は、早朝と夕方に行う武道の稽古が日課で、厳格な学生生活を通じて心身を育み自己を高めた。



柔道場での稽古 1939（昭和14）年頃  
第8回専門学校柔道科卒業アルバムより

第一章 3

専門学校では、剣道家として有名な大島治喜太や斎村五郎らが指導にあたった。四年間武道を学び、中等学校教員免許を取得した卒業生は、全国で後進の育成に務めた。



剣道場での稽古 1941（昭和16）年頃  
第9回専門学校剣道科卒業アルバムより（上杉栄治氏寄贈）

第一章 4

寄宿舎では、はかま姿で自由に過ごす時間もあった。仲間とテーブルを囲み、食事をする時間は何よりも楽しみで、ホッとできるひと時であった。



寄宿舎での時間 1941（昭和16）年頃  
第9回専門学校剣道科卒業アルバムより（上杉栄治氏寄贈）

さらに一九四一年一〇月、高等教育機関での修業年限を短縮する勅令が発せられ、各学校で「繰上卒業」が開始された。国士館においても、一九四二年三月の卒業予定者は三カ月短縮、一九四三年三月以降は六カ月短縮となり、徐々に学問の場は奪われていくことになる。

学生の証言①

専門学校第一四期生 武道地歴科（一九四六年卒）

山津俊郎

昭和一七年四月、地歴科第一回生の入学式はグラウンドで開催された。初代館長、柴田徳次郎氏は国防色の凛々しい勇姿、堂々たる体躯で周囲を圧倒。熱血の祝辞が述べられ、最後に「当校は厳格な教育、文武両道である。早朝五時起床、武道鍛錬実施、大変厳しい学校だから体に自信がなければ、今から遠慮なく帰宅したがよい」と宣言された。（中略）その後、全寮生活も五月になり、夜間にはフトン袋を担いだ友人達が次々に消え、七月には半数になった。<sup>1)</sup>

学生の証言②

専門学校第一一期生 国漢柔道科（一九四二年卒）

榊村公一郎

我々第一一回生は、昭和一七年九月二日に卒業し、同期の大半は世田谷で徴兵検査を受け、早い者では卒業後間もなく軍隊に入隊した。ただ、私は早生まれのため、郷里で八月三・四日に検査を受け、一八年四月に八戸に入隊した。その後、第三回目の繰り上げ卒業があり、その後から学徒出陣となった。

当時の在學生にも、召集令状がきて入隊した先輩も数名いた。親友の武堂嘉夫君も一七年五月に入隊している。一年生の班長としてその指導に尽力し、まことに惜しい限りだった。正気寮生一堂で記念写真を撮り送り出したのだった。<sup>2)</sup>

○第二章 勤労働員と学徒出陣 一九四三〜一九四四

一九四二（昭和一七）年六月のミッドウエー海戦敗北後、戦局は急速に悪化し、政府による統制はさらに強化された。

「勤労働員」は、当初年間三〇日間だったところ、一九四三年に六〇日から一二〇日、翌年には一年と期間が延び、対象となる学徒の年齢も下がっていった。国士館においては、大阪造船所横浜工場や日本冶金会社の工場

第二章 1



寄宿舎での畑作業 1943（昭和18）年頃  
第16回専門学校卒業アルバムより

奉仕作業の一環として運動場や寄宿舎脇などの空地で、野菜などを栽培した。特に全寮制であった専門学校 학생の学生は、寄宿舎での農作業が日常的であった。

第二章 2



出陣学徒壮行国士館大練成大会 1943（昭和18）年11月20日  
第17回中学校卒業アルバムより

例年の運動会は、出陣学徒壮行の「大練成大会」となり、報国団各隊の活動成果を披露する場となった。機甲隊、軽車隊、馬術班、滑空班、射撃班、軍楽班などがあつた。

学徒出陣により二〇歳以上の学生が戦地へ向かうことになった。下部には「身はたとひ南海の果に朽るとも止め置かまし大和魂」と松陰の辞世の句に倣って記される。



大講堂前での出征学生 1943（昭和18）年12月1日

中央に立つ出征学生が、松陰神社前駅のホームで仲間たちに見送られる。出征する者は出征旗を肩から斜め懸けにし、見送る者は円陣を作り、賑やかに踊りながら別れを惜しんだ。



出征学生の見送り 1944（昭和19）年頃

などに、生徒らが集団で赴いて、長期の軍需生産に従事した。校長・柴田徳次郎は、勤労働員を「学業としての勤勞」であり、教育的な「体験」の機会と主張しつつも、生徒の「職工」化や、引率教員の「使用人」化を危惧していた。

一九四三年一〇月、政府は、在学期間中の徴集猶予措置を停止した。「学徒出陣」の開始である。東京では一〇月二一日、雨天の明治神宮外苑競技場で、第一回出陣学徒壮行会が開催され、以後、満二〇歳に達した男子は、在学中でも卒業を待たずに戦地へと赴くことになった。一二月には全国で約四万七〇〇〇人の学徒が一斉入隊となる。国士館においては、一二月二〇日に出席学徒壮行大錬成大会を通例の運動会に代えて実施し、二二日には剣道場での壮行会開催を経て、出征者を送り出した。

学生<sup>③</sup>の証言③

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四七年卒）

守山和男

戦局も暗澹たる様相を呈しはじめ、国民にもいささか動揺が出はじめていた。しかし我ら国士館の学生は、ひたすら純真な一途な気概に燃え、学業も放

棄し、学徒動員として、小生は川崎の日本鍛工において、油にまみれ戦闘機のプロペラの中軸を作っていた。入学当時の空腹、礼儀作法、夜の点呼とビンタの雨、猛稽古は、覚悟のうえで入学したがいささかこたえた。<sup>③</sup>

学生<sup>④</sup>の証言④

専門学校第一五期生 武道国漢科（一九四七年卒）

小野寅生

一九四五年三月二五日  
幾多諸先輩が戦死されたと云ふ報に接するや、正に断腸の思ひなり。自分も遠からず先輩の後を追ふであらう。又断腸の思ひを致す者もあらう。感慨無量。  
一九四五年三月二六日  
・ 勤勞奉仕で学生とは名ばかり。工員と更に変りなし。

・ 仕事も無く、ぶらぶらして居るのも能無く、当を得たるものとは云えぬ。

・ 結局は独学に依る外、術が無い事に成る。俺は二〇年間の徒食を少しでも取り戻して、悠久の大義に生きる事を切望す。

一九四五年五月三〇日

・工場に行き、或は壕堀や便所作りでも立派な学問である。<sup>(4)</sup>

学生の証言⑤

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四六年卒）

岡安昭一

当時はまさに戦時体制下、しかも戦局は末期近く先輩たちが続々と幹部候補生として出陣していた。その先輩を見送るため、渋谷や上野、東京駅頭の壮行会に参加させられた。円陣を作り蛮声を張り上げて寮歌などを歌う。その輪がたまたま同じように壮行会にきていた拓大や日体生とぶつかり、遂には乱闘騒ぎを起し憲兵に追いかけられた記憶などがあるが、よみがえる。

この壮行会のために、毎晩、校庭に集合させられ校歌や寮歌、替え歌の練習をさせられた。それもただ歌うだけでなく、いかに大声で力の限り歌うかの訓練のため、上級生がその声の大きさを聴いて回り、声の小さい、元氣のない者は、いつまでも残されて歌わされてしまう。中にはのどが裂け血を吐く者も

出る始末であった。まさに歌うというより叫びであった。

この苛酷なまでの訓練を連夜のように課せられたことを今思うと、武道家としての気魄を叩き込まれたことに気づく。<sup>(5)</sup>

○第三章 校舎焼失と学生の想い 一九四五

一九四四（昭和一九）年一月頃から、B-29爆撃機による空襲は次第に本格化していった。当初は軍需工場が標的となっていたが、一九四五年三月以降、市街地へも無差別的に行われるようになる。東京東部を焦土と化した三月一〇日の空襲は、一般的に「東京大空襲」と呼ばれ、被災者一〇〇万人を超える最大の被災となった。

同年五月二五日、深夜から翌二六日未明にかけて、今度は東京西部が対象となり、世田谷を含めた市街地をはじめ、国会議事堂や東京駅、新宿駅、皇居の一部も、焼夷弾により焼失した。そしてこの日、国士館も被災した。

学生や教職員による必死の消火活動により、一九一九（大正八）年に完成した大講堂はかるうじて焼失を免れたものの、中学校校舎、専門学校校舎、弓道場、第二剣

道場、国士神社、寄宿舎二棟など、計八棟が焼失した。大講堂のほかに残ったのは、柔道場、剣道場、教職員宿舎および学生の寄宿舎数棟であった。

物資不足の戦時下にあつて、寄宿舎の焼失で生活必需品も失った学生たちは、さらに苦しい状況に置かれた。また国士館にとって、校舎の焼失は、苦難のはじまりでもあった。

学生証言⑥

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四七年卒）

唐崎雅夫

昭和二〇年五月二五日の東京大空襲により、国士館は敵機の直撃を受けて校舎は全焼す。しかし我等の鍛練の場であり精神の拠り所である剣道場は、必死の消火活動により、火災から守ったことは一大の誇りであった。他に残ったのは大講堂と柔道場、それに時習寮などであった。<sup>⑥</sup>

学生証言⑦

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四七年卒）

浜野和夫

昭和二〇年五月二五日、講堂・剣道場・柔道場は

助かったが校舎は全部、斗南寮も爆撃で消失した。国士館の先輩で本部の庶務係をしておられた東木誠治元陸軍大尉が望楼で指揮中、左の股に焼夷弾の直撃を受け、柔道部員の助けで病院に運ばれ、命は救われたが不運にも片足を失つてしまう。

大勢いたはずの学生は、ふだん世話になっている人のところへ避難したり、どこかへ離散していった。居残りの私達は、後ほど柴田徳次郎館長の青梅の別荘へ泊まり込みで防空壕掘りに行つていた。<sup>⑦</sup>

学生証言⑧

専門学校第一六期生 武道地歴科（一九四七年卒）

永山美義

防空壕掘りも順調に進み、掘りはじめて二週間ぐらいて完成間近になった頃、急に学校に帰るようにな連絡があった。帰校してみても驚いた。三月に続く、あの五月の山の手一帯を襲った大空襲で、大講堂や剣道場、正気寮など一部を残したものの校舎はあらかたが焼け落ちてしまい、無残な姿をさらしていた。東木教官は片足切断の大怪我、同級生の得能正展君は顔や両手に火傷を負い痛ましい姿でした。<sup>⑧</sup>



焼失した建物

- |          |          |
|----------|----------|
| ① 中学校校舎  | ⑤ 斗南寮    |
| ② 専門学校校舎 | ⑥ 国士神社社殿 |
| ③ 第二剣道場  | ⑦ 本部棟    |
| ④ 弓道場    | ⑧ 館宅     |

焼け残った建物

- |       |       |
|-------|-------|
| ア 大講堂 | オ 正気寮 |
| イ 柔道場 | カ 教室棟 |
| ウ 剣道場 | キ 館宅  |
| エ 時習寮 |       |

世田谷校地空撮（1947年GHQ撮影、国土地理院所蔵）

学生の証言⑨

専門学校第一六期生 武道地歴科（一九四七年卒）

池田寛

防空壕から外に出ると、得能正展君が焼夷弾をあび、左の頬に大火傷を負ってうずくまっていた。彼の手をとり食堂の裏手の崖を飛び降りた。普段、通っていた斗南寮と正気寮の間の。地獄坂は火の海で通れない。崖を降りたあと、どぶ川を渡って露地に出、夢中で梅が丘のアンミツ屋のばあさんのところへかけ込んだ。

そこで、ヤケドの薬はないかと尋ねると、キンカンならあると言われ、ビンの中に筆を入れ焼けただれた顔にべったりと塗ったところ、得能君は飛びあがり、涙を流してしまった。ああ、こんな素人療法ではいけないと気づき、ただちに経堂の早川病院に連れて行ったことなどが思い出される。午前三時ごろだった。

ところが、院内は担架で運び込まれた患者が、三〇人をゆうに超えるほどでこた返していた。結局、得能君が治療して貰ったのは正午過ぎになってし

まった。その間、彼はじっと痛さをこらえていたのです。付き添った私も胸のつまる思い。そんなことが今でも生々しく思い出されます。<sup>⑨</sup>

学生の証言⑩

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四七年卒）

小出剛史

昭和二〇年になると、米軍の空襲が激しくなり川崎で機銃掃射を受けた時は恐かった。三月一〇日の大空襲の時、一度はグラウンドに集合したが見張当番でないので、自室に帰り寝込んでしまい翌朝被害の大きさにびっくり。その年五月下旬の空襲で校舎も寮も焼けてしまった。消火に努めた後で全身ズブ濡れ、震えながら柴田館長の長訓示を聞かされたことも今はなつかしい。<sup>⑩</sup>

学生の証言⑪

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四七年卒）

高橋新太郎

昭和二〇年五月、東京一帯が空襲警報下にあり、来襲したB-29の爆撃、焼夷弾の雨。慌てた小生は防空壕に真っ逆かさまに転落する。時に剣道場から

たくましく打ち鳴らす大太鼓の音を覚ます。後日、聞くと、三友君が打ち続けたとのこと。その勇氣は尊敬に耐えない。

先輩の雑賀氏が焼夷弾を浴び、顔の皮がペロリとたれ下がったのを見た。その後どうなったか。斗南寮も焼けトランク一つ持って逃げ出し、どこをどううろついたのか、空白。二、三日して学校へ行ってみると、残った正面講義室（佐々木・漢文のひげ先生）に、三々五々、学生が集まってきていた。本部に米があつた筈と行って、鉄かぶとに三杯ほど失敬して松陰神社裏に隠す。あとで食べてみると焼けた米は臭くて食べられなかった。

#### ○第四章 戦後の復興に向けて 一九四五～一九五三

日本は、一九四五（昭和二〇）年八月のポツダム宣言受諾によつて、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領下に置かれた。GHQによる占領政策は、軍国主義的な要素を取り払い、民主的な社会体制を目指すもので、一九四六年の日本国憲法公布をはじめとする諸政策が推し進められた。教育においても、一九四八年の教育

基本法や学校教育法の公布をはじめ、新憲法の精神に基づく、個人の人間的な成長を重視するものに改められた。それらの改革は、国士館にも少なからず影響を与えた。

一九四六年に国士館は文部省の要請を受けて「至徳学園」に法人名を改称し、学校名も至徳専門学校や至徳中学校などに改めた。また、校長・柴田徳次郎の公職追放によつて、子息の柴田梵天が国士館運営の中心を担った。特色であつた武道教育がGHQにより禁止されたことで、専門学校教育課程も改組となつた。そして、校舎焼失後の国士館の復興は、物資不足の状況下もあり、なかなか進展しなかつた。

その状況下でも、残る施設を転用して授業を再開し、教職員や学生・生徒の手で国士館は徐々に活気を取り戻していく。占領政策の終了後、一九五三年には「国士館」へと復称し、また国士館短期大学の創設で、再建の第一歩を踏み出した。

#### 学生証言⑫

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四七年卒）

唐崎雅夫

兵役に従軍、そして終戦。復学者が次第に増えて

第四章 1



大講堂壇上での校長鮎澤巖の講演 1946（昭和 21）年

戦災で校舎を焼失した学園では、復旧と教育組織の維持が課題となった。物資不足のなか、校長の鮎澤のもとで至徳学園としての再出発が図られた。

第四章 2



至徳学園野球部 1951（昭和 26）年頃

高等学校野球部は、終戦後一九四六年四月に創部したとされる。ユニフォームには、改称した「至徳学園」からアルファベットで「Shitoku」と刺繍される。

現五号館付近に正気寮を移築して、高等学校の校舎として使用した。正面には、高等学校の校章と共に、「国士館」復称を示す木製看板も掲げられた。



高等学校校舎前での卒業記念 1953（昭和28）年3月  
田中剛氏寄贈

一九五二年八月に国士館大学維持委員会が有志により組織される。多くの支援者の尽力で、校舎再建と学園再興が進められ、大学創設の礎を築いた。



専門学校校舎焼失跡にて1952（昭和27）年頃

きたが、間もなく校名改称問題が起こり、反対の学生大会を開いたが、空しく昭和二〇年二月二〇日、伝統ある国士館専門学校から至徳専門学校に改名された。武道は全て禁止となり、まるで翼を取られた鳥のごとくであった。<sup>12)</sup>

学生証言⑬

専門学校第一六期生 武道国漢科（一九四七年卒）

浜野和夫

戦後、陸軍・海軍の軍服姿の復員学生であふれる。

武道は禁止「国士館」は「至徳学園」と改称され、

「文化」専門学校として発足。柴田館長は追放の身

となった。従って、私の卒業証書には「昭和二二年

三月二〇日、至徳専門学校長鮎澤巖」となっている。<sup>13)</sup>

学生証言⑭

専門学校第一六期生 武道地歴科（一九四七年卒）

岩崎信友

昭和二〇年四月、召集を受けて砲兵部隊に入隊、

宮崎県で終戦を迎え、復員して学校に復帰しました。

昨日までの教育が一八〇度の転換、民主主義の世の

中になり、学校名も国士館から至徳専門学校に変わ

り、柴田徳次郎先生から鮎澤巖先生を迎えて、デモクラシーを学ぶようになりました。無論のこと、武道は禁止となり戦後の虚脱時代に入った。紋付き袴の国士館が普通の学生服を着るようになり、銀座に出てダンスを習う。卒業までの短期間をそんな風にして過ごした。<sup>14)</sup>

2. 特別展示（3テーマ）

○特別展示1「東京大空襲と五月の世田谷」

◇東京の空襲

東京への米軍空襲は、一九四二（昭和一七）年四月一日から一九四五年八月一日までの三年四ヶ月間に、約一三〇回を数えた。少なくとも被災者三〇〇万人、死者一〇万人、負傷者一三万人、損害家屋七十七万戸の被害を受けたとされる。

B-29爆撃機による空襲は、一九四四年一月二四日から本格化した。飛行機工場など軍需工場を目標とした空襲で、多くは昼間に行われた。しかし、翌年三月一日の東京大空襲を契機に、市街地への無差別的な夜間

空爆が展開されることになる。特に一九四五年三月一日の「東京大空襲」と称される空襲は、東京東部を中心として被災者一〇〇万人以上という甚大な被害をもたらした。焼夷弾による絨毯爆撃は、日本橋から深川区（現・江東区西部）にかけて、一面を焦土と化した。次いで、四月一三日、一五日、五月二四日未明、二五日夜からの空襲も大規模であった。東京西部への空襲は、より広範囲にわたり市街地を焼失させる。四月は、川崎の工場地域から豊島区にかけての爆撃で、特に蒲田地区はほぼ全域となった。五月は、荏原区（現・品川区西南部）や品川区などが標的となり、一般家屋のほか政府機関や金融の中核も被災した。この空襲で、国士館のある世田谷周辺や皇居内も焼失した。

◇世田谷の空襲

世田谷地域への空襲は、一回以上とされ、被災者四万六〇〇〇人、死者行方不明者一一三人、負傷者七〇六人、損害家屋一万一六八〇戸の被害を受けている。

五月二五日夜から二六日未明にかけての空襲被害は、最も甚大であった。現在の東西に広い世田谷区からすれば、被災したのは一部であったが、主に区東部が集中的

に、特に、駒沢練兵場など陸軍施設のあった三宿・太子堂の周辺が大規模に爆撃された。やや北側に位置する国士館においても校舎のほとんどを焼失、隣接する世田谷区役所や青龍山勝国寺も焼失した。松陰神社は幸いにも被災を免れている。交通機関への被害は、小田急線の世田谷中原駅（現・世田谷代田駅）が全焼、また井の頭線永福町駅の車両基地では、ほぼ全車両を失うという状況であった。

○特別展示2「戦地へ赴いた国士館生」

国士館は、一九四五（昭和二〇）年五月に空襲を受け、それまでの記録をほぼ消失したため、どれほどの学生・生徒（学徒）や卒業生が戦地に赴いたのか、明らかにすることは難しい。

一九四一年に勅令により修業年限の短縮措置が開始され、一九四一年度は三カ月短縮、翌年度からは六カ月短縮となる「繰上卒業」が実施される。一九四三年一〇月、在学中の兵役徴収猶予措置が停止され、満二〇歳に達した学徒は、卒業を待たずに戦地へ赴く「学徒出陣」が開始された（一九四四年一〇月以降は満一九歳）。この状

況から国士館の学徒の中にも学校を中退して、陸軍予備士官学校などを受験し、軍人の道へと進む者も存在した。

当時、軍人の道へと進む代表的なものに、一九四三年七月に制度化された特別操縦見習士官（「特操」）がある。いわゆる特別攻撃隊（「特攻隊」）となった人々である。短期間で陸軍の見習士官となる特操への道は、高等教育機関の卒業者や在学者が志願して、訓練一年あまりで少尉に任ぜられるというものであった。

第一期特操の募集には、採用予定二二〇〇名に対し応募者六倍で、一九四三年一〇月に二五〇〇名が採用されている。第二期生は一九四四年二月に、第三期生は六月に、第四期生は八月に採用となり、全国六か所の飛行学校で訓練することになった。

国士館専門学校を卒業あるいは在籍し、特操の道に進んだ方々の全容は明確でないが、確認できる三名を紹介する。特攻隊となった三名のうち、二人は落命し、一人は帰還して中学校教師の道を歩んだ。

◇太平洋に散った特攻隊員

○池田保男

新潟の生まれ。一九三七（昭和一二）年に国士館中学校へ入学して五年間学んだ後、一九四二年四月にそのまま国士館専門学校へと進学して、剣道を専攻した。一九四三年一二月の学徒出陣を前に、専門学校を中退して、一〇月の第一期特別操縦見習士官（「特操」）試験に合格、軍人の道へと進んだ。

第七九振武隊の配属時期は不明であるが、一年程度の訓練を受けて特別攻撃隊（「特攻隊」）の操縦士となる。一九四五年、第七九振武隊一二名は、桶川飛行学校（埼玉）で二週間の訓練後、四月五日に各務原陸軍飛行場（岐阜）、小月飛行場（山口）を経て、四月七日知覧飛行場（鹿児島）に移動した。四月一六日、知覧より出撃したが一〇名の仲間を失う。池田の航空機は、途中で爆弾の落脱により一旦基地へと戻った。二日に再出撃となり、沖繩洋上にて亡くなった。死後、大尉が贈られた。

出撃前に隊員らが書き残した寄せ書きに、池田は、国士館の四徳目「気魄」の文字を記している（知覧特攻平和会館蔵）。

○松原 新

神奈川の生まれ。一九四二（昭和一七）年四月に国士館専門学校へ入学して、柔道を専攻した。同年秋の講道館での紅白柔道大会には、出場記録も残る。その後、軍人を志して専門学校を中退したと思われ、一九四四年二月の第二期特操に合格し、航空機の操縦士となった。

一九四五年四月二六日、松原の属する第一五九振武隊六名は、第一六〇振武隊六名とともに、特攻の命を受けた。陸士五七期生であった両隊の各隊長は、奇しくも国士館中学校を一九三八年三月卒業した小林照彦大尉の教え子でもあった。両隊は一カ月の訓練後、五月二八日に調布陸軍飛行場を発ち、明野、伊丹、芦屋の各飛行場を経由して、第一五九隊は六月一日、第一六〇隊は六月四日に、知覧飛行場へと到着した。

当初、六月五日午後の出撃予定も悪天候で延期となり、翌六日の二三時半、両隊一二名は知覧を出撃して、慶良間沖の敵艦船群へ一六時頃に突入、松原も亡くなった。死後、大尉が贈られた。

◇帰還した特攻隊員

○柄沢嘉則

一九一九（大正八）年新潟の生まれ。新発田中学校を卒業後、一九三七（昭和一二）年四月に国士館専門学校へ入学し、国語・漢文とともに剣道を専攻、一九四一年三月に卒業した。

卒業後の柄沢は、一九四三年一〇月の第一期特操に合格して、航空機の操縦士を志した。特操での訓練後、一九四四年八月から同期八〇名とともに、明野陸軍飛行場（三重）での精鋭訓練も受けた。

一九四五年一月、柄沢は第二二振武隊一二名に選ばれ、二月には東京での本土決戦に備え成増陸軍飛行場（練馬）へと移動する。第二二振武隊は、首元に通例の白絹を巻かず、黒絹を使用したため「黒マフラー隊」とも呼ばれた。三月二〇日、沖縄作戦への参加命令を受けて、二二日に成増を発ち、明野、防府を経て、二四日に都城飛行場（宮崎）に到着する。二七日には隊員全員で日の丸に寄せ書きを残し、四月一日に知覧飛行場へと移った。

四月三日、第二二振武隊一二名は、知覧から特攻出

撃となった。同隊は半数の仲間を失った後、徳之島での命令待機中に襲撃を受け航空機を損失してしまふ。その後、柄沢らは生存者ほか四二名と離島での食糧困窮を強いられるも、五月末には福岡に帰還した。福岡にあった振武寮は、生還した特攻隊員らを收容する施設で、柄沢らはそのまま終戦を迎えた。

戦後、新潟へ帰郷した柄沢は、一九四八年に北蒲原郡京ヶ瀬村立京ヶ瀬中学校（現・阿賀野市立京ヶ瀬中学校）で教員となり、国語と社会、そして得意の剣道を指導する。定年退職の後、一九八一年に六二歳で病没した。

中学校の同僚教員の証言では、終生、特攻隊についてほとんど語らなかったという<sup>5)</sup>。また『特攻隊振武寮』の著者で柄沢と同隊であった大貫健一郎によれば、一九七〇年代から共に戦没隊員の墓参や慰霊祭を行ったという。

### ○特別展示3 「宮城奉仕と復興への活力」

※詳細は研究ノート（49頁）参照

## 3. 補論（調査の経緯）

### （1）戦没者調査から特攻隊の調査へ

今回の展示を構成していく中で、最も困難を要したのは、特別展示2「戦地へ赴いた国士館生」についてである。国士館は、一九四五（昭和二〇）年五月の戦禍の影響から、学籍名簿や卒業生名簿などの記録を焼失したため、どれほどの在学生や卒業生が戦地に赴いたのかを確認することは大変難しい状況にある。複数の他大学においては、すでに「学徒出陣」を含む出征者・戦没者の状況をまとめた調査記録なども作成されるが、本学ではまとまった基礎資料すらないことから調査もなかなか進展しないのである。近年、戦中戦後についてのさまざまな資料が公開され、また二〇余年の国士館史資料室の活動によって資料の収集も進んだことから、今回の関連調査でその一端が明らかになってきた。

ひとつの契機となったのは、二〇一七年十一月の国士館高等学校の秋楓祭で、同校二年三組の生徒たちが特攻隊について紹介した展示を行ったことを知った点であった。彼らは、修学旅行で鹿児島知覧特攻平和会館を訪れ

ており、その展示から二人の卒業生が特攻で亡くなって  
いたことを把握した。当時担任の馬場信悟教諭から展示  
風景の写真などを収集したが、残念ながら写真が不鮮明  
で卒業生の氏名は読みとれなかった。そこで知覧特攻平  
和会館に照会したところ、同会館の展示から「池田保男」  
と「松原新」の両氏であることが分かった。

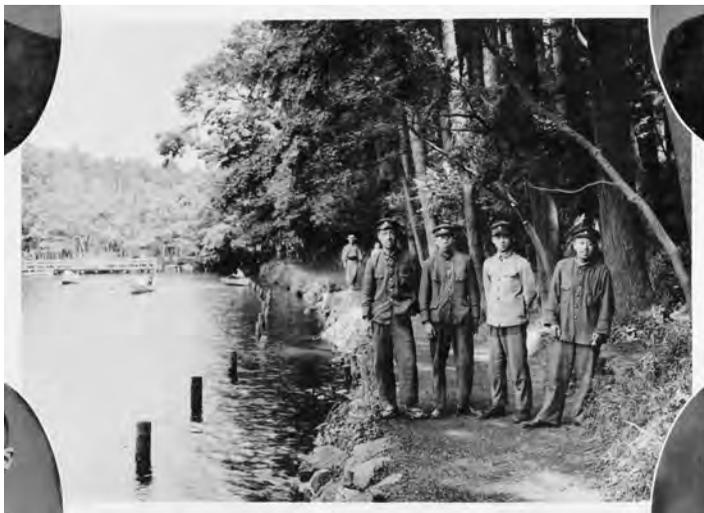
## (2) 特攻隊・戦没の池田について

押尾一彦の『特別攻撃隊の記録（陸軍編）』（光人社、  
二〇〇五年）等には、所属部隊、軍の階級、出身（訓練  
校と期）没年月日、没した場所が書かれたリストと、知  
覧飛行場からの突撃までの状況が記される。また、部隊  
ごとの集合写真も掲載されており、池田も松原も飛行服  
姿の写真が認められる。

池田は、一九四二年三月の「第一五回国士館中学校卒  
業アルバム」に掲載が確認でき、中学校時代の姿を写真  
から把握することができた（写真1）。また、国士館大  
学同窓会が作成した「大学卒業生名簿」でも認められ、  
専門学校では剣道を専攻した記録が残っていた。

ただ一点、疑問が残っている。池田は一九四二年に五

年在学した国士館中学校を卒業して、四年制の国士館専  
門学校に進学している。つまり、その翌年にあたる、一  
九四三年七月の第一期特別操縦見習士官（特操）採用条  
件である高等教育機関（大学、高等学校、専門学校、高



〈写真1〉井之頭にて池田と同級生たち 1941年頃  
（右から3人目が池田）

等師範学校)の卒業という資格を池田は満たしていない。また、特操一期生に合格したために、国士館専門学校を中退したのか、または休学したのかは、明確な典拠資料を確認することができなかった。ちなみに、一九四四年三月の第二期特操募集以降は、高等教育機関の在学者も資格条件に含まれる。

池田が訓練を受けた、桶川飛行学校(熊谷陸軍飛行学校桶川分教場)のあった桶川市には「旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会」というNPO団体が存在する。そのホームページや会報誌『大空への鎮魂』には、第七九振武隊が立出する際の訓示の様子の記述や写真が掲載されており、これらも参考となった。

### (3) 特攻隊・戦没の松原について

一方、松原は、当室が所蔵する「昭和一七年度秋期紅白試合初二段番組(講道館)」の一紙資料に氏名を確認することができた。資料は、講道館において一九四二年一〇月四日に開催された試合の対戦表であり、そこには「国士館 松原新」という表記が認められる。ここから一九四二年一〇月の時点においては、松原が国士館に在

籍し柔道二段であったことが分かる。この大会には、ほかに三二名の国士館専門学校の学生たちが出場している。彼らの氏名を「大学同窓会名簿」などから対比したところ、一九四四年卒業者が一三名、一九四六年卒業者が二名、一九四七年卒業者が一名、一九四八年卒業者が一名である。松原は、一九四四年三月の第二期特操募集に合格したため、国士館専門学校を中退したと推定され、「大学同窓会名簿」には松原の記載はない。出場者に名を連ねた松原は、少なくとも一九四四年〜一九四六年の間に卒業予定であったと考えられる。本展示では一九四二年入学と記したが、推測の域を出ない点は明記しておきたい。なお、松原が所属した振武隊の関連ホームページには、一九四五年六月の戦没時に二二歳であったことが示されているが、入学年については今後の検討を待ちたい。

### (4) 特攻隊・生還の柄沢について

柄沢嘉則に関しては、知覧について調べている際に、たまたま手にした大貫健一郎『特攻隊振武寮 証言・帰還兵は地獄を見た』(講談社、二〇〇九年)で、関連記

述を確認したことが契機となった。大貫は、自身が所属した第二振武隊の仲間として「新潟出身で剣道五段の資格をもっていた国士館大学出身の柄沢嘉則」と紹介している<sup>(16)</sup>。大貫は、同書のほかにも様々な雑誌や新聞などに寄稿しており、生き残った戦友として、柄沢が大貫の各記述にたびたび登場する。大貫の著作物は、一九四三年以降の国内の情勢や特攻隊員が置かれた立場を理解するのに役立った。特に、生存した特攻隊員自らが戦後の活動を著した記録は少ないだけに、柄沢がその後の人生をどのように歩んだのかを想起する助けとなった。

また、一九四一年三月の「第九回専門学校卒業アルバム（剣道科）」（写真2）には柄沢の姿を確認でき、同年三月の卒業であったことも分かった。一九六四年に作成の専門学校卒業者が教員となっている者のリスト「国士館専門学校関係（卒業生等）／国士館大学学生募集（参考資料）」の資料中にも氏名を確認できた。そこから当時、「京ヶ瀬中学校」の教員であったことが把握できた。京ヶ瀬中学校は、当時、新潟県北蒲原郡京ヶ瀬村にあった公立中学校で、現在は阿賀野市立京ヶ瀬中学校となっている。また、柄沢の経歴を調査する過程では、『新潟県剣

道連盟会報』第九八号にその氏名を認めた。新潟県剣道連盟の歴史を振り返る記事の中に、「昭和二一年武徳会が解散しています。しばらく武道の空白の時期があった訳ですが、昭和二五年にしない競技がはじまり、竹刀競技連盟が発足しています。（中略）学校でも部活で剣道部ができました。指導者は、京ヶ瀬は柄澤嘉則、水原は原安衛、安田は富田勝先生、堀越は望月でした」と記されたことが分かった<sup>(17)</sup>。

柄沢自身が執筆した資料は発見できないが、中学校の



〈写真2〉「楠公銅像前」1940年頃  
（左から2人目が柄沢）

教師を務めていたことを考慮すると、何かしらの事象を書いた印刷物や、剣道を指導している写真が残っているに違いないと考えた。二〇〇七年発行の「大学同窓会名簿」に記された住所を頼りに遺族を探したところ、たま柴田会館の四階展示室を訪れた卒業生・山崎尚氏との会話から道が開けた。山崎氏は、国士館大学回天剣友会の東海地区の理事で、新潟の出身であったことから同氏を通じて新潟県剣道連盟へ柄沢の遺族について照会してもらった。残念ながら「大学同窓会名簿」の住所からは引越され、その後の消息は分からなかったが、今後調査は続行していきたい。

ここで一九八三年八月の『読売新聞』の記事から、柄沢に関する興味深い記述を紹介しておきたい。記事は特攻隊の回顧記で、京ヶ瀬中学校の元校長・中山金一郎(当時六六歳)が元同僚教員である柄沢について述べている。そこには「剣道七段の練士で、背筋をいつもピンと伸ばしていた。その姿勢どおり、どこまでも筋を通す、きちようめんで無口な人だった」と記される<sup>(15)</sup>。この人柄を示す記述から、柄沢が国士館専門学校で何を学び、国士館での学生時代がその後の人生にどのような影響を与えたの

かを知りたく、同級生の消息を調べることにした。

#### (4) 一九四一年三月卒業組の学生たち

一九四一年三月「専門学校卒業アルバム」は、剣道専攻と柔道専攻に分かれて作成されている。二冊それぞれの巻末に付された名簿によると、剣道専攻は四三名、柔道専攻は二五名を数え、計六八名を確認できる。なおこの時期には弓道専攻の学科課程も存在するが、各「卒業アルバム」には弓道に関連する掲載がなく、弓道専攻者数なども明確ではない。

一九四二年三月一日発行の『官報』(第四五四九号)には、前年中に教員免許を取得した氏名が記される。これを「卒業アルバム」巻末の名簿と対比したところ、前年三月の卒業者五五名が教員免許を取得したことを確認できた。先に示した剣道・柔道をあわせて計六八名から鑑みると約八割の免許取得率である。戦時下に卒業した者もいるが、ほぼ直ちに召集を受けて出征したと考えられる。戦後、彼らの動向を国会図書館など各種データベースも使用して把握を試みたところ、戦後に就いた職業は

教員が多く、このほか警察、公務員、建設業、一般企業、農業などが確認できた。この中で戦後も剣道・柔道の道を継続して進み、後に七段以上を取得した者が複数名存在する。また、叙勲を受けた者が二名、単著を出版した者が四名いた。この調査を進めるうち、とても優秀な学生であったことに気が付いた。このなかで専門学校時代のことを回顧していたのは、剣道範士九段となった西善延と、剣道範士八段となった羽賀忠利である。

西は、一九四一年の卒業後、南海商業学校（現・岸和田市立産業高等学校）で教員となるが、一年後、戦地ビルマ（現・ミャンマー）へ陸軍少尉として赴き、終戦後は二年の捕虜生活を経て帰国する。復員後、出身地の奈良県に戻って農業を六年ほど営み、武道教育が解禁されると大阪府警視庁（現・大阪府警察）で剣道の教官となる。その後、複数の高等学校、大学、道場で師範を務め、多くの門下生を育てた。後年には全日本剣道連盟副会長も務め、七一歳で九段に昇段、七八歳で勲五等瑞宝章を受章して、二〇一一（平成二三）年九三歳で亡くなっている<sup>(19)</sup>。国士館専門学校へ入学したきっかけは、たまたま警察署の道場で国士館専門学校の学生が出稽古に来てお

り、その姿が立派であると感じたために、道場の指導者に教授齋村五郎を紹介してもらったという。齋村を慕って入学した国士館の稽古では、基礎をみっちり学んだという。「気を錬り合う」ということを重視し、齋村から「気を頂くのだ」と教えられていたという<sup>(20)</sup>。

一方、羽賀は、一九四一年卒業後の二年間、中学校の教員を務めた後、海軍航空隊の教官に転身して、そのまま終戦を迎えた。戦後は、静岡県警察本部の剣道師範となる。また、学校や警察での剣道教育の再開とともに全日本剣道連盟の運営にも携わるようになる。一九六九年に剣道八段、一九七五年に剣道範士、一九九八年に剣道功労賞を受賞して、二〇一〇年九二歳で亡くなる。

羽賀は、国士館専門学校時代を次のように振り返っている<sup>(21)</sup>。「国士館の四年間でやった剣道というものは、朝稽古を中心とした、切り返し、掛り稽古で、一本の筋を通した、勝負にこだわらない、本当の剣道の指導者を作るために行われたものではないでしょうか。」

このように国士館で学んだことを生かし、剣道の道を貫いた同級生がいる一方、柄沢はあえて表にでないように努めていたように感じる。その理由を振武隊で共に過

ごした大貫の証言によって解明できる。それは「生き残った仲間が集まると、お互い、死んだ隊友を背中に背負っているんだなあ」と語り合うのが常。特操一期の仲間には、特別に出世した男はいない。政治家で言えば都議クラスといったところ。その代わり悪人もいない。世の中の中堅の役どころを、黙々と果たしてきた」というものである。<sup>(2)</sup>

戦争、特に特攻隊という作戦が残した「傷」は、個々の人生に一生残る。もし柄沢が生き残った特攻隊員ではなかったら、また違った人生があったのかもしれない。

〈注〉

- (1) 山津俊郎「私のプロフィール④―爺の母校は日本一―」『国士館大学新聞』二〇〇七年四月二五日六面。
- (2) 榎村公一郎「国士館の学生生活を顧みて」(上野孫吉編『国士館大学柔道八〇年史』国書刊行会、一九九九年)一六二頁。
- (3) 守山和男「虱(しらみ)」(『ああ星霜五〇年 燦たり 国士の花』昭徳会、一九九五年)八七頁(以下『燦

たり』と略記)。

- (4) 小野寅生日記1(昭和一八年二月～昭和二〇年五月)(国士館史資料室所蔵)。
- (5) 岡安昭一「黒田節」(前掲書『燦たり』六〇～六一頁)。
- (6) 唐崎雅夫「今は昔、されど国士館」(前掲書『燦たり』一三三頁)。
- (7) 浜野和夫「同袍友あり自から相親しむ」(前掲書『燦たり』三八頁)。
- (8) 永山美義「館長宅の防空壕掘り」(前掲書『燦たり』四一～四二頁)。
- (9) 池田寛「大空襲と鶴川農場の思い出」(前掲書『燦たり』一六～一七頁)。
- (10) 小出剛史「我が苦難の青春を生き抜く」(前掲書『燦たり』二〇頁)。
- (11) 高橋新太郎「特色も知らずに入った国士館」(前掲書『燦たり』六三～六四頁)。
- (12) 唐崎雅夫「今は昔、されど国士館」(前掲書『燦たり』一三三頁)。
- (13) 浜野和夫「同袍友あり自から相親しむ」(前掲書『燦

- (14) 岩崎信友「昭徳会」の呼称について」(前掲書『燦たり』二頁。
- (15) 「三九年目の墓参―ある陸軍特攻隊の記録(一〇)」『読売新聞』一九八三年八月一三日朝刊二三面。
- (16) 大貫健一郎『特攻隊振武寮 証言・帰還兵は地獄を見た』(講談社、二〇〇九年) 八六頁。
- (17) 望月正夫「夏季講習六〇周年を迎えて」『新潟県剣道連盟会報』第九八号、二〇一六年一月、八頁。
- (18) 前掲注『読売新聞』一九八三年八月一三日朝刊。
- (19) 『恩師西善延先生生誕一〇〇年記念誌』(初桜会、二〇二一年) 七五頁。
- (20) 前掲書『西善延』二八〜二九頁。
- (21) 羽賀忠利「無心」(『私の剣道修行 第二巻』体育とスポーツ出版社、一九八六年) 二六〇頁。
- (22) 前掲『読売新聞』一九八三年八月一三日朝刊。



国士館創立 110 周年記念事業



## 寄付金募集

### ■募金の趣意

学校法人国士館は、来たる 2027 年の創立 110 周年に向け、学園の総合整備、奨学基金の充実、スポーツ・文化活動の振興及び国士館大講堂の保存環境整備に取り組んでいます。皆様方のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### ■事業の概要

期 別	主な事業項目
通 期 (2020/4~2028/3)	学生・生徒への修学支援事業 スポーツ・文化活動の振興 国士館大講堂（国登録有形文化財）の保存および防災対策 高等学校・中学校の教育環境の充実 3 キャンパスの教室等の重点整備 防災教育の推進強化 世田谷キャンパスの再整備の検討
第 1 期 (2020/4~2022/3)	町田キャンパスの整備 国士館楓の杜キャンパスの運用開始 多摩キャンパスの拡充整備 近隣の救急病院等との連携構築
第 2 期 (2022/4~2025/3)	多摩南野キャンパスの整備 国士館楓の杜キャンパスへのスクールバス運行
第 3 期 (2025/4~2028/3)	4 キャンパスの施設環境の充実

※計画の具体化により若干の変更を伴います。また、寄付金は、総事業費の一部に充当させていただきます。

### ■申込方法

専用の払込用紙のほか、インターネット（オンライン決済）またはコンビニエンスストア、クレジットカードを利用した決済もできます。寄付金は税制上の優遇措置を受けられます。詳細は募金事務室までお問い合わせくださるか、下の QR コードをご参照ください。

#### ✿ 募金についてのお問い合わせ

学校法人国士館 募金事務室

電話 03-5451-8207

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1

(世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎 1 階)



この QR コードから、国士館大学 HP  
創立110周年記念事業募金 募集要項  
のページにアクセスできます

## 国士舘史資料室の活動

### 1 調査・収集

#### (1) 主たる資料調査

令和7年1月から12月までに実施した資料調査並びに収集の主な活動は以下のとおりである。

##### 学内調査

#### (1) 武道・徳育研究所旧蔵資料調査

日 時…令和7年2月21日

調査者…熊本好宏・鈴木正博

#### (2) 理事長執務室資料調査

日 時…令和7年3月3日～26日

調査者…熊本好宏

#### (3) 中学校・高等学校職員会議資料綴等調査

日 時…令和7年3月10日

#### (4) 『政経論叢』（政経学会発行）未収集資料調査

日 時…令和7年4月30日

調査者…鈴木正博・安藤志真

#### (5) 大学院課発行物資料収集調査

日 時…令和7年11月19日

調査者…鈴木正博・安藤志真

#### (6) 学内発行物印刷データ収集調査

学内内部課室で定期に発行される発行物のうち発

行物原本とあわせて印刷製本後の印刷データ（P

D F）を収集した（随時実施・部課室及び印刷製

本業者）。

#### (7) イラク古代文化研究所資料調査

昨年に引き続き、資料の整理・電子化等につい

て、大学デジタルアーカイブセンターの業務支援を行った（令和7年3月31日迄）。

調査者…熊本好宏

**学外調査**

**(1) 上塚司関連資料調査**

日 時…令和7年1月16日、1月17日、1月19日、

1月31日、2月19日、3月7日、3月27

日、5月2日、6月6日、6月16日、7

月18日、8月21日、9月12日、10月31日、

12月2日、12月5日

調査者…熊本好宏

**(2) 世田谷区立平和資料館・川崎市立中原図書館資料**

調査

世田谷空襲被災状況等の把握

日 時…令和7年5月16日

調査者…梶原紗千

**(3) 平和祈念展示資料館調査**

日 時…令和7年6月12日

調査者…梶原紗千

**(4) 慶應義塾史展示館調査**

日 時…令和7年7月11日

調査者…梶原紗千

**(5) 小村寿太郎記念館調査**

小村欣一・捷治関連資料の所蔵概況の把握

日 時…令和7年8月20日

調査者…熊本好宏

**(6) 大学サッカー部戦績調査（於国会図書館）**

関東大学サッカーリーグ等の戦績一覧表作成

日 時…令和7年10月30日、11月5日

調査者…熊本好宏

**(7) 宮内公文書館調査**

皇居勤労奉仕統計綴（昭和20年代）等

日 時…令和7年12月8日

調査者…梶原紗千

**(2) オーラル調査**

**(1) アンケート調査**

本年は関係者へのアンケート調査を実施しなかった。

(2) オーラル・ヒストリー調査

次の4名の関係者に口述記録調査を実施した  
(大澤英雄伝編纂関連)。

間瀬誠吾氏(昭和33年体育学部卒・評議員)、脇本三千雄氏(昭和33年体育学部卒・元評議員)、堀江健二氏(昭和41年体育学部卒・元体育学部教授)、渡辺剛氏(昭和43年体育学部卒・元体育学部教授)

(3) 主な寄贈資料

・ 国士館業務資料ほか一式  
寄贈者：鈴木篤氏(昭和57年3月法学部卒・学校法人国士館元職員)  
・ 『写真で見る国士館の歴史』並びに昭和41年度入学式写真4点  
寄贈者：大野謙次氏(昭和45年3月工学部卒)  
・ 「釜山日報」(2001年3月27日、釜山日報社)ほか学部関連資料一式  
寄贈者：菊川長徳氏(元21世紀アジア学部教授)  
・ 第81回・第91回選抜高校高野球大会応援グッズ資料

一式

寄贈者：小池和恵氏(元国士館中学校教員)  
・ 歴代理事長覚書ほか教員組合資料一式  
寄贈者：小橋昇氏(元法学部教授)  
・ 高等学校早川章一教諭旧蔵資料(学級日誌、高等学校全日制・同定時制写真ほか)一式  
寄贈者：中野剛氏(元国士館高等学校教員)  
・ 国士館発行物資料一式  
寄贈者：田房妙子氏(昭和55年3月短期大学卒・学校法人国士館元職員)  
・ 『早稲田学報』(昭和25年11月、早稲田学報編集室)、  
「国士館大学設置認可申請書添付図面」(昭和32年9月、青焼図綴)、国士館学生募集広告(『東京朝日新聞』4面、大正9年4月7日)等14点  
寄贈者：寺島正芳氏(映画史研究家)  
・ 「国士館大学建設予算」(推定大正15年11月25日国士館維持委員会資料)  
寄贈者：上塚芳郎氏  
・ 名誉教授矢野博志旧蔵資料一式(斎村五郎書、大野操一郎書、小野十生書、第9回全日本学生剣道大会

3位賞状、写真アルバム、第35回全日本学生剣道優勝大会優勝写真パネル、大学剣道部関連資料ほか)

寄贈者・矢野雅之氏(平成2年3月体育学部卒)

・野田卯太郎掛軸「神明」等66点

寄贈者・石部雄紀氏(平成26年3月21世紀アジア学部卒)

・頭山満揮毫色紙「水月」等2点

寄贈者・濱地國光氏(財団法人国士館発足時評議委員濱地八郎関係者)

・「精勤賞」等在学時資料2点

寄贈者・砂原均氏(昭和46年3月体育学部卒)

・「優等賞」「功労賞(争友組)」等在学時資料4点

寄贈者・柴田都子氏(昭和46年3月体育学部卒・元体育学部准教授)

・『国士館80年の歩み』等国士館発行物一式

寄贈者・木下道代氏(昭和57年3月短期大学卒・学

校法人国士館職員)

## 2 整理・保存

### (1) 資料目録作成状況

本年(令和7年12月31日現在)の国士館史資料室の所蔵資料、調査収集資料、参考図書等の目録(データベース)作成状況は別表のとおりである。

### (2) 資料電子化・保存処置

本年は、主に以下の資料について電子化及び修復・保存処置を専門業者に委託した。

・財務部資料経理元帳(平成21年度～平成23年度)電子化

・学部長会会議資料(平成元年度～平成21年度)電子化

・名誉教授矢野博志旧蔵扁額(斎村五郎書・大野操一郎書)及び第9回全日本学生剣道大会3位賞状(破損)修復・電子化

・上塚司関連資料電子化

・昭和16年3月専門学校(柔道科)アルバム電子化  
・卒業アルバム写真切出

## 収蔵資料及び目録化の進捗状況

名称	内容	令和5年度 目録化済	令和6年度 目録化済	令和7年度 目録化済
法人記録史料	法人（教学を含む）組織が作成・発行したか、または外部機関より受領した文書	20,183	20,905	21,850
発行物	学内で刊行される出版物	11,294	11,950	12,494
写真・その他の映像・音声資料	国士館に関わる写真その他の映像・音声資料	12,789	12,791	12,836
物品資料	国士館に関わる物品資料	1,569	1,670	1,725
調査収集資料	学内外の関係資料所蔵機関への調査収集資料	7,159	7,245	7,610
参考図書	主に各関係機関が発行している出版物	2,321	2,374	2,430
	合計	55,315	56,935	58,945

(令和7年12月31日現在)

・『国士』創刊号（専門学校国士会、昭和10年7月）  
電子化

### 3 利用・公開

#### (1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）

国士館史料室は、収蔵資料利用者へのサービス強化のため、平成23（2011）年4月に閲覧室を整備し、同時に資料室ホームページ上で収蔵資料検索システムのWEB公開を開始している。収蔵資料検索システムは、資料閲覧のために来室する利用者にとっても利便性を高めている。

平成28年10月3日に学内教職員向けに公開した「国士館アーカイブズ」は、令和7年12月現在、収蔵資料検索システム（43866件）、基礎年表検索システム（3508件）、基礎データ集（略年表など）を有し、学内限定で利用できる。

本学園の令和7年度から5年間の指標である「国士館第3次中長期事業計画」において、収蔵資料のWEB公開を一層強化するものとした（到達目標は学外4500

件以上・学内35000件以上)。初年度となる本年は、学内教職員向けのWEB公開を進めて約17800件を追加しその利便性を高めた。

## (2) ホームページ (令和7年更新)

本学園が進めた国士館ホームページの全面リニューアル計画に基づいて、令和6年10月から準備作業を本格化させ、令和7年5月29日に資料室ホームページの全面リニューアルを実施した。スマートフォン向けに最適化したほか、新たなコンテンツとして「国士館のあゆみ」ページを設けて20項目約9000字によって創立以来の沿革を概観できるようにした。

「お知らせ」

・梅ヶ丘校舎で「国士館の歴史」展を開催(令和7年

3月5日)

・資料室の一時閉室について(3月11日)

・『国士館百年史 通史編』の索引(事項編)を公開

(3月13日)

・国士館大講堂(国登録有形文化財)見学ツアーのご

案内(参加者募集)(4月30日)

・国士館大講堂見学ツアーを開催しました(5月19日)  
 ・国士館史資料室ホームページリニューアル(5月29日)

・国士館大講堂(国登録有形文化財)見学ツアーのご案内(参加者募集)(6月2日)

・梅ヶ丘校舎で「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―

展を開催(6月4日)

・国士館大講堂見学ツアーを開催しました(6月21日)

・夏季の一時閉室及び柴田会館エレベーター工事につ

いて(7月9日)

・梅ヶ丘校舎で「受け継がれる表象―校章・マーク・

ロゴ―」展を開催(8月2日)

・博物館実習を実施しました(8月2日)

・国士館大講堂(国登録有形文化財)見学ツアーのご

案内(参加者募集)(9月29日)

・梅ヶ丘校舎で「学園祭の歴史」展を開催(10月6日)

・東京文化財ウィーク2025 国士館大講堂を特別

公開します(10月8日)

・展示室の閉室について(10月8日)

・創立記念展「国士館生の記憶と記録 戦後80年」を

開催（10月8日）

・中高大接続行事で自校史教育「国士館を学ぶ」を実施しました（10月8日）

・国士館大講堂見学ツアーを開催 創建106年の文化財を一般公開（10月18日）

・国士館大講堂（国登録有形文化財）見学ツアーのご案内（参加者募集）（10月29日）

・創立記念展「国士館生の記憶と記録 戦後80年」を開催しました（11月7日）

・国士館大講堂（国登録有形文化財）見学ツアー 2025は全日程を終了しました。（11月15日）

・展示室の閉室について（11月15日）  
・梅ヶ丘校舎で「国士館大講堂」展を開催（11月26日）

〔刊行物〕

・『国士館史研究年報 楓原』第16号の全頁（PDF）掲載（3月）

アドレス

<https://www.kokushikan.ac.jp/archive/>

(3) 教育普及活動

(1) 常設展示

国士館史資料室では、柴田会館4階に展示室を設け、国士館の歩みを示す関係資料を一般公開している。国士館の創立者柴田徳次郎にゆかりの資料や、創立以来の支援者、各時代の学生生活に関する貴重な資料などを展示している。

開室日時 月曜～土曜 10:00～16:00  
（日曜祝祭日、学園の定める休日等を除く）

※観覧無料

令和7年1月～12月の観覧者数は、以下のとおりである。なお、柴田会館の建物空調全面工事に伴って、令和7年11月17日から令和8年1月31日まで展示室を閉室とした。

・学内者数	402名
・学生・生徒	375名
・教職員	27名
・学外者数	279名
・卒業生	60名
・一般	219名

・総観覧者数 680名

(2) 梅ヶ丘校舎展示コーナー企画展(出張展示)

世田谷キャンパス34号館(梅ヶ丘校舎)1階の展示コーナーにおいて、次の企画展を開催した。

・令和7年3月～5月「国士館の歴史」展

・令和7年6月～7月「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―」展

・令和7年8月～9月「受け継がれる表象―校章・マーク・ロゴ―」展(博物館実習成果展示)

・令和7年10月～11月「学園祭の歴史」展

・令和7年11月～令和8年3月「国士館大講堂」展

(3) イベント企画展(出張展示)

令和7年の大学オープンキャンパス、本学主催高等

等学校教員対象入試相談会、教育懇談会開催日に、

国士館大講堂において写真パネルによる企画展示

「国士館の歴史」を開催し、国士館の歴史を写真で

紹介した。また、オープンキャンパス時には、本学

受験希望者・保護者に本学への理解を深めてもらう

べく「国士館100年の軌跡」(DVD)等の上映

もあわせて行った。なお、開催日や入場者数は、次

国士館生の記憶と記録



創立記念展ポスター

のとおりである。

・ 3月23日(日) オープンキャンパス 297名

・ 5月9日(金) 本学主催高等学校教員対象入試

相談会 38名

・ 5月18日(日) 教育懇談会 238名

・ 6月8日(日) オープンキャンパス 251名

・ 8月2日(土) オープンキャンパス 316名

・ 8月3日(日) オープンキャンパス 294名

・ 8月30日(土) オープンキャンパス 370名

・ 9月28日(日) 教育懇談会 352名

(4) 創立記念展「国士館生の記憶と記録 戦後80年」

(出張展示)

国士館の創立108年を記念して、国士館大講堂を会場に、戦中から戦後の国士館生の様子を、日記・回顧記などの資料とともに振り返った企画展「国士館生の記憶と記録 戦後80年」を開催した。令和7



創立記念展

年が「戦後80年」となる点を機とした企画である。

展示期間は、楓門祭(大学学園祭)と秋楓祭(中高文化祭)の実施にあわせて、10月28日(火)～11月4日(火)とした。また、11月2日(日)・3日(月)は「東京文化財ウィーク」に参加して、大講堂の一般公開事業とあわせた位置づけで、この企画展を実施した。あわせて11月3日には、ホームカミングデイも実施され、卒業生をはじめ多くの来場者が訪れた。令和4年に導入した大講堂グッズガチャ(カップセルトイ)も引き続き設置し、期間中697件の参加を得るなど今年も盛況であった。

入場者は、全期間で2130名、うち東京文化財ウィーク・楓門祭・秋楓祭の開催期間(11月2日・3日)は1954名であった。

(5) 文化財「国士館大講堂」愛護啓発(定期開放等)

本年も学内外に国登録有形文化財「国士館大講堂」の意義や特徴を周知し、あわせて文化財保全への啓発等を行った。また、学外者対象の大講堂「見学ツアー」は3年目の実施となった。

また昨年度に引き続き中高卒業式、学部別学位授

与行事、中高入学式の開催日には大講堂の開放を行った。それぞれ学生・生徒・保護者らが来場して、記念の写真撮影などの場としても利用された。実施日と入場者数は、次のとおりである。

- 3月8日…中学校・高等学校卒業式 28名
- 3月19日…学部別学位授与行事 234名
- 4月7日…中学校・高等学校入学式 431名
- ・国士館大講堂「開放週間」の実施

学生・生徒が大講堂内に入って建造物に親しみ、その意義や特徴の理解を高める機会を設けるため、令和4年に開始した大講堂「開放週間」を引き続き実施した。所定月の1週間(月曜～金曜日・各日2回実施)大講堂を定時に開放し、参加者に対して学生キャスト(学生ガイド)が15～20分程度の解説を行った。学生キャストの有志学生は、必要となる知識をオンデマンド等で修得し、模擬解説を経て大講堂のガイドに臨んだ(12月末現で12名)。なお大講堂キャストは、オープンキャンパス等の出張展示でも、大講堂での解説・対応を行った。開放週間の実施日及び入場者数は、次の

とおりである。

- 4月14日～18日 88名
- 5月12日～16日 49名
- 6月16日～20日 16名
- 10月13日～17日 26名
- 11月10日～14日 27名

なお、「開放週間」中、以下の見学者に対しても、別途学生キャストによる大講堂の解説を実施した。

- 6月17日 世田谷区立弦巻小学校3年生及び引率教員計36名
- 10月15日 昭和45年度体育学部卒業生27名

・国士館大講堂「見学ツアー」の実施

令和5年から開始した大講堂「見学ツアー」は、学外者向けの公開イベントである。本年も午前・午後の2部制とし、各回1時間程度、定員10名で実施した。学生キャストが大講堂の特徴を案内し、多くの人々が文化財としての大講堂に親しみ、また存在価値を理解する機会を創出した。あわせて柴田会館4階の展示室も学生キャストが案内・解説し、国士館の歴史を紹介した。見学ツアーの実



大講堂見学ツアー

施日と入場者数は、次のとおりである。

5月17日	13名
6月21日	27名
10月18日	19名
11月15日	9名

この大講堂公開イベント「見学ツアー」は、世



大講堂グッズ（ガチャ）

田谷区が「区内大学応援プロジェクト」として令和7年10月から開始した「ふるさと納税」の事業としても組み込まれることになり、地域貢献の意義をより高めることになった。

・国士舘大講堂グッズ（含ガチャ）

国登録文化財としての建造物保全への啓発を図

る一環として、大講堂グッズ制作を学生キャストによる企画会議を経て実施した。本年は大講堂イラストをあしらったトートバッグを作成して、学内外に配付するなどした。また、大講堂ガチャ（カプセルトイ）も年間を通して大講堂に設置し、メモ帳・付箋・ポーチ・トートバッグの4種の大講堂グッズをはじめ、先の記念事業で制作された「コクシバ」グッズも交換品とした。なお全投入金は、創立110周年記念事業募金（大講堂の保存および防災対策）を含）として取り扱った。

(6) レファレンス（含資料閲覧）

令和7年1月～12月のレファレンスは、学内・学外合わせて91件であった。また、資料閲覧・利用には延べ10件に対応した。

(7) 講義等支援

平成21年4月の国士館史資料室発足後、資料室を利用する講義支援等の依頼は、毎年増加傾向にある。特に、大学各学部で開講する初年次教育関連ゼミの支援依頼や、博物館学関連の講義支援については、毎年恒例となっている。

各学部・学科で開講する初年次教育への支援については、政経学部開講「初年次ゼミナール」、経営学部開講「フレッシュユマニゼミナール」、文学部教育学科開講「教育学の基礎A」に設けられた自校史教育のコマについて講義支援を実施した。また講義支援に留まらず、新採用教職員研修への支援なども随時実施した。

主な講義等の支援と担当者は、次のとおりである。

・新採用教職員研修支援…4月5日教員13名（於大講堂）（熊本好宏）、4月7日職員9名（於大講堂・展示室）（熊本好宏）

・政経学部「初年次ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）…4月21日隠岐須賀麻衣ゼミ、赤石秀之ゼミ、胡杰ゼミ合同（2限1年生80名）（熊本好宏・鈴木正博）、4月21日石見豊ゼミ・北村仁代ゼミ・三輪晋也ゼミ合同（5限1年生77名）（熊本好宏・鈴木正博）、4月23日砂田恵理加ゼミ・柴田怜ゼミ・関口博久ゼミ合同（2限1年生78名）（熊本好宏・梶原紗千）、4月23日ホフエドマンドゼミ・助川成也ゼミ・佐藤恵ゼミ合同（5限1年

生80名) (梶原紗千・安藤志真)、4月24日齊藤良

子ゼミ・中岡俊介ゼミ・加藤将貴ゼミ合同(2限

1年生80名) (梶原紗千・安藤志真)、4月24日波

多野圭吾ゼミ・川村哲章ゼミ・本間良則ゼミ合同

(5限1年生57名) (梶原紗千・安藤志真)、4月

25日川上有光ゼミ・関田誠ゼミ・今喜史ゼミ合同

(2限1年生79名) (梶原紗千・安藤志真)、4月

25日谷山克也ゼミ・足立公平ゼミ・鈴木智行ゼミ

合同(5限1年生79名) (梶原紗千・安藤志真)

・経営学部「フレッシユマンゼミナール」講義支援

(講義・大講堂見学)・・・5月1日粟野直之ゼミ・田

淵泰男ゼミ・池元裕一ゼミ・税所哲郎ゼミ合同

(1限1年生177名) (熊本好宏・安藤志真)、

5月2日伊藤直樹ゼミ・水師裕ゼミ・平本奈央子

ゼミ合同(1限1年生134名) (熊本好宏・安

藤志真)

・文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡司

菜津美准教授・本間貴子准教授「教育学の基礎A」

講義支援・・・5月8日(講義及び大講堂見学、1限

1年生97名)、5月22日(講義、1限1年生97名)

(熊本好宏)

・4月10日文学部史学地理学科考古・日本史学コー

ス1年生学外研修「吉田松陰・国士館と彦根藩主

井伊家ゆかりの地をめぐる散策」大講堂及び展示

室見学ほか対応(1年生150名) (熊本好宏・

梶原紗千・安藤志真)

・5月7日国士館高等学校3年選択授業(書道)講

義支援(3年生10名) (熊本好宏)

・9月10日文学部島美佐子非常勤講師「社会教育演

習B」授業支援(展示室見学)(4年生10名) (熊

本好宏)

・9月30日体育学部武道学科田中理沙講師「体育実

習 空手道」講義支援(展示室見学、2限1年生

6名、3限1年生11名) (熊本好宏)

・10月8日 中高大接続行事「国士館を学ぶ」自校

史教育支援(国士館中学校1年生75名) (鈴木正

博・梶原紗千)

このほか令和6年度に再編された「全学共通教育

科目」中の必修科目「国士館を知る」(オンデマンド)

は本年度も開講された。自校史を内容とする担当3

コマ分の教材は2月に再確認を行った。

(8) 博物館実習の受け入れ

博物館学芸員資格課程の資格取得要件である博物館実習（館園実習）を実施し、実習生の受け入れを行った。博物館実習は、資料室の業務を通じて博物館の一連の諸業務に対する理解を深めるとともに、主に公開業務である企画展示の立案から展示作業までの業務を実践する内容とした。その成果は、梅ヶ丘校舎の展示コーナーにおける企画展示として一般公開を実施した。

・ 7月25日（金）～8月2日（土） 博物館実習文

学部4年生2名、21世紀アジア学部4年生1名

(9) 中学生の職場体験学習の受け入れ

世田谷区内の中学校から職場体験学習の依頼を受けて、生徒の受け入れを行った。資料室の職場や社会マナーについて学び、このうち「展示」を主な課題として取り組んでもらった。

・ 9月24日（水）～9月26日（金） 世田谷区立梅

丘中学校2年生2名

・ 10月14日（火）～16日（木） 世田谷区立富士中



博物館実習

学校2年生2名

(10) 発行者

・ 3月10日 『国士館史研究年報 楓原』第16号発行

・ 4月15日 国士館大講堂オリジナルトートバッグ

制作

(11) 国士館創立110年史編纂委員会要綱の制定

令和9年に迎える国士館創立110年を機とした

編纂事業を進めるため、創立110年史編纂委員会要綱を12月3日付で制定した。これを受けて同委員会の開催と編纂作業に向けた準備を進めている。

**(12) 故大澤英雄元理事長追悼本刊行委員会**

令和7年2月16日に在任中で逝去した大澤英雄理事長の業績をまとめる企画が浮上し、5月13日付で故大澤英雄元理事長追悼本刊行委員会要綱が制定され、同委員会及び同編集部会が発足した（庶務は理事長室企画課）。特に同編集部会は部会長に室長長谷川が、部会委員に事務長熊本が委嘱され、編集作業の実務を担うことになった。6月3日に刊行計画の策定後、編集部会では12月迄に計7回の審議を重ねて編集作業が進められた。編集にあたっては、故人が昭和31年の国士館短期大学入学以来、約70年の在籍であり、個人史とあわせて国士館史・大学サッカー史（育成史）を視野に入れたものとし、令和8年2月の一周忌迄の刊行を目的に編纂を進めた。

**4 室の構成**

**(1) 職員（令和7年）**

室長 長谷川 均（参与）

事務長 熊本 好宏

職員 齊藤 英樹

鈴木 正博

準職員 清水 邦俊（令和7年3月退職）

梶原 紗千

安藤 志真（令和7年4月着任）

アルバイト学生

鈴木玲亜 馬場英梨香 諸川涼

山口杏理 田村りな 木村玲

飯田環 今井亮太 梅田菜穂

小川修平 小室漣音 基天美

（限大講堂キヤスト）

山本哲史 副島優希 柳原綾佳

山寄大輔 小野乃愛 柏原朱李

羽場武蔵 増田華々莉

(2) 施設の概要

所在地 〒154-0023

東京都世田谷区若林 4-31-10

名称 柴田会館

構造 鉄骨鉄筋コンクリート造、地下2階、地上4階

資料室施設面積

2階・館史事務室15・3㎡、館史研究室38・4㎡、

第1史料収蔵庫63・8㎡、第2史料収蔵庫

21・5㎡(平成23年3月設置)、第3史料収

蔵庫16・2㎡(平成28年8月設置)、第4史

料収蔵庫21・1㎡(平成28年8月設置)

4階・室長室13・7㎡、閲覧室13・7㎡、展示室

119㎡

34号館(梅ヶ丘校舎B棟1階)

展示コーナー…13・1㎡

紗千)

【2月】

5日 『週刊ポスト』「ふらっと歴史建物探訪」大講堂

取材対応(熊本好宏)

7日 『国士館大学新聞』第539号「国士館史資料

室だより56 大正期「国士館要覧」(熊本好宏)「

掲載

10日 東京都文化財デジタルマップ(国士館大講堂掲

載・東京都教育庁作成)公開

12日 図書館蔵書相馬黒光署名本『アジアのめぐめー

ラス・ビハリ・ボース伝』移管(熊本好宏、齊

藤英樹)

21日 武道・徳育研究所旧蔵資料調査(熊本好宏、鈴

木正博)

【3月】

3日～26日 理事長執務室資料整理・移管(熊本好宏)

5日～5月31日 企画展「国士館の歴史」展開催(於

34号館B棟1階展示コーナー)

8日 中高卒業式・大講堂開放(28名)(鈴木正博)

10日 『国士館史研究年報 楓原』第16号発行

5 活動日誌

(令和7年1月～12月)

【1月】

24日 イラク考古庁長官来学・大講堂見学対応(梶原

中学校・高等学校職員会議等資料綴等調査・移  
管（熊本好宏・齊藤英樹）

18日 政経学部卒業生等大講堂見学対応（8名）

19日 学部別学位授与行事・大講堂開放（234名）（鈴木正博）

19日～20日 柴田会館1階正面入口の自動ドア化設備  
工事

21日 柴田会館内インターネット機器交換工事

23日 オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開  
催（於大講堂、入場者297名）

31日 室長長谷川均参与退任

準職員清水邦俊退職

空手道部学生対象「母校の伝統を学ぼう」講話  
（於柴田会館、80名）（熊本好宏）

【4月】

1日 室長長谷川均参与再任

準職員安藤志真着任

5日 新採用教員研修大講堂等見学対応（13名）（熊  
本好宏）

7日 新採用職員研修大講堂等見学対応（9名）（熊  
本好宏）

本好宏）

7日 中高入学式・大講堂開放（431名）（鈴木正博）

9日 山田輝夫氏（元山田帽子店店主）来室対応（熊  
本好宏）

10日 文学部史学地理学科考古・日本史学コース1年  
生学外研修「吉田松陰・国士館と彦根藩主井伊  
家ゆかりの地をめぐる散策」大講堂及び展示室  
見学ほか対応（1年生150名）（熊本好宏・  
梶原紗千・安藤志真）

11日 スロバキアオリンピック委員等学長表敬訪問時  
大講堂見学対応（梶原紗千）

14日～18日 大講堂「春の開放週間」（学生ガイド、  
入場者88名）

15日 資料室リーフレット「創立者 柴田徳次郎」を  
改訂

17日 文学部教育学科初等教育コース1年生学内スタ  
ンプラリー協力（大講堂開放、45名）（鈴木正博）

21日 政経学部隠岐須賀麻衣ゼミ、赤石秀之ゼミ、  
胡杰ゼミ合同「初年次ゼミナール」講義支援（講  
義・大講堂見学）（2限1年生80名）（熊本好宏・

義・大講堂見学）（2限1年生80名）（熊本好宏・

鈴木正博)

政経学部石見豊ゼミ・北村仁代ゼミ・三輪晋也  
ゼミ合同「初年次ゼミナール」講義支援(講義・  
大講堂見学)(5限1年生77名)(熊本好宏・鈴  
木正博)

23日

政経学部砂田恵理加ゼミ・柴田怜ゼミ・関口博  
久ゼミ合同「初年次ゼミナール」講義支援(講  
義・大講堂見学)(2限1年生78名)(熊本好宏・  
梶原紗千)

政経学部ホフエドマンドゼミ・助川成也ゼミ・  
佐藤恵ゼミ合同「初年次ゼミナール」講義支援  
(講義・大講堂見学)(5限1年生80名)(梶原  
紗千・安藤志真)

24日

政経学部齊藤良子ゼミ・中岡俊介ゼミ・加藤将  
貴ゼミ合同「初年次ゼミナール」講義支援(講  
義・大講堂見学)(2限1年生80名)(梶原紗千・  
安藤志真)

政経学部波多野圭吾ゼミ・川村哲章ゼミ・本間  
良則ゼミ合同「初年次ゼミナール」講義支援(講  
義・大講堂見学)(5限1年生57名)(梶原紗千・

安藤志真)

25日

経営学部山下修平ゼミ「専門ゼミナール」資  
料展示室見学(3限3年生20名)(梶原紗千)  
政経学部川上有光ゼミ・関田誠ゼミ・今喜史ゼ  
ミ合同「初年次ゼミナール」講義支援(講義・  
大講堂見学)(2限1年生79名)(梶原紗千・安  
藤志真)

政経学部谷山克也ゼミ・足立公平ゼミ・鈴木智  
行ゼミ合同「初年次ゼミナール」講義支援(講  
義・大講堂見学)(5限1年生79名)(梶原紗千・  
安藤志真)

27日

『国士館大学新聞』第540号「国士館史資料  
室」だより57・大民倶楽部の活動と柴田編『頭山  
翁清話』(熊本好宏)掲載

30日

『政経論叢』(国士館大学政経学会発行)未収集  
資料調査・移管(鈴木正博・安藤志真)

【5月】

1日

経営学部栗野直之ゼミ・田淵泰男ゼミ・池元裕  
一ゼミ・税所哲郎ゼミ合同「フレッシユマンプ  
ミナール」講義支援(講義・大講堂見学)(1

限1年生177名) (熊本好宏・安藤志真)

2日 経営学部伊藤直樹ゼミ・水師裕ゼミ・平本奈史

子ゼミ合同「フレッシユマンゼミナール」講義

支援(講義・大講堂見学)(1限1年生134名)

(熊本好宏・安藤志真)

7日 国士館高等学校3年選択授業(書道) 講義支援

(3年生10名)(熊本好宏)

8日 文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡

司菜津美准教授・本間貴子准教授「教育学の基

礎A」講義支援及び大講堂見学対応(1限1年

生97名)(熊本好宏)

9日 本学主催高等学校教員対象入試相談会にて「国

士館の歴史」展開催(於大講堂、入場者38名)

「世田谷くみん手帖」webお知らせ・イベン

ト上に「大講堂見学ツアー」参加者募集掲載

12日~16日 大講堂「新緑の開放週間」(学生ガイド、

入場者49名)

16日 世田谷区立平和資料館・川崎市立中原図書館調

査(梶原紗千)

17日 大講堂見学ツアー(学生ガイド解説2回、参加

者計13名)(鈴木正博)

世田谷サービス公社「ぐるり世田谷」大講堂見

学ツアー取材対応(鈴木正博)

18日 教育懇談会にて「国士館の歴史」展開催(於大

講堂、入場者238名)(鈴木正博・安藤志真)

22日 文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡

司菜津美准教授・本間貴子准教授「教育学の基

礎A」講義支援(1限1年生97名)(熊本好宏)

29日 国士館史資料室ホームページリニューアル

### 【6月】

1日 『区のおしらせ「せたがや」』(6月1日、世田

谷区)「区民のひろば」に「国士館大講堂見学

ツアー」情報掲載

4日~7月26日 企画展「世田谷の今昔―国士館ゆか

りの地―」展開催(於34号館B棟1階展示コー

ナー)

8日 オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開

催(於大講堂、入場者251名)

10日 「世田谷くみん手帖」webお知らせ・イベン

ト上に「大講堂見学ツアー」参加者募集掲載(鈴

木正博)

12日 平和祈念展示資料館調査(梶原紗千)

16日～20日 大講堂「初夏の開放週間」(学生ガイド、入場者16名)

17日 世田谷区立鶴巻小学校3年生及び引率教員(36名)来学時大講堂説明対応(鈴木正博)

21日 大講堂「見学ツアー」(学生ガイド解説2回、参加者計27名)(鈴木正博)

23日 国士館アーカイブズ(教職員用サイト)新規資料公開(含データベースバージョンアップ)

26日 大学史資料協議会東日本総会参加(於青山学院大学)(安藤志真)

【7月】

11日 慶應義塾史展示館資料調査(梶原紗千)

25日～8月2日 博物館実習実施(文学部4年2名、21世紀アジア学部4年1名受人)

27日 『国士館大学新聞』第541号「資料室だより58・戦後80年」その1 学徒出陣の再検証(熊本好宏)掲載

【8月】

1日～9月30日 企画展「受け継がれる表象―校章・

マーク・ロゴ―」展開催(於34号館B棟1階展示コーナー、博物館実習企画)

2日 オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催(於大講堂、入場者316名、兼博物館実習)

3日 オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催(於大講堂、入場者294名)

12日～30日 柴田会館内エレベーター交換工事

20日 小村寿太郎記念館(小村欣一・捷治関連資料)調査(熊本好宏)

30日 オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催(於大講堂、入場者370名)

【9月】

1日 学内ドキュメントステーション受託発行物資料

2日 データ収集(鈴木正博)

2日 日本史研究会部員18名展示室見学対応(鈴木正博)

10日 文学部島美佐子非常勤講師「社会教育演習B」授業支援(4年生10名)(熊本好宏)

24日～26日 世田谷区立梅丘中学校生徒職場体験(2

年生2名)

28日 教育懇談会にて「国士館の歴史」展開催(於大講堂、入場者352名)

30日 体育学部武道学科田中理沙講師「体育実習 空手道」ガイダンス支援(2限1年生6名、3限1年生11名)(熊本好宏)

【10月】

6日～11月22日 企画展「学園祭の歴史」開催(於34号館B棟1階展示コーナー)

8日 中高大接統行事「国士館を学ぶ」自校史教育支援(国士館中学校1年生75名)(鈴木正博・梶原紗千)

13日～17日 大講堂「秋の開放週間」(学生ガイド、入場者26名)

14日 世田谷区立富士中学校生徒職場体験(2年生2名)

15日 昭和45年度体育学部卒業生同期会大講堂・展示室見学対応(学生ガイド解説・参加者27名)(鈴木正博)

18日 大講堂「見学ツアー」(学生ガイド解説2回、

参加者計19名)(鈴木正博)

27日 『国士館大学新聞』第542号「資料室だより 59・「戦後80年」その2 特攻隊となった国士館生(梶原紗千)」掲載

28日～11月4日 創立記念展「国士館生の記憶と記録」(来場総計2130名)

30日 大学サッカー部戦績調査(於国会図書館)(熊本好宏)

31日 エフエム世田谷による大講堂「見学ツアー」学生ガイド電話取材対応(鈴木正博)

【11月】

2日～3日 東京文化財ウィーク特別公開事業参加(国士館大講堂の公開)

5日 大学サッカー部戦績調査(於国会図書館)(熊本好宏)

7日 エフエム世田谷にて大講堂「見学ツアー」学生ガイド取材放送

10日～14日 大講堂「紅葉の開放週間」(学生解説ガイド、入場者27名)

12日 太宰府市長展示室見学対応(鈴木正博)

15日 大講堂「見学ツアー」(学生ガイド解説2回、  
参加者計9名)(鈴木正博)

17日～12月22日 柴田会館内の空調設備交換工事

17日～ 展示室を閉室(令和8年1月31日迄)

26日～3月4日 企画展「国士館大講堂」展開催(於  
34号館B棟1階展示コーナー)

【12月】

3日 国士館創立110年史編纂委員会要綱の制定

8日 宮内公文書館調査(梶原紗千)

27日 TBS系列「報道の日2025」にて国士館専  
門学校教授中島利一郎写真資料の放映

## 関連規程

# 国士館史資料室規程

### (趣旨)

**第1条** この規程は、国士館史資料室（以下「資料室」という。）の組織及び運営について定める。

### (目的)

**第2条** 資料室は、国士館の歴史に関わる文献、文書及び物品等（以下「資料」という。）を収集・整理・保管し、将来に継承して、建学の精神の高揚と学園及びその教育・研究の進展等に資することを目的とする。

### (資料室長)

**第3条** 資料室長は、理事会の議を経て理事長が委嘱する。  
2 資料室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

### (職員)

**第4条** 資料室に、必要な職員を置く。

### (学術調査員)

**第5条** 資料室に、学術調査員を置くことができる。

2 学術調査員は、本学園の教職員のうちから資料室長が推薦し、理事長が委嘱する。

3 学術調査員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 学術調査員は、資料室長の指示を受け、次の調査研究等に従事する。

- (1) 本学の理念及び本学史に関すること
- (2) 資料の収集・整理・保管等に関すること
- (3) 年史・資料集等に関すること

(4) その他資料室に関わる学術的事項

(専門員)

**第6条** 資料室に、専門員を置くことができる。

2 専門員は、資料室長の指示を受け、次の業務に従事する。

- (1) 資料の収集・整理・保管・展示及び情報収集
- (2) 年史・資料集等の企画及び編纂
- (3) その他資料室に関わる専門的事項

3 専門員の任用期間は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

(収集資料)

**第7条** 資料室は、次の資料を収集する。

- (1) 国士館の建学の精神に関する資料
- (2) 国士館の発展の経緯に関する資料
- (3) 国士館が設置する諸学校に関する資料
- (4) 国士館の創立者及び先人に関する資料
- (5) その他国士館に関する資料

(所蔵資料の開放)

**第8条** 資料室は、学園内外の希望者に所蔵資料を開放し、教育研究に資するとともに学園の歴史の紹介に努めるものとする。

2 資料室の開室及び所蔵資料の閲覧等の細部は、別に定める。

(資料の貸出し)

**第9条** 資料室の所蔵資料は、貸出しをしないものとする。ただし、教育研究及び学園の広報に役立つ等、特に必要性が認められた場合は、所定の手続を経て貸出しをすることができる。

(資料の管理)

**第10条** 資料室の資料及び物品の物品管理責任者は、資料室長とする。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

『国士館史研究年報 楓原』執筆要項

国士館史資料室では、『国士館史研究年報 楓原』に掲載する、国士館に関わる論文や国士館在学中の思い出を綴った原稿などを募集します。執筆を希望される方は、必ず事前にお問い合わせください。

◇注意事項

- ・原稿は書き下ろしとし、他誌との二重投稿はご遠慮下さい。
- ・編集の都合上、原稿の修正や次号以降への掲載をお願いする場合があります。または掲載をお断りする場合があります。
- ・原稿は、『国士館史研究年報 楓原』および学校法人国士館のウェブサイト(PDF)で公開されますが、これらの著作権はすべて学校法人国士館に帰属します。

◇原稿について

- ・原稿はA4判(横長)、四〇字×三〇行、縦書きで提出してください。図表はこの限りではありません。

- ・原稿は四〇〇字詰原稿用紙に換算して、次の枚数を目安にしてください。(図表・図版・写真・註を含む)

論文 五〇枚程度

研究ノート 二〇〜四〇枚程度

国士館を支えた人々 五〜七枚程度

国士館の思い出 五〜一〇枚程度

- ・写真・図版等で掲載・転載許可が必要な場合は、執筆者が許可を得てください。

- ・写真や表計算ソフト等で作成した図表は、別ファイルにして提出してください。

- ・ご提出いただいた原稿は返却いたしません。

- ・原稿締切 毎年九月末日頃(翌年三月刊行予定)

◇問い合わせ先

学校法人国士館 国士館史資料室  
〒154-8515

東京都世田谷区世田谷4-28-1 柴田会館2階

TEL 03-3418-2691

FAX 03-3418-2694

Email: archives@kokushikan.ac.jp

編集後記

『国士館史研究年報 楓原』は、無事に第17号の刊行を迎えることができました。これもひとえに本号へご寄稿いただきました、山本匡毅氏、小濱修氏、横道正明氏をはじめ、皆様のご尽力の御蔭です。厚く御礼申し上げます。

本年度は、戦後80年ということで、戦中戦後の学園の様子や、学生がどのように過ごしていたのかを創立記念展で紹介することができました。これまでご寄贈いただいた写真、アルバム、出征旗、回顧記など、普段展示できない資料をみなさまにご観覧いただき、充実した企画となりました。

国士館史資料室は、これまで学園が育んできた豊かな歴史や、その生き証人である資料などを次世代に継承し、展示・紹介することで、学園の一助となるよう活動を続けていく所存です。資料収集へのご協力も引き続き宜しくお願いたします。今後とも、これまで同様ご支援いただけますと幸いです。

(梶原紗千)

執筆者紹介 (順不同)

山本匡毅 成城大学社会イノベーション学部教授  
 小濱修 国士館卒業生・元職員  
 横道正明 国士館卒業生・元職員  
 梶原紗千 国士館史資料室室員

国士館史研究年報 楓原 二〇二五 第17号

令和8年3月10日発行

編集 国士館史資料室

発行 学校法人国士館

〒一五四―八五一五

東京都世田谷区世田谷四―二八一―

TEL 〇三―三四―一八―二六九一

Fax 〇三―三四―一八―二六九四

E-mail archives@kokushikan.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社





ISSN 1884-9334